

魔導士ルーファス

飛んでリベンジ

秋月あきら

プロローグ

奥様の名前はビビ、そして旦那さまの名前はルーファス。

ごく普通の二人は、ごく普通の恋をし、ごく普通の結婚をしました。

でも、ただ一つ違っていたのは、奥様は仔悪魔だったのです。

「そのナレーションには語弊があるよ！ 仔悪魔だつてどこ以外全部ウソじゃないかっ！」

「そんなこと言っちゃっていいのかなあダーリン」

不敵な笑みを浮かべてビビは契約書突き出した。

「控え居ろっ、この契約書が目に入らぬか！」

グリグリとルーファスの顔面に押し付けられる悪魔の契約書。

今にもチビリそうな顔面蒼白なルーファス。

「ウギヤアアアーツ！」

そして、実力行使が行われたのでした。

放心状態のルーファス。

仔悪魔の笑みを浮かべるビビちゃん。

ビビとルーファスがドラ焼き一〇〇個で交わした契約は、絶対なものでした。

第一話 仔悪魔ちゃん勝手に召喚！

《一》

ご近所でも有名なへっばご魔導士ルーファスのご帰宅。

今日もいつものように魔導学院に行き、いつものように一戸建ての借家にご帰宅。

ちよっぴり肩を落とした後ろ姿から察するに、いつものように先生に叱られたか何かトラブルを起こしたらしい。

しかし、そんなルーファスにさらなるトラブル……そう、悪魔の罠が待ち受けているなんて、目の前のことで人生いっぱいいっぱいのルーファスは知る由もなかった。

むしろ、知っていたら魔導士を指すより、エスパ―を指しなさい！

いつものようにポストを確認するルーファス。

なんと！！

そこに運命的な出会いが待ち受けていた。

「……カップラーメン？（んなアフォな）」

心の中でセルフツッコミをするルーファス。

ルーファスはグルグル眼鏡を少し上げ、目をゴシゴシこすって自分の目を疑った。

だって、ポストの中にカップラーメンが入っていたんです

4 飛んでリベンジ

よ！

そりゃ誰でも自分の目を疑うってもんです。

こんな衝撃的な出会いに、ルーファスはカップラーメンを手にとつて、頭の上にクエスチョンマーク。

「海鮮ドクドクモンスター風味、一二パーセント増殖中……？」

絶対食べたくない。

中途半端なパーセンテージだし、増量じゃなくて増殖？

いったいカップの中でどんな生命の営みが行われているのだろうか？

常人であれば、こんなカップラーメンは見なかったことにするか、もしくはごみ箱行きだ。

だって毒が入っているかも知れないし、最悪謎の生命体が増殖しているかもしれない。

しかし！！

「食べてみようかな」

ちようど小腹も空いていたし……ってそういう問題かつ！

というノリツツコミ。

カップラーメンを持って、ちよっぴりルンルンで家に入り、そのままキッチンにレッツ&ゴー！

フタを几帳面にめくつて、中に入っていた謎のかやくAとBを混ぜて、謎の液体AとBを調合して、なんだか魔法薬を作る工程のようだ。

そして、ポットからお湯を注いで三分くらい待つ。

ワン、ツー、三分待たずにフタ開ける。

カップラーメンの中からありえない量の煙がモックモック。
濃霧警報発令！

立ち昇った煙で視界が奪われてしまった。

しかも煙を吸ってせき込んでしまいうるーファス。

ま、まさかこの煙は毒なのかっ！

そんなこんなで湯煙り殺人事件が起こるのかと思いきや、晴れた煙の中から現れたのは生着替え中の美少女。

ピンクのツインテールが特徴的な、小柄で厚底ブーツの美少女。ちなみに今日のパンティーの色は白だ。

しかもお尻にはクマさんプリント。

目と目が合って、美少女は顔をピンク色に染めた。

「あっ……（見られてる）」

「どういう仕様だよっ！」

「三分って書いてあったの読んでないのバカーッ！」

怒鳴り声をあげた美少女の回し蹴りがルーファスの顔面にヒッ！

いろんな意味で鼻血ブー！

ルーファスはエビ反りのまま後方にぶっ飛んだ。きつと演出的にはスローモーション。

ほっぺたを膨らませて、美少女はポンポンしながらカップラーメンの中へ帰って……帰って……帰った？

「カップラーメンに住んでるのっ!？」

鼻血をポトポトしたままルーファスはツッコミを入れたが、

その声はキツチンに響いただけで返答はなかった。

誰もいないところでツツコミを入れても、友達のいないただの寂しい人だ。

腰が引けたままルーファスは恐る恐る、手なんかブルブルさせながら、カップラーメンのフタに手を伸ばした。

ここでフタを開けるか、それとも開けないのか？

人生の岐路に立たされてしまったルーファス。

果たして彼の下した決断とはっ！！

ルーファスがフタを開けようと手を伸ばした、そのとき！

フタが勝手に開いて煙がまた勢いよく噴き出した。

腰を抜かしたルーファスの視線の先には、白い煙に映るツイ

ンテールの少女のシルエット。

「呼ばれて飛び出てチャチャチャァン！」

カップラーメンの中から現れた謎の美少女。着替えも終わり

完璧だ。

ゴス+パンクでゴスパンクの格好をしたピンクの髪の美少女。

ニッコリ笑う口から覗く八重歯がチャームポイントだ。

テーブルの上に仁王立ちするミニスカの少女。ルーファスの

目はおのずとソツチ方面に行ってしまった。

「あのお……パンツ見えてるよ」

「えっち！」

謎の美少女はテーブルの上からジャンプして、そのままルー

ファスの顔面に膝蹴り！

「ぐはっ！（教えてあげただけなのに）」

鼻血をプーしながらルーファスは床に後頭部ゴン。

天井を見つめるルーファスの眼前に突き付けられる謎の紙。
謎の美少女の唐突発言。

「早く契約書にサインしてよ」

「……は？（悪徳商法？）」

「アタシを呼び出しておいて契約しないっていうのは、そりやお客さん困りますぜ」

「……いや、だからさ、まず君だれなの？」

尋ねながらルーファスはどっこらせと立ち上がった。

美少女は八重歯を覗かせニカつと笑った。

「アタシの名前はシェリル・ベル・バラド・アズラエル。愛称はビビ、よろしくね」

「で、何者なの？（カッププラーメンの守護神？）」

「職業は仔悪魔見習い。それでも魔界ではちょくカワイイ仔悪魔でちよつとは有名なんだからね！」

「で、なんでカッププラーメンから出てくるわけ？（そんな召喚聞いたことないぞ）」

「まっ、それは話せば長いんだけど……そんなことより契約してよ！」

再びルーファスの眼前に突き付けられる契約書。

「契約って言われてもまだ私は学生の身だし」

ルーファスは断る口実を考えながら鼻血を拭く物を探していた。

そんなルーファスに差し出される紙。

「ああ、ありがとう……って契約書じゃん！」

親切でティッシュでも渡してくれたのかと思いきや、思いつきり契約書だった。

契約書は羊皮紙の本格派で、文字も古代文字で書かれていた。仔悪魔＋契約書＝悪魔の契約。

そんな契約を結ばされて、命なんて代償にされたら堪ったもんじゃない。ルーファスは羊皮紙を叩き返した。

「契約なんて絶対しないから、早く帰ってよ」

その言葉にビビは唇を尖らせた。

「冷やかしですかお客さん？ 人の生着替えやパンツを見といて、ただで済ませようとしてるんですかい？」

ビビは近くにあったイスを蹴つ飛ばして破壊した。悪徳業者だ。

壊れたイスを見て凍りつくルーファス。

美少女の仮面を被った怪力女。

そもそも悪魔って種族は人間より身体能力が優れ、少女の見た目をしていても人間の何倍も生きていたりする。

契約しないと痛い目に遭いそうだ。でも、契約したら……？

こうなったら奥の手を使うしかない！

ルーファス逃亡！

敵に背を向けてルーファスは全力疾走しようとした。

が、その足が地面に張り付いたように止まった。

全身から冷汗を噴き出して、顔を真っ青にするルーファス。

その首に突き付けられているは大鎌の刃だった。

ニツコリ笑顔で大鎌を持っているビビちゃん。そのまま鎌を引つ張ったら首が飛んじやいますよ状態。

「もしかして逃げる気じゃないでしょうねえ？（美少女仔悪魔ビビちゃんから逃げようなんて一〇〇〇年早いよ）」

「逃げるなんてとんでもない。ちょっとトイレに行こうと思っただけだよ」

「トイレなんていいから契約書にサインしてよ」

ここでサインしなかったら、首が宙を飛んじやうことになりそう。

「わかつたから、まずはこの鎌を退かしてくれないかな？」

「逃げたら地獄の果てまで追いかけるよ」

「逃げないから、大丈夫だから（スキがあったら逃げるけど）」

「仕方ないあ」

大鎌が退かされ、やっとルーフアスは死の恐怖から解放された。

ほつと溜め息を洩らすルーフアス。

「ふう、とりあえずお茶でも飲んでゆっくり話し合おうよ（その間になにか打開策を考えなきゃ）」

「お茶菓子はなしの、お茶菓子？（ショートケーキがいいなあ）」

「（……物言いがどっかの誰かさん似てる）」

知り合いの魔女の顔を思い浮かべながら、ルーフアスは黙々と紅茶をいれて茶菓子も用意した。

テーブルに座るビビの前に出されたのは、某ネコ型ロボットも大好きだというドラ焼きだった。

それを見たビビは目を丸くする。

「なにこの未確認飛行物体みたいな固形物は？（こんな食べ物はじめてみたかもあ）」

「うちの学校の先生が東方のおみやげだってくれたんだ。名前はたしか……ドラ焼き？」

「美味しいの？」

「美味しいよ（僕はまだ食べたことないけど）」

こんなドラ焼きがあることすら忘れていて、賞味期限がちよっぴり切れていたりした。

ちなみに、ビビに毒味をさせようとしているわけでなく、もともとルーファスは賞味期限が切れても平気で食べちゃう人だったりする。

しばらくドラ焼きを観察していたビビだったが、ついに手にとって口を大きく開けてパクッ。

その瞬間、口に広がる香ばしく甘い小豆の食感。

「美味しいー！」

「（美味しいんだ。早く食べちゃえばよかったなあ）」

「ねえ、もつとないの？」

「ないよ。一個しかくれなかったんだ（まあ偶然職員室に用があつて、たまたま貰えただけだし）」

「ええーっ、これはラアマレ・ア・カピスに勝るとも劣らない美味しさだよ。こんな小さいの一個で満足しろって言われても

無理だよお！」

ラアマレ・ア・カピスとは通称ピンクボムと呼ばれ、かなり
の高級品で食べると脳みそが爆発するほどの美味しさの果物だ。
ここでビビの頭の上で豆電球がピカーンと光った。

「そうだ、契約の代償はドラ焼き一〇〇個にしてあげる！」

ナイスなアイディアにビビちゃん自信満々。再び契約書を出
してテーブルにバーンと叩きつけた。

魂を代償にされるよりはよっぽどマシだが……。

ルーファスには疑問があつた。

「ところで契約したら何してくれるの？」

「それは契約してからの楽しみ」

「……………（あからさまに怪しい契約だ）」

怪しい契約書にサインして、借金の連帯保証人にされるかも
しれない。

でも、ここでサインしなかったら……。

ルーファスはビビが手に持つてる物を見て怯えた。

「なんで包丁なんか持つてるの!?(やっぱり殺される?!)(」

「ほら、契約書にサインするとき血が必要でしょ。だからこれ
で指を詰めて、ねっ?」

笑顔で怖いことを言うビビ。しかも指を詰めるって言葉の使
い方が間違っている。

無邪気に笑いながらビビは包丁をブンブン振り回している。

ルーファスはすぐそこに迫る命の危機を感じた。

「契約書にサインします。けどさ、血じゃなくてボールペンじ

12 飛んでリベンジ

やダメかな、赤インクにするから？」

「別にいいよん、血は雰囲気の問題だし」

雰囲気かよっ！

ルーファスの目の前にある契約書。古代語で書かれていて、あんまりよく意味が理解できない。言語関係の授業があんまり得意じゃなかったりするルーファス。

ボールペンを握ったまま固まるルーファス。

「ええつと、どこにサインすればいいのかな？」

サインする場所がわからなかったりした。

「ココ、ココ、この下のところに名前書いて」

なんて教えてもらいながら、ついにルーファスは契約書にサインをしたのだった。

「よし、書けた」

「じゃあ、名前教えて」

「ルーファスだけど？」

「ふん、ルーちゃんか。じゃあ、こっち顔向けて」

言われるままにルーファスが顔を向けた瞬間、チュッ

唇と唇が重なり、蕩けるようなドラ焼き味のキッス。

目をパチクリさせてルーファスの瞳孔は限界まで開かれた。

ビビの顔が離れても、ルーファスの脳ミソはどこかに飛んだままだった。

一方ビビは紅茶を飲んで何事もなかったような振る舞い。

だんだんと現実に戻って来たルーファスは、自分の身に起きたことを理解しはじめた。

「ちよつと整理しよう。僕はドラ焼きを食べたのか？ いや、違う。……接吻……接吻したでしょ、接吻したよね！」

「接吻って、なにそのカビの生えたような言い方。別に減るもんじゃないし、こんな美少女とチューできるなんてラッキーじゃない？」

「物理的に減らなくても精神的に減るでしょ！」

異常なまでにシヨックを受けるルーファス。

しかも、興奮したせいか、ルーファスの鼻からツーツと赤い液体が……。

冷めきつた目でビビは紅茶を飲み続けている。

「（また鼻血出してるし……ダサッ）ファーストキスってわけじゃないんですよ。なにそんなに取り乱してるのお？」

「ファ、ファーストじゃないよ！」

「その慌て方……もしかしてファーストだったの!？」

「ち、違うよ！ 三回……いや二回……！」

サバ読もうとした？

熱くなつた頭を冷やすため、ルーファスは何を思ったのか水道の蛇口から冷水を出して、なんと頭からそれを被った。あぶおだ。

ルーファスは長髪だからそりやもうビシヨビシヨ。結わいてる髪をほどいたら、落ち武者ヘアーになりそうだ。

冷水を浴び続けているルーファスの背中に、ビビはポンと手のひらに乗せた。

「落ち込まないでダーリン」

「はあ？」

ダーリンという言葉の意味をルーファスは一生懸命考えた。でも、正しい答えが出ても否定。

ルーファスは濡れた髪をかき上げながら、急に真顔になってビビを見つめた。

「今さ、ダーリンって言ったよね？」

「ルーちゃんはウチのダーリンだっちゃ」

「なにその某鬼娘のパクリみたいな……」

「だってコレにサインしたじゃん？」

コレが再びルーファスの眼前に突き付けられた。そこにはしっかりと直筆でルーファスの名前が書かれている。

CPUの処理能力を超えた出来事に、ルーファスは強制終了した。

そして、再起動で立ち直り。

「はあ!？」

つと、びっくりこいた。

ルーファスの目の前を泳ぐ古代文字の羅列。

「読めないし、なんて書いてるんデスカ？」

「ああ、これね。婚約書だけど？」

「はあ!？」

つと、またびっくりこいた。

結婚は地獄なんて例えはあるけど、ルーファスがサインしたのは、なんと婚約書だったのだ。

サギだ！

「そっだよ、サギじゃないかっ！」

「サギだなんてひどい、アタシたちあんなに愛しかったのに」

「いつどこで!？」

「あんな蕩けるような甘いキッスをした仲じゃん？」

ドラ焼き味の。

「私は認めないからね。クーリングオフだクーリングオフ！」

「返品は認められません。だってもう使用済みだもん」

「使用済みってなに使用済みって！」

「アタシの唇を奪っておいて……ぐすん」

「奪ったのはそっちだろ！」

強気に出るルーファスだったが、その顔が急に自信なさ気に変わって行く。

無邪気な笑みを浮かべるビビ。その眼の奥にある何かをルーファスは本能的に感じ取ったのだ。

悪魔の契約書がルーファスの顔面にグリグリされた。

「控え居ろう、この契約書が目に入らぬか！」

ジトジトした空気が部屋を駆け巡り、背中に蟲が這うような悪寒。

ビビの持つ契約書が風もないのに激しく揺れる。

怯えたルーファスは逃げ場を探して壁に背中をぶつけた。

「逃げてもムダだよお、地獄の果てまで追いかけるって言ったじゃん……あはは」

まさにビビが悪魔の笑みを浮かべた瞬間、ルーファスは契約

書から這い出た黒い影を見た。

そして、そこで記憶がブツリ。

「ウギヤアアアーツ!!!」

ここでは描写できない、あんなことやそんなことが行われたのでした。

《一一》

「ウギヤアアアーツ!!!」

叫び声をあげながらルーファスは目を覚ました。

放心状態になりながら、自分の身になにが起こったのか思い出そうとするも、あまりの恐怖体験に記憶に力ギがかかってしまっていた。

「(夢だったのかな……) って現実にいるし!」

「オイッス!」

仔悪魔ビビはテーブルに肘をつきながら、寛ぎモード全開で紅茶をすすっていた。新居に落ち着いちゃった感じ?

カップラーメンから仔悪魔が出てきたのも、不意に唇を奪われてしまったのも、ぜんぶ現実だったのだ。

「なんで……まだいるの?(完全に居座ってるし)」

「新婚旅行はどこ行こうか?(景色の綺麗なところがいいなあ)」

しかもビビが見ている本は式場のカタログだったりする。

「ちょっと待って、結婚とかしないから」

17 飛んでリベンジ

「ええ〜っ、誓いのキスだつてしたじゃ〜ん？」

「ちよつと、ちよつとちよつと」

「引き出物はなにしようか？」

話はルーファスを置いてどんどん進んでいた。

「ちよつと、ちよつとちよつと。婚約破棄したいんだけど？」

「……それ、マジで言ってるの？」

ギロつとした目つきで睨まれた。

でもここで臆したら負けた。きつと地獄の結婚生活が待っている。

ルーファスはがんばった。

「まだ結婚したわけじゃないんだから、婚約は破棄だよ破棄！」

「悪魔の契約書は一度契約したが最後だもん。取り消しはできません〜ん」

ルーファスの通う魔導学院にも契約マニアの黒魔導教師がいるが、契約を破つたらそりやもう酷い目に遭わされる。

急にビビが目尻に手を当てる涙ぐんだ。

「アタシとの恋は遊びだったのねえ〜！（なんちゃって）」

思いつきりウソ泣きだった。

鼻をすすりながら肩を揺らすビビを見て、ちよつと焦るルーファス。ウソ泣きだつてことに気づいてなかった。

「だ、大丈夫？（これって僕のせい？）」

「どーせアタシは都合のいい女。どーせ使い捨てる女だったんでしょーう！」

今度は逆ギレ。

ビビの態度の急変でたじろぐルーファス。

「え、あの、その、僕が悪かったです（ってなんで謝ってるんだ？）」

完全に相手のペースに乗せられていた。

そして、またビビの態度は急変した。

「でもまだやり直せるわアタシたち。これから一緒に頑張りましょう！」

ビビはずぶ濡れのままのルーファスを優しく抱きしめた。

貧乳がルーファスの腕にじゃっかん当たる。

このまま騙されそうになったルーファスだが、この状況をよく考えるとやっぱり可笑しい。

「違うよ、結婚とかしないから離れてよ！」

ルーファスはへばりつくビビを引き剥がすように突き飛ばした。

バランスを崩したビビが四つん這いで床に倒れる。その瞬間、スカートが捲れあがってパンティーのバックプリントがチラリン

「あ……クマだ」

ボソツとルーファスは呟いた。

またルーファスの鼻からは鼻血が垂れていた。そのうち絶対貧血で倒れる。

四つん這いから起き上がろうとしているビビは、肩を震わせ小さな笑い声を発していた。

「ふふ〜ん、アタシを怒らせたらどーなるかわかってるでしょうねえ？」

振り返ったビビはババーンと契約書を突き出した。

魑魅魍魎が踊りだすみたいだな、そんな禍々しい妖気を放つ契約書。

もはやトラウマとなったルーファスの記憶が呼び起こされようとしていた。

長くて生温かい又メ又メしたアレで、あ〜んなことや、こ〜んなことや、そ〜んなことまでされてしまう。

蒼い顔をしたルーファスは少しづつ後退しながら、後ろに手を回してなにかを探しているようだった。

その間もビビは契約書を持って迫りくる。

「あはは、逃がさないんだから」

感情のない笑いがとても怖い。

「……逃げません（やつと開いた！）」

ルーファスはキツチンの勝手口を開けて逃亡を図った。

「やっぱり逃げます！」

一気にルーファスは逃走した。

残されたビビは『しまった』という顔で呆然とした。

「……あーっ、逃げられたあ！」

急いでビビはルーファスを追った。

裏庭の塀を乗り越えようとしているルーファスの姿が目に入る。ニメートルくらいある塀だが、必死なルーファスは登りきるうとしていた。

そんなルーファスが必死で登った塀を、ビビは簡単にびよんと飛び越えた。

「ダーリン待って！」

「待つもんか！」

一度ルーファスは振り返って、再び全力で走ったそのとき！ あっちの方から走ってきた白馬にルーファスが撥ねられた！！

サイボーグ馬の馬力はそりやもうスゴイ。撥ねられたルーファスは宙を三回転して地面に激突。

それを見たビビはボソツと。

「……死んだ？」

ルーファスの指先がピクピク動く。

「……生きてるから」

虫の息状態のルーファスの声が返ってきた。

白馬から降りた貴族風の青年がルーファスに駆け寄った。

「大丈夫かルーファス！」

ルーファスの名前を知っている謎の青年。その正体はルーファスの同級生のクラウスだった。しかも、学生は仮の姿でアステア王国の国王だったりする。

鼻血をダラダラ流しながらルーファスは立ち上がった。

「私を撥ねたのクラウスだったのか……（死ぬかと思った）」
奇跡的にルーファスは鼻血を流しただけで済んだのだった。

「すまない、急におまえが飛び出してくるから」

謝りながらクラウスはルーファスの腕にしがみつくナマモノ

を見て、不思議そうな顔をして言葉が続ける。

「ところで、そのレディは誰だい？（こんな可愛い子とまだ出会っていなかったなんて）」

ルーファスが答える前に、ビビが素早く口を開いた。

「ルーちゃんの婚約者のビビちゃんです」

「こ、婚約者だって！」

ズカーンと衝撃を受けるクラウド。

恋人がいるってだけでも驚きなのに、まさかルーファスに婚約者がいたなんて、世界は明日にも破滅する。ルーファスはあくまで認めていないが。

クラウドはビビの手をぎゅっと握った。

「こんなカワイイ子がいたなんて、なんで今まで僕に黙ってたんだ。水臭いじゃないか、僕がビビちゃんを奪うとも思ったのか！」

もうすでにクラウドはビビの手を握って離さない。奪いそうな雰囲気だ。

でも、ビビはクラウドの手を振り解いて、ルーファスの腕にぎゅっと掴まった。

「アタシを誘惑しようとしてもムダだよ。アタシのダーリンはルーちゃんだけだもん！」

なんて深い愛の絆。一方的な。

ルーファスは必死になってビビを引き離そうとしていた。

「だからちょっと意見の相違があるだけで、この子と違ってさつきはじめて会ったわけだし」

「電撃結婚かっ！」

クラウスが声をあげた。完全に話はそっち方向で進んでいる。否定しようとルーファスが口を開こうとしたとき、掴まれていた腕が折れそうになる圧力が加わった。横ではビビが笑顔でルーファスを見つめている。

ここは無理やり笑つとくしかなかった。

「あはは、ビビったら人前でそんなにくつつくなよ、あはは（う、腕が粉碎する）」

「あはは、だっていつもダーリンの傍にいつもいたいんだもん（逃げたら地獄の果てまで追いかけるからね）」

結婚する前からすでに仮面夫婦。

一見してラブラブな二人を見て、クラウスは身を引くことにした。

「二人の邪魔をして悪かった。僕はもう行くことにするよ。ルーファスまた明日学校でな」

背中を向けて歩き出したクラウスが、不意にグツと後ろから引っ張られた。

クラウスの服を掴んでいたのはルーファスだった。

「積もる話もあるしウチ寄ってお茶でも飲んで行つてよ（頼みの綱はクラウスだけだ、ここでビビと二人になったら……確実に殺される）」

ルーファスの思惑とは反対に、ビビはさっさとクラウスに消えてほしかった。

「今日は二人で夜空を見ようねって約束したじゃ〜ん」

そんな約束した覚えなどないが、ここはうまく切り返さなければいけない。

「まだ星ひとつ見えないよ。それまでの間、クラウスといてもいいじゃないか？（お願いだからクラウス帰らないで）」

「ええ、っ、アタシはダーリンと二人でいたいのお（アタシと徹底的にやりあう気？）」

「クラウスは幼いころからの知り合いだから、ビビのことを知って欲しいんだよ（クラウス察して！）」

「やだよだ、アタシはダーリンと二人つきりがいいのお（早く帰ってくれないかなあ）」

どっちも譲る気がないので、判断はクラウスに任せられた。

ルーファスとビビの視線がクラウスに注がれる。

「やっぱ僕は行くことにするよ」

ビビ（女の子）の意見が優先された。

行ってしまうおとするクラウスを泣きそうな顔を見つめるルーファス。アイコンタクトで助けを求めるがうまくいかない。

こうなったら腕を一本粉砕される覚悟で叫ぶしかない。

「助けてクラウス！」

ついにルーファスが叫んだ。次の瞬間、ボキボキという音が木霊した。

声も出せずに口を開けて死相を浮かべるルーファスを見て、なんだか雰囲気を変だということにクラウスが気づいた。

「どうしたルーファス！」

「た……助けて……この悪魔に……殺される……」

痛がるルーファスの横ではビビが笑顔ですっ呆けている。

だが、もう可愛い仔悪魔の仮面にクラウスが騙されることはなかった。

「今すぐルーファスを離せ！（やっぱりルーファスに婚約者だなんて話が変わだと思っただ）」

クラウスは封印されていた鞘から聖剣ウィルオウイプスを抜いた。

切っ先を向けられたビビは涙ぐんでクラウスを見つめる。

「こんな可愛い女の子に剣を向けるなんてヒドイ……本当にアタシを斬れるの？」

「いや、斬れない」

「あっさりクラウスは聖剣を鞘に戻してしまった。

どんな事情があろうとクラウスは女性に攻撃ができない。それはルーファスにもわかっていたことだった。

激しくルーファス形勢不利！

頼みの綱のクラウスは女性に手をあげられないし、ルーファス本人は人質のままだ。

交渉の基本は話し合いから。クラウスは状況を整理することにした。

「いつたいビビちゃんは何者で、どうしてこんな状況になったんだ？」

「……カップラーメン……」

その言葉を残してルーファスは力尽きた。何も知らない人に

してみれば、暗号以外の何物でもない言葉だ。

力尽きたというか、防御本能が働いて現実逃避したルーファスをビビが抱きかかえた。

「ダーリンしっかりして！」

その慌て方はさっきまで腕を粉碎させようとしていたとは思えない。マジでルーファスのことを心配しているようだった。

ビビの姿を見てクラウスはさらに困惑した。

数分前、ルーファスはクラウスに助けの言葉を発して、さらに『悪魔に殺される』とまで言った。

それがどーしたことが、意識を離脱させたルーファスの心配をするビビの姿。

「ダーリン死なないで！」

悲痛な絶叫が木霊した。

そして、奇跡が起こった。

なんとルーファスが目を覚ましたのだ。

「(……なんか怖い夢を見た)……あっ」

ルーファスは自分の顔を覗き込んでいる仔悪魔と目が合ってしまった。

そして。

「(もう一度、気を失おう)」

ガクッとルーファスは気を失ったフリをした。

そこでビビちゃんの平手打ちが炸裂！

「気を失ってるフリしてんじゃないのっ！」

ちよっぴり怪力の仔悪魔にぶん殴られて、ルーファスはぶっ

飛んだ。

弾丸のようにぶっ飛んだ先に立っていたのはクラウス。

クラウスは全身でルーファスを受け止めナイスキャッチ！

結果的にルーファスはビビの拘束から逃げられたりしていた。

もしかして形勢逆転!?

すぐにルーファスはクラウスの背後に隠れた。

「クラウス助けて、この悪魔に無理やり契約書にサインさせられたんだ！」

「悪魔の契約書の効力は絶対だ……ルーファス諦めろ！」

と、軽い感じでクラウスはルーファスの肩を叩いた。

「ヤダよ、だってこのままじゃ結婚させられるんだから！（結婚は墓場とかいうけど、本当に墓場入りしかねない）」

「別にいいじゃないかルーファス、こんな可愛い子と結婚できるなんて幸せ者だぞ」

「じゃあクラウスがビビと結婚すればいいじゃないか！」

「僕はこう見えても一国の王だからね、結婚する人は慎重に選ばなきゃいけないんだ」

「ビビを押し付け合う二人。そんな扱いを受けてビビはちょっとブンブンだった。」

「ちよつとお、ちよー可愛いアタシを取り合うならわかるけど、なにその譲り合うみたいない感じ」

そして、ビビは悪魔の契約書を取り出して言葉を続ける。

「でもこの契約書がある限り、ダーリンはアタシのものだもんね！」

蘇る恐怖の記憶。ルーファスはクラウドの背中に隠れて震えた。

結婚するのも嫌だ。でも契約を破れば酷い目に遭う。

契約書から発せられる禍々しい気をクラウドも感じていた。

「あの契約書……（並みの力じゃない）。見た目は可愛い仔悪魔だが、上級悪魔だな？」

「わっかるう？ うんうん、きつとあなた出世するよ！」

ちよつと嬉しそうにモジモジするビビ。褒められるのに弱いらしい。

ルーファスはクラウドの背中越しに、疑いの眼差しでビビを見ていた。

「本当に上級悪魔なの？ だってカップラーメンから出てきたよ」

「そうそう、なんでカップラーメンの中に入っていたのだろうか？」

「アタシの可愛さを見てよ、どうみたって上級じゃん？ カップラーメンに入ってたのは、閉じ込められてたっていうか、ま

あ……（やっぱりヒミツにしておこ）」

魔法のランプに閉じ込められたという話はあるが、いったいビビはなぜカップラーメンなんかにか？

ここでルーファスはひらめいた！

「閉じ込められたってことは……極悪人！！」

ビビちゃんショック！

「こんな可愛いアタシに向かって極悪人だなんてヒドイ……ぐ

すん」

涙ぐむビビを見てクラウドスはルーファスを肘で突く。

「女の子を泣かせるなんてヒドイじゃないか、責任を取って結婚してあげるよ」

「きつとウソ泣きだよ。私だってあんなのウソ泣きだってわかるよ！」

ルーファスはそう言いながらビビを見た。

するとビビは涙をボロボロ流して泣いていた。

ちよつと焦るルーファス。

もしかしてマジ泣きだった？

そして、誰かがボソツとつぶやいた。

「女の子を泣かせるなんて、ルーファスもなかなか隅に置けないね（ふにふに）」

驚いてルーファスが振り返る。

「なんでここにいるの!？」

ルーファスの眼に映る空色ドレス。

果たしてこの人物はいつたい？

《三》

空色ドレスの麗人。顔は美少女だが、中身は腹黒いと噂のロゼンクロイツ。ルーファスの同級生の電波系魔導士だった。

しかも、ロゼンクロイツの手にはなぜかワラ人形？

「恋ノ三角関係カヨ！」

ワラ人形がしゃべった。いや、おそらくローゼンクロイツの腹話術。

男が二人と泣いてる女が一人の状況は、勘違いされてもしよーがない感じだった。

だが、クラウスは真っ向から否定。

「僕は無関係だからな。そこにいるビビちゃんはルーファスの婚約者だ！」

ルーファスも否定。

「違うから、無理やり契約書にサインさせられた被害者だよ！」

そして、ビビは公定。

「違うもん、ダーリンとアタシはラブラブなんだから！」

ものすごく話がこじれてる。

しかもそこにローゼンクロイツまで加わってしまった。

ワラ人形を持った手がルーファスの鼻先に突き付けられる。

「コンナ可愛イ子を嫁サンニモラウナンテ、憎イネエ旦那ア！」

キーが高くてふざけた声。ローゼンクロイツは口を動かしてない。かなりの卓越した腹話術だ。ちなみにローゼンクロイツいわく、意思を持ってしゃべっているのはあくまでワラ人形だと言い張る。

ルーファスはもううんざりだった。

「だからさ、はじめから説明するからちゃんと聞いてよ。突然、私の目の前に現れた自称仔悪魔のビビ、そのピンクの髪の毛

の子ね」

と、ルーファスはビビを指さして話を続ける。

「それで、鎌を突き付けられたり、包丁を突き付けられたりして、無理やり悪魔の契約書にサインさせられたんだよ。その契約ってというのがどうやら婚約書だったらしいんだ」

「結婚式八何時ダ馬鹿ヤロウ！」

説明の甲斐なし。

ワラ人形に結婚の日取りまで聞かれ、まったくルーファスの状況が伝わっていない。

こうなったらルーファスは己の力で困難を乗り切るしかない。

そして、ルーファスが採った方法とは!?

ルーファスはローゼンクロイツの腕に抱きついた。

「ごめんビビ、実は私たち結婚してるんだ!!」

ルーファスとローゼンクロイツのカップリング!!

しかもローゼンクロイツは男だ。見た目は女の子だけど。

でも、そんなことなど知らないビビ。

「そ、そんなあ……アタシとの関係は遊びだったのねえ！」

そして、クラウスもシヨックを受けていた。

「し、知らなかったのは僕だけなのか……（ローゼンクロイツはともかく、ルーファスもだったなんて）」

シヨックでクラウスは地面に両手をつけてしまった。

しかもローゼンクロイツはローゼンクロイツで否定しない。

「そういうことらしいよ?（ふにふに）」

なんかいろんな意味に取れるビミョーな言動。

本妻現るみたいな展開にショックを受けていたかと思われた
ビビだが、もうすでに立ち直ってビシッとバシッとローゼンク
ロイツを指さした。

「決闘よ！」

宣戦布告をしたビビに対して、ワラ人形が勝負を買った。

「望ムトコロダ、コンチキショー！」

こうしてルーファスを巡る戦いが勃発してしまった。

そして、地面と向き合っていたハズのクラウスまでもが立ち
上がった！

「不純な行為を見過ごすわけにはいかない、僕も戦うぞ！」

ローゼンクロイツがボソツと。

「クラウスもルーファスに気があるのかい？（ふにふに）」

無表情だったローゼンクロイツの口元が、一瞬だけ邪悪な笑
みを浮かべた。口の悪いワラ人形より、よっぽど本人の方が邪
悪だ。

「違うわっ！ 僕はただルーファスの友人として正しい道に進
んでほしいだけだ！」

クラウスの瞳は熱い炎を宿していた。

そして、当事者であるルーファスは置いてけぼり。

「（……どうしてこんな展開になるの）」

そのままルーファスを置いて、ビビが仕切っていた。

「じゃあ、勝負で勝った人がルーファスを自由にしていって
ことでオツケーね？」

「私の意思とかはないわけ？」

口を挟んだルーファスの鼻先にワラ人形が近づいた。

「アルワケネエーダロ、馬鹿ヤロウ！」

だそうだ。

勝負の方法をビビが独断と偏見で決定する。

「ダーリンへの愛の大きさを証明した人が勝ちでいいですよ？」

これにクラウスとローゼンクロイツは頷いた。

てゆーか、本当に頷いてしまつてよかつたのだろうか？

これつてまさか不純同性行為に発展するんじゃない？

ローゼンクロイツが一步前に出た。

「じゃあボクから証明するよ（ふあふあ）」

いったいどんな方法で証明するというのか！？

固唾を呑んで周りはローゼンクロイツの次の行動を見守つた。

「ルーファスのファーストキスの相手はボクだよ（ふあふあ）」

あ

「マジかーッ！！」

絶叫にも似た雄叫びをクラウスはあげた。

てゆーか、この話つて愛の証明っていうか、触れられたくない過去の話では？

秘密を暴露されたルーファスはすでにKOされて地面に両手両膝をついていた。

「あはは、あれは偶発的な事故だったんだ……あははははは」
ちよつと壊れ気味のルーファス。彼にとってファーストキスの思い出はトラウマだったらしい。

そして、数分前のこんな会話を思い出してほしい。

その慌て方……もしかしてファーストだったの!?

ち、違うよ！ 三回……いや二回……。

実はローゼンクロイツを含めて三回だったりする。

シヨックを受けているはルーファスだけじゃなかった。

クラウスもルーファスと同じ格好で落ち込んでいる。

「本物だったのか……本物のそっち系だったのか……二人ともそっちだったのかっ！」

友人との今後の付き合い方について、ちよつと本気で悩むクラウスだったりした。

ローゼンクロイツの先制攻撃は二人の負傷者を出した。

しかし、戦いはまだまだはじまったばかりだ。

真の敵であるビビはノーダメージだった。

「ふふん、ダーリンのファーストキスを奪ったくらいどうしたっていうの？（別に減るもんじゃないし）」

ここでローゼンクロイツはさらに攻撃を繰り返した。

「ルーファスの身体なら隅々まで知ってるよ（ふにふに）。もちろんルーファスもボクの体の隅々を知ってるよ（ふにふに）」

この発言を聞いたクラウスはさらにダメージを受けた。

「肉体関係まで結んでいたなんて……（ルーファスとローゼンクロイツがあゝんなことや、そゝんなことをしてたなんて）」

クラウスの脳ミソは完全にピンク色に染まっていた。

落ち込んでいたハズのルーファスがムクツと立ち上がった。

「ちよつと待ってローゼンクロイツ、勘違いされるような言い方しないでよ。幼馴染みだから、小さいころよく一緒にお風呂に入ってただけじゃないか！」

「そーゆーことらしい。」

ルーファスの言葉は思わぬところで波紋を呼んだ。

「幼馴染み!？」

驚いた声をあげたのはビビだった。

なぜか落ち込むビビ。

「幼馴染み……（二人が幼馴染みだなんて、アタシが入れる余地ないじゃん）。わかった」

なにがわかったの？

「今回の勝負は負けを認めて本妻の座は譲ってあげる。でも愛人の座は誰にも渡さないからね！」

そんな捨て台詞を吐いてビビは背中を向けて走りだしてしまつた。

遠くに消えて見えなくなるビビの後ろ姿。

取り残された三人はなにがなんだかわからない。

ルーファスは不思議な顔をして呆然としてしまっている。

「なんだつたんだらう、あの子……?」

ルーファスの横には立ち直って真顔になっているクラウドスが立っていた。

「ビビちゃん泣きながら走っていったぞ。本当にルーファスのことが好きなんじゃないか?」

「まっさかー、だって今日はじめて会ったばかりだよ?」

ルーファスはそう言つて頭を抱えるばかりだった。

カップラーマンの中から現れた自称仔悪魔の美少女。そんな仔悪魔に惚れられる理由なんて、なにひとつルーファスは思いつかなかった。

今の今までじつとしてた白馬にクラウスが跨った。

「そろそろ城に戻らないと爺がうるさいからな。僕はこれで失礼するよ、二人ともまた明日学校で会おうな！」

白馬に乗つて颯爽とクラウスは消えてしまった。

ローゼンクロイツもルーファスに背を向け、この場から立ち去ろうとしていた。

「じゃ、ボクも帰るよ（ふあふあ）。ピエール呪縛クンがおなか空いたらしいからね（ふにふに）」

ピエール呪縛クンとはワラ人形の名前だ。

「待つてローゼンクロイツ」

呼び止めるルーファス。

「なに？（ふにや？）」

「なにしに来たの？（こつち方面つてことは僕に用があつたんじゃないかな）」

「……… 忘れた（ふにや）」

ローゼンクロイツのド忘れは知人の間では有名だ。ド忘れの達人と言つてもいい。そのクセ、人を苛めるような材料は絶対に忘れない。

ローゼンクロイツの眉がかすかに動いた。

「そうだ（ふによ）。あの悪魔、かなりクラスが上の悪魔だよ

(ふにふに)。あと、もうひとつ、あの悪魔………忘れた(ふにや)」

絶対なんか重要なこと言おうとした。

結局、忘れたままローゼンクロイツは、肩越しに手を振って去ってしまった。

残されたルーファスはうんと唸る。

「(結局、なんか全体的になんだったんだろっ?)」

嵐の前の静けさではなく、嵐の後の静けさ。

とりあえず一軒落着きたみたいなので、ルーファスは自宅に帰ることにした。

玄関ではなく、勝手口のドアを開けて中に入った……瞬間、ルーファスはドアを閉じた。

いわゆる、見なかったことにした。

そして、もう一度、ゆっく〜りとドアを開けた。

「おかえりダーリン」

ビビがいた。

しかも、カップを片手にテーブルでくつろいでいる。

「なんでいるわけ?(てつきり自分ちに帰ったのかと)」

「だってここはアタシたちの愛の巣じゃん?」

「意味がわからない(いや、言葉の意味はわかるけど、この状況が理解できない)」

「夕食にする? 先にお風呂にする? それともアタシにす

る?(いやん)」

「……………」

無言というか、離脱したルーファス。現実を意識が戻って来た時には、彼の中でなんかのスイッチがオンになっていた。

「さてと、そうだテレビでも見ようかな、うんそれがいい」

ルーファスの視界にビビは入っているが、意識には入っていない。除去フィルターがかけられたのだ。

いつもと変わらぬ平日の夕暮れ。

ルーファスはリビングのソファに座ってテレビのリモコンでオン。

「あーあ、ドラマの再放送終わっちゃてるよあ」

なんて言ってるが、ぶっちゃけルーファスはテレビの画面が見えてなかったする。

なぜならば！！

テレビの前にビビが座り込んでるから！

しかし、ここで決して邪魔だなんて口走らない。それを言うてしまつてはビビの存在を認めてしまうことになる。

ここは断固としてシカト。

「今日の夕食なにしようかあ、今のピザ美味しそうだったなあ（今日はデリバリーにしようかな）」

「アタシもピザ食べたあゝい。さっきのCMのやつ頼もうよー！」

「……やっぱりピザはやめよう。めんどくさいからレンジでなかチンしよ」

「だったらアタシの手料理食べてよあ！」
聞こえない聞こえない。

ルーファスはテレビを消してソファで寝たフリ。

目が覚めたらビビがいなくなってるように、なんて淡い期待を抱きながら寝たフリ。

ソファにうつ伏せになって現実逃避という名の寝たフリ。

が、現実はそんなに甘くなかった。

謎の圧力がルーファスの背中に落ちた。

「うっ！」

カエルが潰れたようなうめき声をあげたルーファス。その背中に乗ってる物体B。

しかも、その物体Bが跳ねる跳ねるジャンプする。

「ぐっ、ぎゃ、ぐわっ！」

短い奇声が連続してルーファス口から洩れる。

このままでは圧迫死してしまう。てゆうか、すでに肋骨の一本や二本は逝ってしまってるかもしれない。

そして、ついにルーファスは負けを認めた。

「ごめん、私が悪かった……悪かったら降りてください」

「あれえ？　なんか今人の声が聞こえたような気がするなあ」

秘儀シカト返し！

「僕が悪かったから許してえ……」

ルーファスが「私」ではなく「僕」というときは、かなり素のときだ。

「しょーがないなあ」

主導権は完全にビビだ。

ぴよんとビビはルーファスの上から跳ね降りた。

やっと重荷から解放されたルーファスは 逃げた！

逃げる気満々で逃げた。

のだが……いきなりルーファス急停止。首をかつ切ろうと突き付けられた鋭い鎌。もちろん鎌の柄を握っているのはビビだった。

「きゃは、どこ行くのダーリン？（いきなり逃げるなんてヒドイ）」

「ちよつとトイレ」

「へえ、わざわざトイレに行くのに外に出るんだあ？（まあ、ウソが見え見えなんだからあ）」

「い、家のトイレが壊れちゃってるんだ、あはは」
ルーファスの手は窓枠にかかり、今にも跨いで外に出ようとする格好で固まっていた。

「（このまま僕は拉致監禁されるのか……自分ちで）」

そんな危機は回避しなくてはいけない。

ルーファスは土下座した。

「お願いだから帰ってください、お願いします」

「帰れって言われても……帰る方法わかんないんだもん」

満面の笑みで言われた。

帰るってカップブラーメンの中に戻る方法？

ルーファスは尋ねる。

「もしかして……迷子なの？（いや、家出少女って可能性もあるな、それで迷子になったとか）」

「まあ、似たようなもん。だから帰るとこないから、ここに泊

めて？」

「……………（どうしようかな）」

ちよつと迷ってしまうルーファス。

さつきまで強硬な態度だったビビが軟化。

ここが新居なんだから、一緒に住むの当然でしょ？

から、帰るところがないから、泊めて欲しいに変化した。

ルーファスは自分も普段から困りっぱなしだし、周りによく助けてもらってる。だから人からお願いされたり、困ってる人を見たりすると、見過ごせないのがルーファスの性格だった。

「……………わかった一晩だけだよ？」

「やったー！」

ついにルーファスは“同居”を認めてしまった。

一晩だけだなんて言っただって、一回折れちゃえばルーファスの性格からして、もう一日、もう一日と粘れば、何日でも泊まれる可能性大だ。

ルーファスは言った後から後悔していた。

「……………はぁ（その場の空気に流されて言っちゃったけど、本当によかったのかな）」

ビビを見ると、嬉しそうに飛び跳ねている。

「まずは新居の模様替えしなきゃね！」

「しないから！（新居じゃないから！）」

こんな感じで魔導士ルーファスと仔悪魔ビビの生活がはじま
ってしまった。

一つ屋根の下、男女が二人。

果たしてこの先、ウヒヒな展開が待ち受けているのか！！

第二話 大魔王光臨！

《一》

自室のベッドを同居人Bに明け渡し、ルーファスはリビングのソファで眠っていた。

そこへ謎の物体Bが飛来。

ルーファスの腹に厚底ブーツがめり込んだ。

「ぐあっ！」

限界まで開けたルーファスの目に映ったのは、笑顔で自分の腹の上に乗るビビ。

目覚めの悪い一日がはじまった。

「ダーリン早く起きて、朝食の準備できてるよ！」

「もつと優しい起こし方できないわけ？（胃酸が喉まで昇ってきた）」

とにかく目は覚めた。眠気なんて宇宙の彼方だ。

ソファから降りたルーファスは腹を押さえながらキッチンに向かった。

そこでルーファスが見たものとは！

コンビ二弁当だった。

「……朝食の準備はたしかにできてるけど（これは正しいあり方なのか？）」

「ダーリンより早く起きて買って来たんだから、褒めて褒めて！」

「うん、ありがとう……というかお金は？」

「もちろんダーリンのお財布からに決まってるじゃん！」

「ところで、そこにあるお菓子の山は？」

ルーファスはまさに山積みになっているお菓子を見た。

ポテチ、チョコ、なぜか酒のつまみまである。

「コンビニ行ったついでに買って来たんだよ、ダーリンにも少しわけてあげるね。」

「で、そのお菓子を買ったお金は？」

「ダーリンのお財布からに決まってるじゃん！」

「……そう（少しわけてくれるって、間接的に僕の物だね？）」

そんなやり取りがありながら、とにかく朝食を食べ終え、お茶を飲んで一息つくルーファス。だが、そんなまったりした時間も長くは続かなかった。

壁掛け時計を見たルーファスの顔色が変わる。

「遅刻じゃん！」

ソファでなんか眠っていたせいで、生活リズムが完全に狂ってしまったのだ。

急いで学校へ行く準備をするルーファス。着替えを済ませ、ボサボサの長髪を結わき、ビビのいるリビングに戻ってきた。

「僕の財布どこ!？」

「うーん、その辺に置いたけどお？」

「その辺じゃなくて、ちゃんと元の場所に戻しておいてよ！」

「(元の場所なんかあったんだ)」

ビビの目に映ったのは腐海の森と化した汚い部屋。

汚さの系統をいうならば散らかつてる系である。

魔導書とマンガが塔を作り、服が一か所に山積みされ、紙クズや缶やペットボトル、資源ごみなども放置されている。

黴菌も繁殖してそうな勢いだ。

あれでもない、これでもない、発掘作業をしてついに財布を発見！

しかし、中身が入っていない。

「僕のお金は、まさか全部使ったわけじゃないよね？」

「全部は使っていないよあ、ちょっとは残したもん」

入っていないかったのはお金だけではなく、ポイントカードや定期券、何もかも入っていないかった。

「定期がないと学校に行けないよ！」

「大丈夫だよつ、ダーリンはやればできる子だもん！」

「なにその励まし、効果ゼロだし！」

「しょーがないなあ、アタシが学校まで送ってあげようか、チユウ一回で？」

「断ります」

即答だった。

ルーファスは瓦礫の山をひっくり返し、やっとの思いで定期券を発見した。

「見つけた！」

すぐにルーファスは玄関に向かって走り出した。

「じゃ、僕行くから、留守番よろしくね！」

「ダーリンお弁当忘れてるよ！」

そう言っただけが差し出したのはコンビニおにぎりだった。

「そんなのいらないよ！」

怒ってルーファスは家を飛び出した。

ビビもほっぺたを膨らませて怒っていた。

「まあ！（せっかくだらなく買って来たのに）」

学院の鐘の音を聞きながらルーファスは教室に飛び込んだ。

ギリギリ セーフ！

へトへトの身体で椅子に座り、そのままルーファスは机に突っ伏した。酸欠でお花畑の幻想が見える。

だいぶしてから教師に担任が入ってきた。時間通りにこの担任が教室に来たことは一度もない。

黒髪をなびかせながら、無音で歩く女教師カーシャ。朝は低血圧で切れ長の目がさらにキラキラしていて、今にも殺人しそうだ。

机とキスをしているルーファスの耳には届かなかったが、クラスはいつもと違うどよめきに包まれていた。

生徒の視線はカーシャの後に入ってきた美少女に注がれていた。

カーシャは爆乳を揺らしながら教卓に両手をついた。

「以下略だ」

その一言でカーシャは済ませた。

明らかに以下略の使い方が間違っている。

そして、カーシャはかつたるそうに空いてる席を指さした。

「さつさと座れ」

これに美少女は反発した。

「まだ自己紹介もしてないのに！」

「勝手にしろ（二日酔いで頭がガンガンする）」

今日は低血圧ではなく二日酔いらしい。

美少女は勝手にすることにした。

「みんなよろしくね、アタシの名前はシェリル・ベル・バラド

・アズラエル。ビビって呼んでね　えっと好きな食べ物は…

…」

まだまだ自己紹介は続きますって感じのところ、叫び声が妨害に入った。

「なんでいるの!？」

もちろんその声をあげたのはルーファスだった。

大声で叫んだルーファスの眉間にカーシャの投げたチヨーク

が直撃。

「二日酔いに響くだろうが！」

カーシャの目は完全にすわっていた。

持っていたのがチヨークでなくてナイフでも、躊躇なく投げ

ていたに違いない。カーシャの近くにあったのがチヨークで運

がよかった。

頭を押さえ痛がるルーファスの横の席で、心配そうな顔をし

て見守るビビ。

「大丈夫ダーリン？」

「大丈夫なわけではないでしょ……ってなんでそこに座ってるの!？」
（ボブは？ ボブがいない!）」

そこにいるべきクラスメイトがいなかった。変わりにいるのはビビ。クラスの仲間が一人減ってる!？」

魔導学院は落第退学が普通の学校に比べて遥かに多い。だが、あまりに唐突すぎる。

なんだかルーファスを襲う強烈な頭痛。呪いだ、呪いに違いない。仔悪魔の呪いだ!

依然としてかつたるそうなカーシャが口を開く。

「ボブは休学になったから黙祷しろ（胃がもやもやして吐きそうだ）」

なんで休学になったんですか？

しかも黙祷ってなんですか？

みたいなカーシャの手をわずらわせる質問は命取りになる。

今のカーシャには触れないほうがいい。

いったいボブになにが起こったのか!？」

よからぬ妄想をしてルーファスは蒼ざめ、その顔でビビを見つめたが、ビビはニコニコと笑うだけだった。その笑顔の奥にどんな秘密が隠されているのか??

ルーファスは危機を感じていた。絶対にビビはこのクラスにトラブルを持ち込む。

ただでさえ、このクラスにはトラブルメーカーが多いというのに（ルーファスとか）、そこにビビを投入するというのは、

火にニトログリセリンを注ぐに等しい。

そして、クラスはすでに不穏な空気に包まれていた。

ビビに爽やか笑顔を贈るクラス。

ワラ人形を片手に不敵に微笑むローゼンクロイツ。

そして、廊下から発せられる鋭いプレッシャー。

ルーファスはすぐに廊下を見たが、ドアのはめ込みガラスの先には誰もいなかった。

クラス魔導学院への編入は、入学するより難しいと言われ、転校生はとても珍しい。しかも、美少女のオプシオンが付けば人気者にならないわけがない。

頭が痛いルーファスをよそに、ビビはいつの間にかクラスの人気者。特に餓えた獣からの人気は絶大だ。

恒例の質問タイムがはじまる中、獣たちの叫びに紛れてボソツと『死ね』と呟いたカーシャの眉がピクピク痙攣して、教室の気温が零下まで下がった。

次の瞬間、カーシャの手から放たれる魔導。

「ラギ・アイスニードル！」

巨大な氷のツララが教室を飛び、後ろの壁に突き刺さった。

その近くには無数の穴が開いていた。ツララが投げられたのは今日がはじめてじゃないらしい。

一瞬にして教室は静まり返った。

そして、カーシャが重たい口を開く。

「……二日酔いだと言っておるだろう」

頭を押さえてカーシャが教室を出て行く。カーシャという名

の恐怖が去って行く。

と、誰もが思ったのが、急にカーシャが振り返った。

「ルーファスちよつと顔を貸せ」

これって死の宣告ですか!?

言うことを聞かなければ殺されるが、聞いても殺されそうな

雰囲気だ。

クラスメイトの哀れな視線で見送られて、ルーファスは恐る恐るカーシャを追って教室を出た。

カーシャはかつたるそうに頭を押さえている。

「屋上に行くぞ」

「はい？」

「少し大事な話がある」

「大事な話？」

屋上で大事な話といえば……もしや愛の告白!?

教師と生徒の禁断の恋。

愛の先にルーファスが見たものとは果たしていったい!?

みたいな展開になってしまうのか？

そんな展開など微塵も期待していないルーファスは、いつかカーシャに殺されるかそつちが心配だった。

屋上につくと、カーシャはいきなりルーファスの胸倉をつかんできた。

「どういうことだ？」

「なにが!?(殺される!!)」

理由はよくわからないが、やっぱり殺されそうだ。

しかも、近距離のためにカーシャの爆乳がルーファスのグイグイ当たる。

「聞いたぞ。あの小娘、お前の婚約者らしいな（絶対に結婚詐欺だな）」

「違うよ！」

すぐにルーファスは否定した。

「違うから、それは向こうが一歩的に言ってるだけで、私はまだ誰とも結婚するつもりなんてないよ！」

「（ルーファスに言い寄る女がいるとは、絶対に財産目当てだ）お前にその気がなくとも、あの娘はお前のことが好きらしいぞ。しかも、あの娘……悪魔だな？」

「……カッブラーメンから出て来たんだ」

ルーファスは事のあらましを説明しようとしたが、その説明を遮るがごとく、気高い女の声が響いた。

「あの転校生、やはり悪魔だったのだな！」

屋上に姿を見せた第三者。

ブロンドの髪の毛を靡かせ、その女はそこに立っていた。

《 一 》

陽の光を背に浴びるブロンドの美しい女。

クラウス魔導学院生徒会長エルザ見参！

しかも、エルザの手には鞘から抜かれた刀が握られていた。

なぜか戦闘モード。

「私は悪魔を決して許さない。悪魔は父を殺し、今度はルーファスまでも誘惑するつもりなのかっ！」

と、その前に エルザはカーシャに向かって剣を振り下げた。

「この淫乱教師め、ルーファスから離れるのだ！」

離れるどころかカーシャはルーファスを人質に取った。

「ルーファスと妾は一心同体じゃ、一緒にいてなにが悪いのだ！」

「一心同体だと!!」

大声をあげてエルザは顔を真っ赤にした。

「一心同体とはどういう意味だ！」

「ふふ、肉体的にあゝんな関係という意味だ。ろくに男と付き合ったこともないお主にはわからんだろうがな！」

モーソー爆発！

エルザの脳では処理しきれず、体が火照ってオーバーヒートした。

ルーファスが困った表情でカーシャを見つめる。

「誤解を招くような言い方しないでよ」

「お前が妾の大切なモノを奪ったことには変わりないだろう」
大切なモノを奪った。

その言葉はエルザのモーソーに拍車をかけた。

エルザの胸の奥に木霊する呪文。

「(ロストヴァージン!)」

ま、まさかルーファスとカーシャがそゝんな関係だったなん

て……。

ルーファスがカーシャから奪ったモノの真相は、魔導士ルーファス第五話「凍える記憶」を読んでね

と、いう告知もはさみつつ、シヨックを受けてエルザが動けなくなつてると共に、カーシャの必殺技が炸裂。

「ルーファスロケット発射！」

カーシャに豪快に投げられたルーファスは直球勝負でエルザに激突。二人はすつてんころりん豪快にコケた。

地面に倒れたエルザの上に覆いかぶさるルーファス。

手に伝わるやわらかい感触に思わずモミモミしてしまったルーファス。

そして、状況把握でフリーズするルーファス！

「うわぁあーっごめん、ごめん、ごめんなさい！！」

「……いいから早く退いてくれ」

お約束の行動。ルーファスはエルザのバストを鷲掴みにしていた。しかも、モミモミしちゃったし。手に残る感触が忘れられない。

ルーファスを押し退けて立ち上がったエルザは素早く刀を構える。

カーシャの姿はどこに!?

「ここだ（ふふ、勝った!）」

「なにっ!？」

振り向きざまのエルザの眉間に銃口が突きつけられる。

ファンシーなデザインのその銃はオモチャにしか見えないが、

悔るなかれ！

カーシャはなんか長生きしてるせいか、魔導具作りにかけては奇抜なほどに才能を発揮できるのだ。

そう、これは魔導銃（マガン）なのだ！

カーシャの早口解説がはじまる。

「この魔導銃は物体を一瞬にして、“うさぎしゃん”にしてしま
うミラクルな魔導具。その名も“ピンクバニーちゃん（試作
品）”だ！（ふふっ、決まった）」

カーシャはピンクが大好きです！！

と、いうわけで、引き金にかけた指が微かに動いた瞬間、そ
のスピードよりも早くエルザの一刀が煌く。

魔導銃がクルクル回転しながら放物線を描く。

「ぐっ……妾の腕が……あるな」

斬られたと思ったカーシャの手首は袖に引っ込んでいただけ
だった。

魔導銃が地面に落ちた衝撃で誤作動を起こす。

そして暴発！

「うぎゃあああつ！」

惑星ポボンガにいる緑色の両生類がダンプカーにひかれたよ
うな悲鳴。

つまり得たいの知れないほどの叫び声だった。

カーシャとエルザは一時休戦をして、その奇声がした方向を
振り向いた。

ぎゃあああああつ死んでるうううう……かも。

そこにはカエルのようにへばっているルーファスの姿が!?
慌てたエルザはルーファスを抱きかかえた。

「大丈夫かルーファス!？」

続いて平然とした顔をしたカーシャが一言。

「失敗だな(うむ、きつと配線ミスだ)」

カーシャの理論上では、ルーファスは一瞬にしてピンクのうさちゃんになるはずだった。が、どうやら内部の配線を間違えたことに気づいたようだ。

身動き一つしないルーファス。やっぱ逝きましたか？

地面に膝を突き、歯を食いしばるエルザ。

「くつ、すまないルーファス、私のせいで……」

「殺人なんて大したことではない(あっはっは、見る人がゴミのようだ!! byメガネ)」

「もとはと言えば貴様が悪いのだろう!」

立ち上がるうとしたエルザの手を何者かが掴んだ。

「ルーファス!？ 生きていたのかっ?」

驚くエルザの目の前でルーファスがゆっくりと身体を起こす。

その姿、いつもルーファスの比べて凛々しいぞ!

「はははは……あゝははははっ!」

こんな高笑いをするルーファスなんて誰が想像しただろうか!

へっぴこルーファスからは想定できない豪快さ!

立ち上がったルーファスは掴んでいる腕を引っ張り、エルザの体を自分の胸に抱き寄せた。

「美しいぞエルザ」

「なにを申すか、頭でも打ったのか!? (こやつ……ルーファスではない!?)」

「いや、わたしは本気だよ、エルザちゃん」

ルーファスが掛けていたド近眼のメガネを投げ捨てた。

超美形のルーファスの素顔が現れた。

しかも、なんか妖艶だ!

悩ましいルーファスの瞳で見つめられたエルザは、普段の彼女からは想像できないほどに焦りを覚えて、生唾をゴクンと飲んだ。

この状況を平然とした態度で見守るカーシャはメモを取りはじめた。

「なるほど、実験は失敗したが、思わぬ効果が出だな。あの魔導銃には人格を変える力があるようだ(名前も改めねばならんな)」

当初の用途とは変わってしまったが、カーシャが大発明をしてしまったことには変わらない。さすが亀の甲より年の功!

ルーファスとエルザの顔は、男女の距離まで迫っていた。

本能的に危機を感じたエルザがルーファスを突き飛ばそうと……したのだが、ルーファスの胸を押しした感触がマシユマ口みたいだ。

思わずエルザはモミモミしてしまった。

ま、まさか!?

顔を赤らめて甘い吐息を漏らすルーファス。

「ああん、そんなに激しくしないで……」
凍りつくエルザ。

そして、沸点を超えたエルザ。

ものスゴイ勢いでエルザは後ずさりをした。

「る、るる……ルーファス……女子だったのかっ！（騙された、いつもかけてるグルグル眼鏡はカモフラージュだったのか）」

この発言にカーシャも驚きを隠せない。

「マジかっルーファス！」

あまりの衝撃にこの場の雰囲気は凍りつく。地域限定ピンポイント極寒。

普段は冴えないルーファスたん。

髪の毛はボサボサの長髪を束ねているだけで、顔の大部分を占めているのはド近眼のグルグル眼鏡。服装はファッションセンスがないから、いつも同じ魔導衣ばかり着てるし、背が高いのに猫背だし、見るからにダサイじゃないか！

凍りつくこの場を打ち砕く存在が現れた。盛大に開かれる屋上のドア。中から現れたのは気分上々のビビだった。

「やつほーっ、ダーリン帰ってこないから授業サボって探しに来ちゃった……えへっ（はあと）」

場の空気が掻き乱される予感。混迷を深める。カオス万歳！
ルーファスを見るビビの表情が曇っていく。

「いつものダーリンと何か違う（あっ、メガネがないのか、納得）」

そこだけかつ!?

「あゝははははっ、当たり前だわたしは生まれ変わったのだからな、大魔王ルーファスとしてな!」

この場にいた全員が『はあ?』というマヌケな表情をしてしまった。

恐る恐るカーシャが言葉を漏らす。

「それってギャグか……? (ふふ、笑えない……ふふふ、腹が……腹がよじれる)」

思いつきり腹を抱えてうづくまるカーシャ。大爆笑だった。

手に残る感触を感じながらエルザもシヨック!

「ま、まさかルーファスが女子だったとは…… (風紀が乱れる)」

イマイチ状況を理解できてない新参者。

「ダーリンが女の子ってどういうことお?」

「私は、私は触ってしまったのだ……私よりも豊満なルーファスの胸を……シヨックだ」

「ダーリンに豊満なバストが? うっそだあゝ!」

ビビはちょこちょこ歩き、ルーファスの前に立つと、両手でガシッ!

手に伝わるやわらかな中に弾力性を秘めた感触。確認のためモミモミしてみると反応があった。

「ああん、ビビったらこんなところで……」

「ダダダ、ダーリン!? 女だったの……ってことは結婚サギ!? アタシとの結婚はどうなるの!? ダーリンのばかあん!」

取り乱すビビは床に崩れてシヨック！

思い思いに床に崩れる三人の女子たち。ひとりは笑い過ぎて瀕死だった。

そんな女子たちを尻目に自称大魔王ルーファスは去ろうとしていた。

「じゃあな、わたしは世界征服を行って来る、あゝははははっ！」

立ち去ろうとした自称大魔王ルーファスの足首を、ビビがガシツと掴んで離さない。

「ちよつと待って、今思い出したんだけど。昨日ダーリンがシヤワー浴びてるのコツソリ覗いたんだけど、胸なんかなかったよ？（股間のゾウさんはパオーンだったけど、きやは）」

仔悪魔ならぬ、覗き魔だ！！

大爆笑していたハズのカーシャが何事もなかったように、すつと立ち上がった。

「ふむ、すべてを理解した。赤いコードと青いコードの配線を間違えたことにより、光線を浴びたルーファスは人格だけでなく、肉体も変化してしまったのだ（妾天才！）」

小さくガツポーズをしたカーシャ。

この場にいた全員が何となく状況把握。

落ち込んでいたハズのエルザが立ち上がる。

「なるほど……女子ということとは、ちゃんだな、ルーちゃんだ」

とりあえずちゃん付け！

エルザは刀の切っ先をルーちゃんに向けた。

「ルーちゃん、貴様が世界制覇を目論むとあらば、今から貴様は私の敵だ！」

「ダーリンに牙を剥く人間はアタシが許さないんだから！」

ビシツと立ち上がったビビの指先がエルザを捕らえる。

やはり状況は混迷を深めてきた。

女と女の戦いはカオス！

自分の腕に絡み付こうとするビビをルーちゃんが力強く振り払った。

コケたビビのスカートがふわりん

あ、くまだ。今日もアイのパンツはクマさんだった。

「おまえみたいな幼児体系はわたしの好みじゃない！」

「がぼ〜ん！」

ビビちゃんの大シヨック！

シヨックを受けたビビはすぐさまカーシャのもとに駆け寄っ

て、彼女の裾を何度も引つ張って目に涙を浮かべる。

「あんなのダーリンじゃないよお、へっぽこじゃないダーリンなんてダーリンじゃないよお。へたれじゃないと可愛くないから、早く元に戻してよお！」

「妾の理論が正しければ、どんな問題も愛さえあれば解決する。

つまり、たぶん、きつと、おそらく、ルーファスを想う者が接吻すれば元に戻るハズだ」

かの有名なカエルの王子様の法則ですね！

「アタシがダーリンにキスすればいいんだよね？」

「そういうことなるな（本当に戻るかは知らんが）
すげー無責任！」

この二人の会話を横で立ち聞きしていたエルザが胸の奥で何かを決意した。

「ルーファスに接吻すればよいのだな、わかった！」

屋上から逃げ去るルーちゃんの後を全速力でエルザが追った。
一足出遅れたビビもこの戦いに参戦。ルーちゃんの後を追う。
屋上にひとり残されたカーシヤは青空を眺めて一言。

「青春だな……ふふ、笑えん」

こうして、第一回ルーファス争奪接吻大会が幕を開けたのだ
った！

《三》

実は授業中だったりして！！

そんなことお構いなしでルーちゃんが廊下を逃走。その後ろ
から刀を構えたブロード美女のエルザが追い、ちよっぴり遅れ
て仔悪魔ビビが走る。

その光景を幸か不幸か発見してしまった廊下側の席の生徒は
目を丸くしてビックリ仰天。

さすが頭脳明晰運動神経抜群金髪美少女生徒会長エルザだ。
すでに追いつきそうだった。

「待つのだルーちゃん！」

「生憎わたしはイヌじゃないんでな、待てと言われても待た

ん！」

「なるほどどうまいこと言うなルーちゃん」

感心してどうするんですか生徒会長！

あと少しエルザが手を伸ばせばルーちゃんに　　というところ

で、後方から大鎌がブーメランみたいに飛んできた。明らかに殺人を狙った行為だ。

紙一重でエルザは大鎌をかわした。

「殺す気かつ！（やはり悪魔だ侮れん）」

「殺す気よ！　　なんでアンタがダーリンのこと追ってるのよ！」

一足遅れたビビだったかが、すでにエルザの真横を走っていた。

「ルーちゃんが世界制覇を目論むのであれば、私はそれを止めなくてはならん！」

「そんなこと言ってダーリンの唇を奪う気なのね、この女狐！」

「唇、唇、唇、私がルーファスと接吻……」

エルザのモーソーモードが発動した。

そして、すぐに鼻血を噴いてモーソー旅行から帰還した。

「私がルーファスと接吻したいと申すのか！（……いきなり接吻なんて、恋エルザには順序が……そう、まずは文を書き留めるところから）」

再びモーソー。

ブハッ、と鼻血を飛ばしてエルザは切っ先をビビに突きつけ

た。

「黙れ小悪魔！」

「なに、アタシとヤル気なのお？」

ビビの瞳が金色から赤く変わった。きつとマジモードだ。

エルザが大きく刀を振り上げ、ビビの脳天を狙って振り下ろした！

「成敗してくれる！」

だが、その刃はギリギリのところまで止まった。

「どうだアタシの真剣白刃取り！」

「小癪な！」

刀を持つエルザの手が震え、ビビの手もブルブル震えている。

二の腕ダイエツトだ！

廊下中にけたたましいエンジン音が鳴り響く。

向かい合ったままビビとエルザはそっちを見た。

するとそこには七五〇ccのエンジンを搭載したジェットホウキに跨る女教師が！

「虚けらが、ルーちゃんは今もうとくに先を行っておるぞ！」

エンジンを吹かしたカーシャ先生がジェットホウキで廊下を暴走！

すでに一色触発状態を解いた二人の横を、もの凄いスピードですり抜けていくジェットホウキ。

校内でジェットホウキに乗るなんてアホだ。

生徒会長エルザが注意する。

「カーシャ先生ヘルメット被ってください！」

そこかよ！

たしかにヘルメットは被らないと危ないです。よいこのみなさんはジェット箒に乗るときにヘルメット着用しましょう。

完全にルーちゃんを見失った二人は顔を見合わせて睨み合う。きつと見える人には火花が見えるはずだ。

「アナタがアタシを殺そうとするからいけないのよ！」

「悪魔の言うことに耳は貸さぬ」

「そーゆー偏見やめてくれる？ 悪魔が全員悪い奴みたいに言わないでよ」

「悪魔は全て悪だ」

「そりゃー悪魔の中にだって悪い子とかいるけど、特にベリアル大王様とか。でもね、グレモリー公爵様は立派なんだから！」

「みんな所詮は悪魔であろう！」

「ああ〜つもお、アナタと話しても平行線。じゃ、お先に！」
走り去るビビの背中にエルザが声をかける。

「おい、待て！」

教室から覗く顔顔。すでに学院は大騒ぎになっていた。

刀を鞘に収めたエルザはビビの背中を追う。

前を走るビビにエルザが声をかける。

「おい貴様、ルーちゃんの所在がわかるのか？」

「貴様って呼び方やめてよね。アタシの名前はシエリル・ベル・バード・アズラエル。呼ぶ時は愛称のビビで呼んでよね！」

「ならばビビ、改めて訊くがルーちゃんの所在がわかるのか？」

（先ほどから迷いなき追跡、おそらくなにかを頼りに走っているに違いない）」

「もちろ〜ん。ダーリンの匂いを辿ればすぐにわかるよん」

「貴様は犬か」

「わん！」

エルザはビビの言葉を信じて後を追う。

廊下を抜け階段を駆け下り下駄箱を抜け、目くるめく景色の移り変わり。

ルーちゃんは意外に簡単に見つかった。

魔杖を持ったルーちゃんはグランドをキャンパス代わりにお絵かきをしていた。カーシャ先生監修のもと。

遠くからビビがルーちゃんに呼びかける。

「ダーリン何してるのぉ？（なんか物凄いマナを感じるんだけどぉ）」

「来るな、入ってくるな、魔法陣が消えるだろう！」

グランドを上空からヘリコプターで見たらわかりやすいだろう。それはまるでミステリーサークルのようだった。もうすでに教室の窓から何人もの生徒が顔を出してその紋様を見ていた。果たしてルーちゃんは何をしようとしているのか？

ルーちゃんのすぐ横でカーシャが指示を出している。その通りにルーちゃんは紋様を描いているのだ。

「そこはまつすぐ引いて、そつちと繋げて……違う、違うと言っているだろうが。そこが最初に念を送る場所なのだから、もつと丁寧を描け」

「こんなもんで本当に成功するのか？」

ルーちゃんはカーシャの指図まま動いているが、本当にこれが効果を上げるものなのかは疑っていた。

呆然とルーちゃんたちの行動を見てしまっていたビビとエルザだったが、ビビが先に動いて避雷針の上によじ登り、ルーちゃんがいっただい何を描こうとしているのかを見定めようとした。「なにこのラクガキ……召喚の魔法陣でもなさそうだし……それにしてもなんてマナなの!？」

上から見た紋様は何かの配線コードのようで、紋様というよりは機械の内部のようだった。

そして、辺りを飛び交うマナフレア。

マナフレアとは魔法の力がいっぱいのところ集まるエネルギー結晶のことだ。

ルーちゃんの身体が止まる。全てを描き終えたのだ。

「これでいいかカーシャ？」

「まあまあだな。だが問題はないだろう（あつたらあつたで知らんがな、ふふ）」

カーシャは胸の谷間に手をつ込むと、そんなとくに絶対入るはずがないメガホンを取り出した。あの巨大な胸の谷間は底を知らない四次元なのだ。

魔導メガホンの魔源をオンにして、カーシャが声高らかにしゃべり出す。

「愚民ども、耳の穴をよくかつぼじって聞くのだ。これから魔科学の実験を行う。モルモットはお前たちだ!!（よし、決

まった)」

小さくカーシャはガツポーズした。

学院中から地の底で悪魔が唸っているようなどよめきが巻き起こる。

この学院の生徒ならば誰もが知っている。カーシャと黒魔導教員ファウストの実験には気を付ける。二人とも犠牲をなんとも思っていないからだ。

とくにカーシャの実験はヒドイ。

ファウストの実験はあくまで魔導に対する探究心で、ちょっぴり恋は盲目になってしまっただけなのだが、カーシャは確信的に誰かを犠牲にして弄んでいる。

校内で授業をしていた生徒たちがヨードンで逃げ出す。

四角い箱に波線を描いたコイルをモチーフにした場所にルーちゃんが立つ。

「ここから念を送ればいいんだな？」

カーシャはルーちゃんから離れた四角い模様の中から返事を返した。

「そこで念じることによって、妾を経由して力を増幅させるのだ」

何が起ころうとしてか誰にもわからなかった。

避雷針の上からスルスルと下に降りたビビはすぐにエルザの横に駆け寄った。

「なにやってるかわかるう？」

質問されたエルザは困るかと思いきや、エルザにはこの幾何

学模様が何であるかわかってきていた。

「これは装置に違いない。カーシャ先生の言葉から察して、念を増幅させる装置。つまり、サイコキネシス装置と言ったところだろう」

「もつと噛み砕いて説明してよ」

「超能力発生装置だ」

もつと噛み砕くと、誰でもエスパーになれちゃうよ装置。

エルザの言葉を耳にしてカーシャが笑う。

「ふふふふつ、さすがは才色兼備の令嬢様だな、正解だ。だが、この装置はお前の想像を絶するハズだ。さあ、やれ、やるのだルーファス！」

「任せておけ！」

ルーちゃんが念じる、念じる、念じる。すると、念が地面に描かれた配線を経由してカーシャのいる場所へと送られ、カーシャが念を魔導エネルギーに変換し、魔導エネルギーは次の場所を増幅され、放たれる！

強い念波が学院中を包み込み、気分の悪くなった者は早退へと追い込まれる。

この装置から発せられるエネルギーは、ただの魔導エネルギーではないため、魔導に耐久力があるはずの生徒たちが次々とやられていく。

それでも耐えられる者は魔の誘いを受けるのだ。

気絶しないで残っている生徒たちがいきなり服を脱ぎ出した。服を投げ捨て、下着姿になったところで発信源のルーちゃん

の念じる力と、生徒たちの下着まで脱いでたまるかという力が火花を散らす。

生まれたときから強力な魔力に支配された魔界育ちのビビは、そんじやそこらの人間に比べて魔導耐久力があるので、ちよっぴりテンションが上がる程度だった。

「みんなどうしたの、サバトで乱交パーティーでもする気なの
お!?（学生の間際でえっちい!）」

この仔悪魔は全く状況を理解していなかった。ちなみにサバトとは簡単に説明しちゃうと魔女の集会のことだ。

多くの生徒たちは下着を脱ぐ前に精神が尽きて気絶してしまつた。そんな中で逆に強い精神力を持っている人の方が損をする。特にエルザ。

「くっ……自分の意思に反して手が勝手に……」

エルザは上がブラジャー姿になってしまつて、今はスカートと格闘中だった。

ジッパを下ろしたり上げたり、まるで遊んでいるように見えるかもしれないが、エルザは真剣そのものだった。なのにビビは呑気なことを言う。

「それってノースで流行ってる遊び？ アタシもやるやるう」
やると言つて自分のをやればいいものを、ビビはエルザのスカート
のジッパに手をかけてた。

「やめるビビ!」

「よっし、そっちが上に上げるなら、アタシは下に下げちゃう」

「違う違う、下げるな脱げるだろ！」

学院中が大混乱の中、微かな声がポツリと漏れた。

「……ばかばか（ふあふあ）」

ワラ人形を持った美少女　　じゃなかった、ローゼンクロイツが無表情なまま現れる。

全く念の影響を受けていないようすのローゼンクロイツは、なんと驚くべき行動を取ったのだった！

地面に描かれている回線を足で消す。

思わずカーシヤは『……あつ』という表情をする。最大の弱点を突かれた。

《四》

念波が消えた。いや、逆流していく。

蒼ざめるカーシヤ。

「クリスちゃん、なんてことしてくれたのだ！　妾の偉大な実験が……うっ（か、体が火照る、ふふっ）」

立ち眩みを起こしたカーシヤはそのまま地面に倒れ込み動かなくなつた。

逆流する念波はカーシヤを通して、ルーちゃんの糧となり魔力となる。

「はははははつ、あゝはははははつ、力が、力が漲ってくるぞ！」

高笑いをするルーちゃんの身体は激しい光に包まれ、まさにそれは人間イルミネーション。

素早く着替えを済ませたエルザが素早く刀を抜きルーちゃんに襲い掛かる。

「すまぬルーファス！」

「ふんっ、この大魔王ルーファス様に刃向かう気が！」

風を切り裂くエルザの一刀をなんとルーちゃんはチヨキで挟んで受け止めてしまった。

残ったルーちゃんの手が素早く動く。

「くらえ秘儀スカートめくり！」

手と風の力を利用して放たれたルーちゃんの秘儀は、エルザのスカートをふわりとめくり上げ、黒いレースの下着を召喚した。生徒会長色っぽいです！

時が止まる。エルザの思考は一時停止して、その後訪れる激しい発熱作用。そして、見る見るうちに目じりが上がり、キれる。

「スカートめくりをされるなど末代までの恥。よくも、よくも貴様、許しては置かぬぞ！」

チヨキから抜かれた刀が滅茶苦茶に振られ、ルーちゃんをみじん切りにしようとする。

暴走エルザVS自称大魔王ルーファスの戦いを傍目から見ているこの三人。どこからか持ってきたちゃぶ台をグラウンドに置いて、ビビとローゼンクロイツとカーシヤはお茶を飲みながらドラ焼きを頬張っていた。

「ダーリン頑張って！」

『ルーちゃんラヴ』と描かれた小旗を振りながらルーちゃん

を応援するビビの横でお茶を飲むローゼンクロイツ。

「……熱々青春だね（ふにふに）」

「ふふっ、愛は素晴らしいな！」

なぜか悶えるカーシャにビビからツッコミ。

「もしかして彼氏いない暦うん千年って感じ？」

「一度も男と付き合っただことのないお子様と言われたくないな

（ふふ、トラウマを思い出してまった）」

「ふん、今はダーリンがいるもん！」

「押し掛け女房だろうが？」

「うっ……」

それを言われると返す言葉がない。

ローゼンクロイツはドラ焼きを食べながら何食わぬ顔をして、ワラ人形をビビの眼前に突きつけた。

「るーふあす八迷惑シテンダロ、コンチキショー！」

「アタシがダーリンに迷惑掛けてるって言うの!? これでも頑張って尽くしてるんだよ！」

ビビの怒りの矛先、ビビの視線はローゼンクロイツに向けられているが、ローゼンクロイツはあくまでこう言う。

「ボクじゃないよ、言ったのはこのワラ人形のピエール祝縛クンだよ（ふあふあ）」

なんだかすごいネーミングセンスです。

一瞬の間、ネーミングセンスに圧倒されたビビだが、すぐにローゼンクロイツに喰って掛かる。

「人形がしゃべるわけねえだろうが！」

言葉遣いが乱暴になっちゃったビビちゃんを、ローゼンクロイツが口元だけを動かして嘲笑う。

「……ふっ」

立ち上がったローゼンクロイツがワラ人形を手放すと、なんとワラ人形が浮いて勝手に動き出した。

「ナンダバカヤロー、コレデ文句アルカ！」

突然繰り広げられるイリュージョンにビビは目をキラキラと輝かせて喰いつく。時たま垣間見せる純粹で無邪気なところが素敵です。

「すごい、すごい、魔法生物なお!？」

無邪気なガキンチョを冷めた瞳で見つめるカーシャの冷めた一言。

「透明な釣り糸が見えるだろうが。釣り糸で動かしてるのだ(やっぱりガキだな)」

「……ちっ、バレた(ふっ)」

ローゼンクロイツはあからさまにワザと作った嫌な顔をして、すぐにもとの無表情に戻る。

イリュージョンのネタバレをされたしまったビビはショック!
「がぼーん! だ、騙された」

ショックを受けてドラ焼きのヤケ食いをするビビに、ピエール呪縛クンが優しく話しかかる。

「マア気ヲ落トスナヨ、人生山アリ谷アリ、ドン底アリダゼ」
「うるうる……ありがとおピエール呪縛クン。感動したよお」

芽生える固い絆。二人は互いを見つめ合い、深い恋の渦に墮ちてゆく……なんてことはない。

いつの間にかお茶から焼酎に飲み物が替わっているベカーシヤは、ドラ焼きの代わりに裂きイカを食べながら酔った手つきでルーちゃんたちを指差した。

「ビビちゃん、こんなところで遊んでないで早くダーリンのとこ行ったらあん。早くしないと、大事なダーリンをエルザちゃんに寝取られちゃうわよぉくん」

なんか口調が完全に酔っ払いです。

ビビは八つとして立ち上がった。

「そうだ、ダーリンにキスしなきゃ！」

愛しいダーリンのもとに飛び込もうとするビビの視線に光り輝く物体が入った。

クルクル回り放物線を描いてビビに向かって飛んでくる物体。「わぁ、折れた刀だぁ」

それがなんであるかビビが気づいたと同時に、折れた刀はビビの前髪を掠りながらスパーンと足元に突き刺さった。きつと、ビビの胸にもっと凹凸があつたら大変なことになっていただろう。時として幼児体系も役に立つ時があるのだ。

地面に刺さる折れた刀を見ながらビビの中でカウントダウン。

三。

二。

一。

「おんどりやー！ アタシを殺す気か！」

禍々しい鬼気を放ったビビはどこからともなくちょー巨大ハンマーを召喚！

ハンマーの大きさはだいたい人間の脳天を一撃でクラッシュさせられるくらい。

小柄なビビの身体から想像もできない力でハンマーをブンブン振り回すその姿は、悪魔というよりは鬼神。

猪突猛進のビビちゃん。豚は猪の改良種！

ビビの怒りの矛先はエルザだった。

「おのれえエルザあああつ！」

「私のせいではないぞ、ルーちゃんが私の愛刀を追ったのだ！？」

「問答無用じゃ！」

言葉遣いが明らかに変わっちゃってるビビが第一球振りかぶる！

空振り！

「私のせいではないと言っておろう！（くそつ、二重人格かこの娘は）」

「ダーリンはアタシのもんだ！」

第二球振りかぶる！

空振り！

「私の話も聴け！」

「ダーリンを返せ！」

第三球振りかぶる！

空振り三振！

紙一重でビビの猛攻をかわしたエルザは、ルーちゃんとの戦闘以上に体力を消耗していた。

このままではラチが明かないと判断したビビはハンマーを投げ飛ばして、大鎌を取り出した。ちなみに投げられたハンマーはどつかの誰かさんたちが困らんといたちゃぶ台を大破。

大鎌を取り出したビビはなんと……ルーちゃんを人質に捕った!?

「ふふふ、ダーリンを人質に捕られたら手も足もでないでしょ。アタシ天才!」

何か間違ってますんかビビちゃん?

しかし、なぜかルーちゃんは人質気分。

「た、助けてくれ!」

ついでにエルザも人質を捕られた気分。

「くっ、小癪な!」

唾を飲む音が聞こえる。

首にナイフを突きつけられたルーちゃんは身動き一切できず、エルザは折れた刀の柄を強く握り直しどう戦う?

誰もがこの先の展開を見守った。しかし、誰もいつの間にかビビが悪役に転じていることにツツコミを入れる者がいない。

ここにいる者たちはどちらかと言えばポケ担当だった。この事態を打開できるのはツツコミだけ……なのかつ?

校庭に空っ風が吹き、黄土色の砂埃がローゼンクロイツに舞う。

地面に映る青い影。その人物はビビとルーちゃんの真後ろに

迫っていた。気配を忍者なみに消すことのできる者。団らんの
仕返しだった。

青い影が先端に三角の付いた棒を振り上げる。

ゴン！

後頭部を強打されたルーちゃんが顔面から地面に転倒気絶。

ゴン！

二発目の攻撃でビビが頭を押さえて地面にうずくまる。

「いたあゝい……誰？」

涙目でビビが後ろを振り向くと、そこにはシャベルを構えた

ローゼンクロイツが立っていた。

「……実力行使（ふにふに）」

だそうです。

地面で身動き一つしないルーちゃんをビビが慌てて膝枕で抱
きかかえる。

「ダーリン、ダーリンしつかりして！」

「うっ……うっ……」

微かに動くルーちゃんの唇。

「ダーリン死んじゃヤダよ！」

「うっ……今日のパンツは、あっクマだ……あくまだ……悪魔
だ……なんちゃって……」

「ダ……ダーリン、ダーリンのばかっ！」

強烈なビビの平手打ちがルーちゃんの頬にクリティカルヒッ
ト！

鼻血が噴水のように飛び出し、ルーファスは完全に目を覚ま

した。

「あれっ？ ここどこ……学校……うくん、記憶が曖昧だ」

「ダーリン！」

涙をいっぱい浮かべたビビは両手をいっぱい広げてルーファスに抱きついた。その時にあることに気づいた。

……胸がない。

自分の胸じゃなくなってルーファスの豊満なバストがなくなってる!?

「ダーリン、元に戻ったんだね……」

「元について僕……があっ!？」

ルーファスは自分の鼻を触った感触が生ぬるいことに気が付いて、真っ赤に染まった掌を見た。

「なんじゃこりゃ〜っ!？」

素っ頓狂な声を荒げたルーファスは真っ青な顔になって、ビビの膝にうなだれる。

「ダーリン、ただの鼻血」

「えっ、鼻血？」

「まあ、ダーリンだったら（そんなヘタレなところが大好き）」

「あはは、な〜んだ鼻血かあ」

いつの間にか二人の世界に入っているルーファスとビビを冷めた目で取り囲む三人。

まず、顔を真っ赤にしている生徒会長様から一言。

「……こんな公衆の面前で恥を知れ！」

次に一升瓶を片手のカーシャ姐さんから一言。

「ああん、青春よねえん！」

最後に無表情のローゼンクロイツから一言。

「……不潔（ふつ）」

顔を真っ赤にして状況把握をしたルーファスが慌ててビビの膝から起き上がる。

「か、勘違いしないでよ！ 私は無実だ、何が無実だか自分でもなに言ってるかわからないけど無実だ。私は潔白で純粹無垢の青春真っ盛りの学生さんです！」

言えば言うほどドツボに落ちる。

ピエール呪縛クンがルーファスの眼前に突きつけられる。

「エツチ、痴漢、破廉恥！」

「私が何したんだよ、気づいたらグラウンドだし、何があったか誰か説明してよ！」

一方的に全生徒から軽蔑の眼差しで見られるルーファス。

ルーちゃんの起こしたあの一連の行為はルーファスの深層心理だったのか……？

下駄箱から木刀を構えて猛ダッシュしてくる人影。

怒った顔をして走って来たのはクラウスだった。

「ルーファス！ さつきはよくも！」

「私はなにもしてません！（だって覚えてないもん）」

「僕の大事なレディたちに恥辱を働くとは……問答無用だ！クラウスにとつて世の女性はみんな大切なレディなのだ。

禍々しいオーラを放った木刀がルーファスの顔面に会心の一撃！

ゲオン！

勢いよくルーファスは後頭部を地面に打ち付けた。

「ダーリン！」

すぐにビビが抱き起こそうとすると、ルーファスはビビの体を振り払って自らの力で立ち上がった。

「あゝははははっ、大魔王ルーファス様復活！」

「……………」

いろんな場所からため息が漏れ、メガホンを構えたカーシャが大声で話す。

「うむ、みんな授業に戻るぞ」

いろんなところから『はい！』という返事が返ってきて、流れ解散。

教室に帰っていくカーシャたちの背中にルーちゃんが怒鳴り散らす。

「おい待て、わたしを無視するつもりかっ」

「ダーリン、アタシだけは無視しないよ！」

ルーちゃんの首に腕を絡めて抱きつくビビ。

グラウンドにぼつんと残された二人を見て誰かが呟いた。

「……………ばかばっか（ふっ）」

この後、授業はルーちゃんを完全無視して通常通り行われたとさ。

第三話 そんなこんなで休日

《一》

仔悪魔ビビとの共同生活を営みはじめて早数日、ルーファスは毎日の生活にある意味退屈しないで過ごしていた。

そんなルーファスにもやっと安息できる休日がやって来たのだ！

「ダーリン、あそぼ！」

安息できませんでした！！

ソファアに座っているルーファスの上にビビちゃんジャンプ。
「うっ！」

ビビの膝がルーファスの腹にボディブロー。

「ダーリンどうしたの!？」

「腹……が……」

「空いた？」

スパーン！

ルーファスのチョップがビビのおでこに炸裂。その勢いでビビは床に尻餅をついてチラリン。スカートの間合間から覗く水色ストライプ。今日はクマさんではないらしい。

せっかくの休日だっていうのに、ルーファスに安息はない。しかも、ただの休日ではないのだ。

「ダーリン今日の夕飯何にするう？」

「ビビは作らなくていいから（……悪夢がよみがえる）」

「せっかく腕によりをかけてダーリンに美味しいもの食べてもらおうとしたのにい」

「腕によりをかけなくていいから、はあ」

ルーファスはため息をついた。

昨日も手作りお菓子とかいう触手のついたナマモノを出されたりだった。

「いつもどおりデリバリーかコンビニで済ませばいいよ」

「ええ〜っ、やっぱリアタシが作るう」

「だから作くらなくていいから」

笑顔のルーファス。目の奥が笑ってない。

もともとルーファスは自炊をしない。てゆか、できない。

なのでもともとコンビニ弁当かデリバリーでいつも済ませているのだ。

ルーファスはそれで慣れているが、同居人がたまには手料理が食べたいとダダをこねる。

かと言ってビビの料理センスはゼロだし、ルーファスもレンジでチンとお湯を注ぐ料理しかできない。

「困ったなあ（外食はめんどくさいしなあ）」

ルーファスが天井にシミを数えながら考え事していると、部屋の片隅から青年の声が聞こえてきた。

「で、ルーファスはなにが食べたいんだい？」

この声を聞いてルーファスがソファから起き上がる。

「な、なんでクラウスが僕の部屋にいるんだよ!?（ウチに来る人ってインターホンを鳴らしたためしがない）」

部屋の片隅でクラウスが自分の部屋のように寛ぎながら雑誌を読んでいた。

「てゆか、これでもクラウスはこの国の王様だ。こんな場所で油を売っていていいんですか？」

「王宮で食事があってね、めんどろくさいから影武者を立てて抜け出して来ちゃったよ、あはは」

さわやかにクラウスは笑った。

「食事会」社交界「外交問題」。

「見事な外交無視です！」

雑誌をパタンと閉めたクラウスは身体を伸ばしてビビに視線を向けた。

「ビビちゃんはなにか食べたいものあるかい、人間の料理限定でね？」

「うゝん、ラアマレ・ア・カピス！」

「あはは、それはデザートね。もう一度聞くけどルーファスはなにが食べたい？」

「もしかしてクラウスがおごってくれるの？」

「ああ、もちろん。なんでも好きな物を食べさせてあげるよ」

「ラマカレ・ア・カピス!!」

「元氣よくビビが口を挟んだ。」

「あはは、だからそれはデザートね」

クラウスは営業スマイルでビビの発言をヒラリとかわした。

明日で世界は消滅します、最後に食べたい物はなんですか
みたいな質問をされたような顔で考え込むルーファス。

「うーん、じゃあコンビニのデラックス肉まんを死ぬほど食べたいなあ（いつもはお金節約してノーマル肉まんしか食べてないからなあ）」

スーケルが小さいです。器の小さい男です。てゆか、欲がなさ過ぎです。

一国の王、それも魔導産業で財政ウハウハの魔導大国アステアのトップが、庶民が食ったことねえーもんをたらふく食わせてやるよ、ぐふふ　と言っているにも関わらず（言っていないけど）、ここでデラックス肉まんを注文するのかっ！！

はい、それがルーファスクオリティです。

ビビはちょっぴり不満そうな顔をしている。

「ええーっ、肉まんより苺あんまんのほうがいいよお」

包んでいる具が変わっただけだった。

ビビとルーファスのクオリティはほぼ一緒だった。

そして、そんなルーファスの友達も　。

「それいいね、僕もコンビニの中華まんをお腹いっぱい食べてみたかったんだ（そんなこと王宮で言うとは止められるからな）」

みんなそろってルーファスクオリティ！

「では、こういうのはどうだ？」

その声は四人目の声だった。

しかも、ちょっと離れたキッチンから聞こえた。

三人が急いでその声の主を確かめに行くと、キッチンでお出迎えしてくれたのは!?

「ルーファス、茶菓子のストックがなくなっただから補充しておけ」

なぜかキッチンでクツキーを頬張っているカーシャ。

ルーファスはすぐさまクツキーの缶を手にとって、フタをカーシャに突き付けた。

「僕が大事に取って置いたクツキーだったのに!（せっかく夜食で食べようと思ってたのに）」

「知るか。それよりもさつさと客人に茶を入れる」

不法侵入者を客人とは呼べません。

でも、カーシャがルーファス宅に不法侵入するのはいつものことだ。第二の実家と行ってもいいほどで、カーシャの食器セツトまで置いてある。

ルーファスは暗い顔をしてカーシャ専用湯のみで茶をいれた。クツキーはすでにカーシャの口の中。ルーファスは未練がましくクツキーの缶に残る匂いを嗅いだ。顔面がゾンビのように蕩ける甘い匂いが、春の麗らかな陽気と小川のせせらぎを誘って来て、その小川の向こうでは死んだお爺ちゃんお婆ちゃんがニコニコしながら手を振ってる。

トレビアーン!

ルーファスがクツキーの余韻を楽しんでいると、突然ビビがクツキーの缶を奪い取った。

「せっかくの残り香!」

「このクツキーアタシ知らない。もしかしてダーリンひとりで食べるつもりだったのぉ？」

「ギクツ！」

口に出してしまうなんて随分わかりやすい性格。

ビビのクリクリした瞳がルーファスの濁った瞳を覗き込む。

「今、『ギクツ！』って思いっきり口に出して言ってたよ。白状するなら今のうちだよ、今だったらカツ丼もついちゃうよ、言いなさい、言え、言えよぉ！」

「キレないですよ。もちろんビビと一緒に今晚の夜食にしようとしてたんだよ（本当はひとりで食べる気だったけど）

「ビビと一緒に今晚の夜食……ビビと一緒に……夜アタシのと襲うつもりだったのね！」

「言葉の意味を履き違えないですよ！」

「そうならそうって言うてくれればよかったのに。今からアタシのこと召し上げれ」

「だから違うって言うてるでしょ！（妄想が激しすぎ）」

二人の痴話喧嘩というか、夫婦漫才を見ながらカーシヤはニヤニヤする。

「青春だな（若氣に至りで過ちの愛、生きるって素晴らしいな！ ふふっ）」

三人とは空気感の違うクラウドスは勝手に冷蔵庫チエックをしていた。

「ほお、これが庶民の食生活か……（質素だ）」
冷蔵庫の中には食材が入っていないかった。

入っているものと言えば、冷凍食品、アイス、食べかけのケーキ、プリンターのインク、湿布、目薬……そして、貯金箱！
クラウドが貯金箱を取り出そうとすると、ルーファスが必死で止めに入った。

「だめだめ、せつかく隠してあるんだから出さないでよ！」

「こんなところに隠すなんて、これが庶民の常識なのか！！」
クラウドスカルチャーショック！

ビビちゃんが手の甲でクラウドをビシツツとツツコミ。

「違うから」

冷蔵庫チエックも終わったところで話を戻そう。

そうだ、夕食の話をしていたのだ。

時間を巻き戻して、その話の続きはたしかカーシャのセリフだった。

では、こういうのではどうだ？

と、カーシャがなにか提案しようとしていたはずだ。

だが、その当事者のカーシャはすっかりお茶を飲んで寛いでいて、まったく話を進める気がなさそうだ！

てゆか、話の途中だったことさえ覚えていない雰囲気をかもし出している。

誰も話を進める気がなさそうなので、ルーファスは話をまとめることにした。

「じゃあ、コンビニの中華まんを買い占めるってことで夕飯はいいよね？」

ビビは笑顔でうなずく。

「うん」

クラウスも異存ないようだ。

「ビビちゃんがオツケーなら僕もそれでいいよ」

そして、今まで寛ぎモードだったカーシャが椅子から、ビシツとバシツとズバツと立ち上がった。

「妾は納得しとらんぞ」

あんたも一緒に夕飯する気ですかっ！

カーシャはルーファスに向かって、これまたビシツとバシツとズバツと指を差した。

「お前の考える贅沢とはその程度のものなのか！ 究極の食材で作った至極の料理を一度でいいから食したという志を持つ。

そして、今から伝説の食材を探しに異界に行くぞ！」

ものすごいスピーディーな急展開。あまりにも突拍子もなく、誰もついて来てない。みんなポカーンとしてしまっている。

時差があつてルーファスが声を出した。

「はあ？」

なんで伝説の食材を探しに行くのかわからない。

どー考えてもカーシャの娯楽だ。

だが、こっちの人はなんだか目を輝かせていた。

「みんなも知つてのとおり、僕の祖父は冒険家でもあつたからな。昔から僕も冒険に目がないんだ！」

王様改め、冒険家クラウス行く気満々。

そして、こっちも瞳を輝かせていた。

「行く行く、秘境大冒険とかおもしろそお（オバケが出てき

た拍子にダーリンに抱きついちゃったりしてえ」

それはオバケ屋敷です。

ただ独り猛反対するルーファス。

「私は断じて行かないからね（カーシャのことだから、絶対にそこデッド・ゾーンだし）」

カーシャの道楽に付き合っているのは、いくつ命があっても足りない。今ここでルーファスが生存していることも奇跡だ。

カーシャが冷血な瞳でルーファスを睨んだ。

「来い」

長々とした脅しより、短い言葉のほうで心臓にグサツとくる。

「行きます！」

ルーファスは作り笑顔で即オツケ！。

今ここで殺されるか、異界で危険な目に遭って死ぬか。ルーファスはちょっとでも長く生きられるほうを選んだ。

カーシャは飲み干した湯飲みを置いた。

「では、行くとするか」

そう言っ胸の谷間からマジックアイテムを取り出した。

その形は金庫のダイヤルのように、冷蔵庫のドアにピタッと張り付いた。

カーシャはダイヤルをクルクルと回し、冷蔵庫の取っ手を引っ張った。

「開けゴマ！」

カーシャの高らかな声とともに冷蔵庫が開かれ。激しい閃光が部屋中に満たされる。

ビビとクラウドは自ら光の中に飛び込んだ。

逃げ出そうとしたルーファスのケツにカーシャの蹴りが入った。

「うわっ！」

ルーファスは頭から冷蔵庫の中に突っ込んだ。

「さて、行くとするか……ふふっ」

最後にカーシャが光の中に飛び込んだ。

《 二 》

暑い、暑い、地面も熱い砂漠地帯。

ムカつくほど照りつける太陽。

なにもしなくても汗が滝のようにダラダラ流れ落ちる。

もともと痩せ型のルーファスが、今はさらにゲツソリして干物になりかけている。

炎属性の精霊サラマンダーの守護を受けているクラウドさえ、暑さで意識を朦朧とさせている。

もともと環境の厳しい魔界で育ちのビビは、多少の暑さは感じていたようだが、なんか異常に元気だった。

「ほら、ダーリンしっかりしてよお！」

「み、みず……（もう喉がカラカラだよ）」

水をくれと訴えるルーファスが取り出したのは？

「はいダーリン、ミミズ」

干からびたミミズだった。

そんなギャグにもはやツつ込む体力さえルーファスにはなかった。

クラウスが突然、遠くを指差して声をあげた。

「見る、オアシスだ！」

指の先には地平線まで広がる砂漠　　膺気楼だった。

クラウスは膺気楼のオアシスに向かって走り出す。

「小麦色の美女たちが水浴びをしているぞ、早くナンパしなくては！」

使命感に駆られてダツシユするクラウスの前にカーシャが立ちだかった。

「幻だ、しつかりしろ！」

カーシャの鉄拳がクラウスの腹に入った。

「うっ……美女が……（僕を待っているのに……）」
バタン！

クラウスは砂の海に沈んだ。

砂漠の大地に凜々しく立つカーシャ。

「お前たち、この程度の暑さで音を上げては学院を卒業できないぞ！（妾に金を積みめばどうにかしてやらんこともないがな、ふふっ）」

この暑さの中で平然としているカーシャ。

氷の女神ウラクアと水の精霊アンダインの守護を受け、氷の魔王の異名まで持っているカーシャが、こんな灼熱の砂漠で平然としていられるハズがない！

干からびた手を上げるルーファス。

「はあ、いい、センサー質問でうーす」

「なんだルーファス？」

「ゼンゼーはどーじて平気なんですか？」

「魔導具を使っているに決まっておるだろっ」

あっさり。

最後の力を使い切ったルーファスも砂の海に沈んだ。

カーシャは二人が溺死しそうなものほっといて、さっさと先を急ごうとする。

元気なビビがカーシャの袖を掴んだ。

「ダーリンたちを助けてよ、魔導具があるんでしょ？」

「ある」

「だったら早く助けてよお！」

「高いぞ」

「死ね」

笑顔でビビちゃん臨戦態勢。いつの間にか大鎌を構えてカーシャの首に突き付けていた。

そんな脅し程度じゃカーシャは動じない。

「ウソに決まっておろう。妾もそこまでケチじゃない、これを飲ませる」

カーシャはちまたで噂の四次元胸の谷間に手を突っ込み、三本の試験管を取り出した。

そして、コルクのフタを親指で弾き開けると、問答無用に一本目をググッとビビの口の中に。

「うっ……うぐっ……アタシは別に平気だし！（苦くてマズー

イ」

「実験体は多いほうがいいだろう」

「アタシまで巻き込まないで！」

「料金の代わりだと思え」

「やっぱりケチだ！」

謎のクスリを飲まされたビビの頬が少し赤らんだ。なんだか嫌いな授業中に浴びる春のポカポカ陽気が、ビビの体を包み込んでいくように暖かい。このまま寝たらとつても気持ちよさそうだ。

カーシャは残り二本のフタも開け、強引に干物状態の二人に飲ませた。すると、効果はすぐに現れた。

潤いたつぷり美肌でルーファス&クラウス復活！

「……死ぬかと思った」

「美女たちが消えた……幻だったのか」

無事生還できたようで、今回の実験は見事成功したようだ。暑さの問題が解決されて、四人は先を急ぐことにした。

しばらく歩いてみると、ビビが『はあ〜い』と手を上げた。

「カーシャに質問タ〜イム」

「なんだ？（スリーサイズなら教えてやらんぞ）」

「何を探しに行くのお？」

「ああ、言っただけだったな」

言っただけです。自己中心的な人はこれだから困ります。

足を肩幅に広げて地平線の向こうにそびえる影を指差したカ

ーシャ。

「もう見えるぞ、アレだ。妾のマブダチ可学者ベルの領地。そして、その領地には世にも珍しい砂漠の氷　“雪男の唾”がある。その氷で作ったカキ氷は死人も生き返るほどの美味なのだ」

「なんだか不味そうです。」

砂漠のそびえ立っていたのは鋼の城だった。

金属で作られたその城から、オイルの臭いが風に乗って運ばれてくる。耳を澄ますと、モーターや火花の散る音が聴こえる。ルーファスがイヤそうな顔をしている。

「砂漠に氷なんかあるわけないじゃん、帰えるよ（しかも名前が“雪男の唾”って）」

背を向けて歩き出すルーファスの腕をクラウスが掴んだ。

「砂漠に氷があるなんて神秘的じゃないか。ルーファスはトレジャーハンターの血が騒がないのかい！」

「そんな血流れてないし」

「流れていないのなら、今から流すんだ。それでこそ男の中の男だ！（嗚呼、浪漫だ！）」

もうクラウスの思いを誰も止められなかった。

「ビビちゃんは最初から行く気満々。」

「ダーリンがんばって！　アタシに美味しいカキ氷食べさせてくれるんですよ！」

「そんな約束してません。」

「あのねえ、カーシャについて行くとロクなことないよ。それは私が身をもって証明してるんだから、ね？」

どーにかしてルーファスは行かない方向に話を進めたかった。だが、それを許さないのがカーシャ様！

「ふふふつ、世界一美味しいカキ氷が食べたくないと言うのか！妾について来ないのなら、進級させてやらんからな！」

「……職権乱用だよ！」

「ふふふつ、なんとでも吠える。だが、来なきや退学だからな！」

なんか進級が退学にグレードアップしてるし！

爆乳を揺らしながら勝ち誇って笑う魔女カーシャ。

しよせんルーファスには形勢逆転なんか不可能だ。ルーファスがへつぽこを返上するくらい不可能だ。ルーファスは権力を前に屈するしかなかった。

肩を落とす、ため息をつきながらルーファスはお手上げ状態。「行くよ、行けばいいんでしょ、行ってやるよ！（要は死ななきやいんでしょ！）」

横暴教師カーシャの完全なる勝利。邪悪なる権力の勝利だ！「うふふふつ、“雪男の唾”を手に入れた暁には問答無用で最高の成績をつけてやるぞ！」

負けるな学生、頑張れ学生、それゆけ学生！

“雪男の唾”とやらを採りに行くのはいいとて、果たして危険はないのだろうか。そーゆー特別なアイテムには、それを守るモンスターとかがいるのがお約束で、へつぽこ魔導士ルーファスなんて軽くくあの世逝きじゃないだろうか？

いや、大丈夫！

こっちにはクラウスもカーシャもいる。

あつ、もう一人いた。

「はにゃくん、身体ほかばかあ」

この仔悪魔はあまり役に立ちそうもなかった。

ビビはカーシャの飲ませたクスリのせいで、未だにポカポカ気分の夢心地だった。それも時間が経つごとに夢心地指数が上がり、酔っ払いらしく、酔っ払いみたいになり足取りが覚束ない。

フラフラするビビはルーファスの方へと引き寄せられて胸板に頭突き。

「うっ！（頭突き……）」

肺の活動を一時停止させながらも、ルーファスはビビの体を抱きしめて顔色を窺った。真っ赤な顔したビビはまるで酔っ払いみたいだ。

「大丈夫ビビ？（なんで酔ってるの？）」

「はにゃくん、きやははははっ！」

突然笑い出すビビ。本当に酔っ払ってる。完全にアブナイ人だ。

この状況にルーファスは、元凶であると思われるカーシャに意見を仰ぐ。

「何飲ませたの!？」

「やつぱり、失敗作だったようだな。こいつらに先に飲ませて正解だった（やつぱり材料にマンドゴラを混ぜたのがまずかったな）」

失敗作だってわかってて飲ますなよ。ってというか生徒を実験

台にするなよ！

酔っ払ってるビビはルーファスの身体にベタベタくっ付いてくる……いつもとかわないジャン！

な〜んだ。と思いきや、第三者がルーファスの腕に絡んでくる。な、なんとそれは消去法からもわかるけどクラウスだった。

「こんな砂漠でメガネツ娘に逢えるなんて感激だ！」

なんか幻覚を見ているようだ。ルーファスをメガネを掛けた娘だと思い込んでいる。

ヤバイ、ボーイズラブに発展してしまう！

そんな展開ルーファスシリーズで許されるハズがない！

二人に抱きつかれて焦るルーファス。

「ちよつと、ちよつとちよつと、二人とも離れてよ」

「ダーリン、アタシのこと嫌いなのお？」

「僕のこと嫌いなのかい？」

二人の愛くるしい瞳がルーファスを離さない。

何も言わないルーファスに対して二人の身体の密着度は上がり、ビビちゃんの小さな膨らみがググツと押し付けられ、高貴な顔立ちのクラウスの唇がすぐそこまで迫っていた。

「ダーリン大好きだよ！」

「僕も君とはじめて出逢ったときから、運命で結ばれているよ
うな気がするよ」

ダブル告白！

クラウスの告白がルーファスの胸を激しく突いた。

まさか人生で男に告白されるなんて想定外の出来事だった。

しかも、口説きモードに入っているクラウスの甘いマスクは、異常なまでに美しく見てとれてしまう。

相手が男だっってわかってるのにルーファスはドキドキしちゃった。

まさか、ルーファスもまんざらでもない？

そっち系も対応できるんですかルーファス！！

なぜか無言で見詰め合っってしまうルーファスとクラウス。

そこに嫉妬の炎を燃やすビビが乱入。

「ダーリンはアタシのものだからね、クラウスはどっか行って！」

「このメガネツ娘は僕と結ばれる運命にあるんだ。誰にも邪魔はさせないよ」

「ダーリンはアタシの旦那様だもん」

「ふっ、君はしよせん愛人止まりさ」

なんか話が噛み合っているようで噛み合っていない戦い。

ルーファス争奪戦の状況をあざ笑うカーシャ。すごく楽しそうに笑っている。

「ふっ、青春だ。愛する者をめぐる泥沼トライアングル。なんて昼ドラ展開なのだ！」

男と男が女をめぐって戦うのではなく、男と女が男をめぐる特殊バトルだ。しかも、一人の男はもう一人の男をメガネツ娘だと思っ込んでいる！

睨み合い、相手を牽制する二人の間に、ルーファスを押し退けてカーシャが割って入った。

「お前ら、妾にグッドアイデアがあるぞ」

「カーシャは引ッ込んでてよお！」

「これは僕たちの戦いですから！」

激しい態度でカーシャを怒鳴りつける二人であったが、カーシャがこんなところで引き下がるものか！

「うっせんだよ……アタイの話を聴けって言っただろうがッ！」

突然、人格が変わったカーシャがガンを飛ばした。

小動物のように震え上がるビビとクラウス。中でも一番ビビッたのはルーファスだった。ルーファスは腰を抜かして口を半開きのまま凍っている。

口に手を当てて咳払いをするカーシャの表情が、いつもどおりの冷めた美女に戻った。

「さて、では妾の素晴らしいアイデアを聞かせてやろう。な、なんと“雪男の唾”を先に手に入れた者に豪華賞品としてルーファスを贈呈しよう、妾の権限だ」

「僕を勝手に商品にしないで！ 認めないからね、断じて認められないね。しかもカーシャの権限ってなんだよ（いつから僕はカーシャの所有物に……って、いつものことか）」

「妾の権限は妾の権限だ、文句あるなら徹底的にやるぞ？（あゝんな拷問やこゝんな拷問でヒィヒィ言わせてやる……ふふふ）」

邪悪なカーシャの瞳で見つめられたルーファスはたじろぐ。冷血な瞳の奥に狂気を感じる。逆らったら死ぬよりツライこと

が待っているに違いない！

脅えるルーファスは無言でコクリと頷いた。それを見たカーシャは微笑んだ。

「うむ、では華々しいレースの開幕といくぞ！」

胸の谷間に手を突っ込んだカーシャは銃を取り出して天に向けた。

「では、位置について……ヨイ」

ドン！

引き金が引かれ、銃声とともに火花が散った。でも、誰も走らない。啞然として誰も走ろうとしない。そんなビビとクラウスに銃口を向けられる。

「妾がせっかく雰囲気を出してやったのだ。速く走れ！」

キレた眼をしているカーシャは問答無用に銃を乱射させた。

銃弾がビビとクラウスの足元に放たれ、砂の中に埋もれ消える。

この人ヤル気だ！！

蒼ざめるビビとクラウスは互いの顔を見合わせて、『さんはい』といった感じ同時に猛ダッシュで逃げる。とんずらこいで！

必死こいて逃げるビビとクラウスの背中に見守るカーシャ。

かなり満面の笑顔。

「せいぜい頑張れ、ふふ」

「……………」

腰を抜かしているルーファスの腰は、もつと抜けた。

砂に尻餅を付き、腰を抜かしているルーファスにカーシャが

足蹴りを食らわす。

「さつさと涼しい場所に行くぞ」

「は？」

なんかよくわからないがルーファスはカーシャに連行されたのだった。

《三》

燦然と輝く鋼の城 通称 針の城 と呼ばれている。

金属でできたその城からは、いくつものパイプが天を突くように伸び、そこから大量の蒸気を噴出している。

城門の前に立ったカーシャがインターホンを押す。

「居るだるベル。遊びに来てやったぞ」

インターホン越しにカーシャが話しかけると、金属でできた城門が重々しい音を立てながらゆっくりと開いた。

城の奥からは強烈なオイルの臭いが噴出してくる。酔いそうだ。

カーシャは躊躇することなくさつさと城の中に入り、ルーファスは躊躇しながら恐る恐る城の中に入った。

城の廊下は足音が響く金属製で、明かりは蛍光灯が照らしている。

カーシャは自分ちのようにドガドガ進み、とある扉の前で止まった。すると、扉は自動的に開かれた。

部屋の中は真っ暗で何も見えない。

臆病者のルーファスはカーシャの腕を掴もうとした。

「殺すぞルーファス。妾のケツが触りたいのならばちゃんと料金を払ってからにしろ」

「ご、誤解だし！」

「裁判をやつたら妾が勝つぞ、そこに証人も居るしな」

「証人？」

暗がりが一気にライトアップされた。

「お、ほほほほ、アタクシの城にようこそ！」

白衣を着た姫カールの女が仁王立ちしていた。カーシャといふ勝負の爆乳だ。

大人の女性の色香をムンムン漂わせながら、金色の瞳がカーシャとルーファスを映した。

「カーシャちゃん、その子新しい彼氏？（いやあん、ついにカーシャちゃんにも春が来たのね。今夜は朝まで飲むわよおん！！）」

「こんなへつぼが妾の彼氏だと？ いつに耄碌「モウロク」したなベル」

「天才的な頭脳を持つこのアタクシが耄碌したですつてえ！

そんな見るからにへつぼこなオトコの子、カーシャにはお似合いだと思つたから言つただけよ！」

「こんなへつぼ、死んでも付き合いたくないわ！」

「そんな贅沢言つてらんないでしょアンタ。そのへつぼこで妥協しなよおん！」

「ならばへつぼこに欲情したら、お前もへつぼこだからな！」

へっぼこの合戦！

間に挟まれたへっぼこはへっぼこなので、どーすることもできない。

カーシャはルーファスのメガネを奪い取った。

晒されちゃったルーファスの素顔。

それを見たベルは生唾を飲み込んだ。

「び、美形だわ……アタクシの好みだわぁん！」

いきなり欲情。

ベルはすぐさまティータムの準備をはじめ、ルーファスを特等席に座らせた。

特等席とはズバリ！

ベルのひざの上。

爆乳がルーファスの背中を指圧する。

「あ、あのおく、胸が私の背中に当たってるんですけどぉ」

「あらぁんごめんなさぁい、ちよっと大きいから当たっちゃうのよねえん」

そーゆー問題かつ！

二人羽織り状態でルーファスはベルに紅茶を飲まされた。

そんな異様な光景を繰り広げられる中、淡々とカーシャは紅茶を飲み、冷たい視線をベルに送った。

「なぜ妾が来たか訊かんのか？（それどころじゃない感じだがな）」

「別に興味ないもの。アタクシが興味あるのは、ア・ナ・タ」

ベルの吐息がルーファスの耳をくすぐった。

ついに耐えられなくなったルーファスが飛び退き、ベルから離れた席まで非難した。

「ああん、逃げないでえん。逃げると追いたくなっちゃうじゃないあゝい」

「……追わないでください」

ルーファスはグルグル眼鏡を掛け直して、いつでも逃走準備オツケーだった。

ベルがなにか思い出したように手を叩いた。

「そうだわ、自己紹介がまだだったわね。アタクシの名前はベルフェゴール、親しみを込めてベル姐さんとも呼んで頂戴。で、ボウヤのお名前は？」

熱い視線がルーファスに送られた。

「ルーファス・アルハザードです。現在恋人募集してません！」

「だったら愛人だったらいいのかしらあん？」

色気ムンムンで迫るベル。

冷めた表情でカーシャが見ていた。

「子供をからかうのはその程度にしておけ。そして、妾の話を聞け！」

「んもお、怒らないですよ。なにしに来たんですかカーシャちゃん？」

「やっ」と話が本題に戻った。

「“雪男の唾”を取りに来たのだ」

「ふん。で、もう採ってきたのあん？」

「妾の下僕二人が命を削って採りに行っているハズだ（死んでなければの話だが、ふふふ）」

「へえ、他力本願ねえん（カーシャちゃんらしいわ）。けどおん、いいことを教えてあげましょうか。次の“雪男の唾”の採取時期は一〇〇年後よ、今行っても何も無いハズよ（ナイス無駄足だあん）」

飲んでいた紅茶をカーシャは噴出した。

「なにーっ!？」

噴出した紅茶は見事にルーファスに掛かったが、そのあたりは軽くシカト。

カーシャは身を乗り出した。

「“雪男の唾”がないとはどういうことだ？」

「去年にカキ氷大会の招待状送ったでしょう？」

「去年……?」

難しい顔でおでこに手を当てて、カーシャの内宇宙への旅がはじまる。記憶を巡り巡らせ、記憶の扉を開ける。そこにある白い封筒と一年前の消印。ハツとしたカーシャは顔を上げた。

「そー言えば届いていたな。そうそう、その日は急な用事ができて行けなかつたんだな、ふふふふっ（カーシャちゃんたらおちやめさん、ふふっ）」

まあ、カーシャったらうつかりさんだなあ。

なんて悠長なことを言っただうする。何も知らずに“雪男の唾”を採りに行かされてる二人の運命はいかに!？」

ここに追い討ちをかけるようにベルがボソツと呟く。

「そう言えば、アタクシの領地に物騒な子たちが住み付いちゃって、困ってたのよねえ〜ん」

絶体絶命。

この話を聞いたルーファスがベルに激しく詰め寄る。

「マジですか!? 物騒ってどのくらい物騒なんですか!？」

「女子供がよく狙われて、あ〜んなことやこ〜んなことをされて、仕舞いにはそ〜んなこともされるらしいわよおん（きやあ、お代官様あ）」

「マジでーっ!？」

城の中に響き渡ちやっしたルーファスの声。ちょー絶体絶命。

ベルがニツコリ笑顔で言う。

「マジよおん」

ルーファスの心は不安で押し潰されそうになった。早く二人を助けに行かなきゃいけない。そんな衝動にかられて居ても立つてもいられない。胸が熱く苦しい。

だってベルの爆乳がルーファスの胸板をグリグリしてるんだもん。

「うわあーっ、だから離れてっば。それよりも早く二人を…
…カーシャどうにかしてよ!」

「めんどくさいからイヤだ」

「めんどくさいってなにそれ! 元はと言えばカーシャが無理やり採りに行かせたんじゃないか!」

「違うぞ、ルーファスを賭けて熱い戦いをしに行ったのだ（ふ

ふっ、青春だ！」

絶対にカーシャは助けに行く気ゼロだった。しかも非を絶対に認めない。さすがカーシャ。

カーシャも話してもラチが明かないことを悟ったルーファスは、目の前にいるベルに顔を向けるが……顔じゃなくて胸しか見えないし！

「アタクシモイヤよあん」

爆乳に断られたし！

ルーファスは爆乳に訴えかける。

「そんな、だつてこつてベル姐さんの領地でしょ？」

「関係ないわ」

即答。

「ベル姐さん、そこをなんとか……」

「知らないわあん」

また即答だった。

ベルはカーシャと同じで人の言うことを訊くのがキラいなタイプだ！

「イブだ！」

こうなつたら奥の手だ。

ルーファスは自らグルグル眼鏡を外した。

「お願いしますベル姐さん、私の友達二人を助けてください」

シリアスモードのルーファスを見て、普段のルーファスを知ってるカーシャは紅茶を噴いた。

「（ふふっ、笑えん。腹が、腹がよじれる……ふふふふふ）」

大爆笑だった。

いい男に頼まれたらしょうがない、ついにベルが動き出した。
「立ちなさいカーシャ」

こう言われたカーシャは無言で立ち上がりベルを見据える。
立ち上がった女同士が互いを無言のまま見据える。殺伐とした空気が場を満たし、ルーファスの息は詰まってしまいそうだった。いつたいこれから何が起ころうとしているのか!?

ベルの拳が高く上げられ、カーシャの拳も高く上げられた。そして、ベルが大きな声を出した。

「最初はグー、ジャンケンポン！」

カーシャがグー。ベルがチョキ。勝者　カーシャ！

ジャンケンに負けたベルが床に膝をついてうなだれる。

「ま、負けた……アタクシの負けねえん……」

この一部始終を見ていたルーファスはポカンと口を開けた。

「はあ？」

呆然とするルーファスの肩に、立ち上がったベルが両手を乗せる。

「とういわけよおん。アタクシとアナタが救出大作戦に行くことになったわよおん」

どこからともなく大型バイクを取り出したベルは、それに跨りルーファスに顔を向ける。

「後ろに乗りなさい」

「はあ？」

「後ろに乗れって言うてるのよ、聴こえてるでしょ？」

「はあ」

しかたなくルーファスもバイクに乗った。

「アタクシの腰にしっかりと手を回しなさい」

「はあ」

ルーファスはベルの背中に自分の身体を密着させ、腕をベルのお腹に回してしっかりと掴まった。ベルの髪からシャンブーにいい香りがする。ルーファスはベルの身体からちよっぴり離れてへっぴり腰になった。

キラリーン！

と、ベルの瞳に光が宿る。

「行くわよおおん！！」

「ぐわあっ!？」

ルーファスを乗せたバイクが空に浮き、もうスピードで動き出した。しかも、ここつて部屋の中。

城の中のため低空飛行をするバイク。そんじゃそらの絶叫マシンより、よっぽど怖い。ちなみにバイクは後ろに乗るとさらに怖い。

ゴオオオオツ！！ と、ルーファスの耳は風の音以外の一切の音を遮断され、身体に伝わる揺れは震度四くらい？

城門を抜けたところでベルが大声を出す。

「しっかりと掴まりなさい！」

「ぐわあっ!?! (落ちるし、死ぬし!)」

バイクは直角九〇度に方向転換し、天を突く勢いで上昇した。ルーファス失神寸前。

ジェット機並みに空を飛ぶバイクにシートベルトもなしに乗ってられるのは、きつと魔法の力。魔法つて素晴らしいんだね。だが、後ろに乗っているルーファスは魔法の許容範囲外にいるらしく、空気抵抗もろ受けまくり。ルーファス失神。

バイクのスピードが徐々に落ち着いてゆったり運転になったところでルーファス復活。

「マジ死ぬかと思った」

「それは大変だったわねえん。けどお、悪い知らせがあるわ（ピンポンパンポーン）」

「聞きたくないです」

「燃料が切れたわ」

「はあ？」

「すっかり燃料いれるの忘れてたのよねえん、おほほほほ」

「つまり？」

「落ちる（ひゅ〜〜〜べちよ！）」

「なんですとーっ!？」

どーりでスピードが落ちてたはずだ。あはは、落下だつてさ。

笑えねえ！！

「アタクシに考えがあるわぁん（我ながらいいアイデアが浮かんでしまったわね）」

「何デスカ？」

「アタクシ一人くらいなら城まで戻れると思うのよね（さよなら、いとしい人）」

ドゴッ！

ベルの肘打ち炸裂。

思わずルーファスがベルの腰から手を離れたところで、バイクは一八〇度回転。つまり逆さま。

「うわあ!？」

ひゅ〜ひゅ〜。

ベルの視線の中で小さくなっていくルーファスの姿。ルーファスは空飛ぶバイクから落とされたのだ。

「さ〜て、城に戻って燃料補給でもしようかしらねえん」

たった今すごい酷いことをしたとは思えないベルは、爽やかな顔をして城に向かってバイクを旋回させた。

ルーファスの運命はいかに!？」

《四》

一方、ビビとクラウスはどうなっていたかということ 案の定捕らえられていた。

「こんな可愛い仔悪魔ちゃんを捕らえてどうするつもり!」手足を縛られ、ビビとクラウスの身体は一緒にグルグル巻きにされていた。

ビビとクラウスの酔いはとくに醒めている。というか、カーシヤに銃で脅されて走らされるよりも前の、別人格のカーシヤに怒鳴られた時点ですぐに醒めていた。

砂漠のど真ん中にある集落……なのにここだけ冬真っ盛り! 集落の家々は氷でできており、住んでいるのが人間じゃない

ことは明らかだった。

ビビとクラウスはその集落の中央にある広場にポツンと縛られて掴まっている。見張りをしているのは二人というか、二匹というか、二個の……雪だるま。そう、ベルが言っていた、物騒な子たちとは「雪だるま」だったのだ。

今更ながらなんでこんな状況になってしまったのかと、沈痛な面持ちでクラウスは頭を抱えた。

「雪だるまに拉致監禁されるなんて……（めつたにできない経験だ！）」

「大丈夫だよクラウス。ダーリンがきつと助けに来てくれるもん（早く来て、ダーリン）」

ビビの瞳はキラキラ輝いていた。ビビの頭の中ではルーファスが白馬に乗って自分たちを助けに来てくれるという妄想ビジョンができあがっていた。

モーソー！ トキメキ！ ロマンズ！

そして、願いは現実のものとなる。ちよっぴり違った形で

クラウスが顔を上に向けると、キラリンと空で何かが輝いた。「ビビちゃん見て、空で何かが光ったのだけど？」

「えーっなにになに？」

「ほら、あっち……!？」

「……なんじゃありゃー!？」

空から人が降って来る。世の中にはそんな天気の日もあるんだね。

世界ってミステリーでいっぱい

……じゃなかった。

「だ、だ、だ、ダーリン!?」

「ルーファス!」

急落下してきたルーファスはユキダルマンの見張りを一体大破させながら地面に激突!

深い雪の中に埋もれたルーファスは身動き一つしなかった。

「ダーリン!」

近くにいたユキダルマンが雪に埋もれたルーファスのようすを見ていると、すぐに騒ぎを聞きつけたユキダルマンたちが一〇体、二〇体と氷の住居から出てきた。

辺りは気づけばユキダルマンだらけになっていて、ユキダルマンたちは力を合わせてルーファスを雪の中から引きずり出すと、すぐにロープでグルグル巻きにしてビビの近くに放り投げた。そして、見張りをひとり残して帰っていった。

「ダーリンしっかりして!」

「ルーファス生きてるか?」

返事がない。

ま、まさか、本気で死んだ?

「ダーリン、死んじゃヤダよおーっ!」

簀巻きにされているルーファスの口元が微かに動く。

「な……な……鍋食べたい」

ビビとクラウスはルーファスを殴り飛ばそうとしたが手足が縛れていたので断念。

「僕を勝手に殺すな……けどマジで死ぬかと思った（地面がふかふかの雪で助かった）」

「ところでルーファス、カーシャ先生はどうしたんだい？」

「カーシャなら、きつと茶でも飲んでゆっくりしてるんじゃないの」

この瞬間、二人の心に殺意の念が湧いたのは言うまでもない。カーシャが助けに来る意思がないとすると、誰がいつたい助けに来てくれるのか。クラウスはさらに頭を抱えた。

「こんなことが起きたなんて知られたら、僕は絶対にエルザに殺される」

「ダーリンのバカ、役立たずのおたんこなす！」

別にルーファスがなにをしたというわけでもないのだが、ヒドイ言われようだ。それというのもビビの期待を裏切ったからなのだが、ルーファスにしてみればとんだとばっちり。

ちよつと急用で王子様は来なかっただけだ。

「私に八つ当たりしないでよ。それにたぶんベル姐さんが助けに来てくれると……思う（あの人も当てになりそうにないけど）」

ルーファスの言葉を聞いてビビの瞳にキラキラと希望の色が差し込んだ。昔の美少女漫画チックに。

「ベル姐ってあのベル姐？ ベルフェゴール姐さん!？」

「そそつ、そのベル姐さんが私をハウキの上から蹴落としたんだよ（まだわき腹がイタイし）」

「やったね、ベル姐がここに来れば跡形もなく雪だるまたちを

滅殺してくれるよ。なんとって、ベル姐が通ったあとは草一本残らない荒野に化すって云われてるんだから、アタシたち絶対助かるよ」

「やったねじゃなくて、草一本も残らないって私たちも危険なことだよな」

「うん、そうだよ」

無邪気にニコニコ笑うビビ。果たして自分で言った発言を理解しているのだろうか、疑問だ。

二人の会話にクラウスが横から口をはさむ。

「そのベルフェゴールって人、もしかして邪神七将の邪智の女神のことかい？（だとしたら凄いことだ）」

首を傾げるルーファス。そして、ビビはニコニコしながら言った。

「うん、神魔大戦や魔界大戦争で活躍した邪神七将だよ」

「魔界のトップに君臨する魔王の一人じゃないか」

これを聞いてはじめてルーファスはビックリした。

「そうだったの！！（ただのカーシャの友達だと思ってた）」

魔導学院で何の勉強してるんですか！

ビビは誇らしげにベル姐のことを語りはじめた。

「ベル姐はホントすごいんだよ、敵を倒すためなら地域一帯を消し飛ばして味方も巻き込んで勝っちゃうんだから……（ってことは）」

自分の発言をようやく理解したビビ。

場の空気が一気に重々しいものに変わる。

そして、みんなで『あはは〜っ』と顔を見合わせながら笑う。

『あはは〜っ』と笑いながらルーファスは蒼い顔。

「どうするんだよバカ……あはは〜っ」

「アタシに聞くんじゃないやねえよ……あはは〜っ」

「僕たち苦しまずに死ねるかな……あはは〜っ」

三人が精神崩壊気味になっていると、どこからか太鼓や笛の音が聞こえてきた。

氷の家から続々とユキダルマンたちが出てくる。もしか、カ
ーニバルがはじまるのでは!?

ユキダルマンたちは円陣を組んでルーファスたちの周りを取り囲み、何体かのユキダルマンたちはルーファスとクラウスを抱えて円陣の外に放り投げた。

そうだ、たしかベルは女子供が狙われるって言ってなかったっけ？

狙いはビビかっ!

ユキダルマンたちが笛や太鼓のリズムに合わせて躍り出し、ビビの周りをグルグル回りはじめた。表情のないユキダルマンたちがグルグル回る様は異様で怖ろしい。しかも、無言で淡々とやっているところがよけいに怖い。

危機を感じてルーファスはグルグル巻きのまま喚き散らした。「ビビに何する気だ! やい、私の縄を解いてくださいお願いします。そしたら全員カキ氷にして食べてあげますから!」

喚き散らすルーファスの近くにフライパンを持ったユキダルマンが近づいて来てゴン!

フライパンがルーファスの頭に痛恨の一撃。

殴られたルーファスはそのま雪に顔を埋めながら気を失った。と思いきや、雪の中から笑い声が漏れてきた。

「はははは、あゝははははっ！」

雪に埋もれていたルーファスがバシツと顔を上げて高笑いをした。

「あゝははははっ、大魔王ルーファス様登場！」

一部始終を見ていたビビとクラウスが苦い顔をする。

簀巻きにされているルーちゃんがムクツと立ち上がり、ピヨピヨン飛び跳ねながら進む。その格好はミノムシが飛び跳ねているようでかなり滑稽だ。

ミノムシ野郎にユキダルマンたちが襲い掛かる。だが、ルーちゃんは強い。伊達に大魔王は名乗っていない。

秘儀、ミノムシキック！

グルグル巻きにされているルーちゃんの必殺技はジャンプキック。

ピヨンピヨン飛び跳ねながらジャンプキックをユキダルマンたちに食らわし、敵をばっさばっさと倒していく。その姿を見てビビは幻滅。害虫キックはあまりカッコよくなかった。王子様には程遠い。

ユキダルマンたちを一通り倒したところでルーちゃんは高笑い。

「ははははっ、どうだ参ったか。これが大魔王ルーファス様の実力だ！」

あの雪崩が起きた時、ビビとクラウドは上空からバイクに乗って現れたベルによつて間一髪のところを助けられたのだが、ルーちゃんだけは雪崩に巻き込まれてしまった。

雪崩に埋もれたルーちゃんが発見された時には、ルーちゃんの身体は冷凍保存されていてカチカチに凍っていた。

そんなこんな今に至る。

ルーファスの部屋にある机が突然ガタガタと揺れ、引き出しが勢いよく開き、中から爆乳がブルルンと出た。それを見たルーファスは思わず声をあげる。

「スライムかつ！」

引き出しの中から白衣の美女が這い出した。

「あらあん、こんにちわあん」

ベルだった。

「おほほほ、お見舞いに来てあげたわよあん（本当は嫌がらせに来ただけだ）」

あのとき起きた雪崩の勢力は思いのほか凄まじく、なんかその影響で砂漠に豪雨が降ったり、台風ーンが直撃したり、砂漠が沼地になったり、生態系がぐちゃぐちゃになったり、とにかく大変だったらしい。

しかも、ベルの居城である 針の城 は豪雨で錆び付いて倒壊したらしい。

爆乳を揺らしながらベルはルーファスの腹の上に座った。

「どう具合はあん？」

「見ればわかるでしょう……はつくしよん！」

「だいぶ悪そうねえん。そうだ、そんなことよりも、この家は客にティーも出さないの?」

厚かましい要求を聞いてビビがしかたなくキッチンに向かう。部屋に二人つきりにされると、ルーファスはいるんな意味でドキドキする。

ベルが軽く咳払いをして不敵な笑みを浮かべた。

「ところでカーシャの姿を見たあん?」

「いや、見てないけど……」

「そう、ということはまだ城の中ってことね、おほほほほっ」

「はい?」

「実はね、あの雪崩のせいで我が城が泥と雪で埋もれたり倒壊しちゃったり、とにかく掘り起こせないのよねえん」

あの時、カーシャは城の中でティータイムをしていたのだ。

ということは……?」

「マジで!」

ビビがちょうどお茶を運んで来たところで、ルーファスが大きな声を出したもんだから、驚いたビビはおぼんを放り投げ、上に乗っていたコップからお茶が脱走を企てた。

お茶は引力には逆らえず落下。バシャン!

「……………(熱い)」

ベルにかかった。しかし、ベルの表情は少しも変わらなかった。むしろ、慌てたのはビビだった。

「ベル姐、大丈夫っ!」

ビビは慌てて近くにあつたティツシユ箱を手を取って、ティツシユをガ―って何枚も取ると、ベルの顔を拭きまくった。

「はあ……はあ……これだけ拭けば」

肩で息をするビビ。その近くでルーファスの顔は蒼ざめていた。

ベルの顔からはお茶は一滴たりとも残さず消滅した。……しかし、ベルの顔はティツシユのカスですごいことになっていた。それに気付いたビビの顔を蒼ざめた。

素早くルーファスが近くにあつた布をビビに手渡すと、ビビは一心不乱にベルの顔を拭いた。

「ごめえ〜ん！」

一生懸命誠意を尽くしてビビはベルの顔を拭いた。のだがベルは思った。

「……ぞうきん」

「僕としたことが……」

ルーファスの顔が凍りついた。

「ぞうきんを手渡しちゃった（えへっ）」

ベルはルーファスの襟首を掴んで立ち上がらせると、無言のままルーファスの腹にボディブローをくらわした。

「うっ……痛い」

まるで鉄球を喰らったような重いパンチだった。

ルーファスは腹を押さえながらゆっくりと床に倒れこむと、それっきり動かなくなった。

ち〜ん、御愁傷様でございます。

何事もなかったようにベルは話題を変えた。

「そうだあん、この子にお見舞いの品を持って来てあげたんだっただわ」

そう言ったベルは机の引き出しの中に手を入れると、両手に収まりきれほどの雪を取り出して、床で死んでるルーファスの身体にドサーッとかけた。

「それで熱も冷めるわよあん！」

ベルは高笑みを木霊させながら引き出しの中に帰っていった。と思いきや、顔だけを出して一言。

「カーシャが帰ってきたら、夜間のひと気のない道は背中に気をつけてねえん」

今度こそベルは帰って行った。

夏はまだまだ遠く、ルーファスの力ぜが悪化したことは言うまでもない。

第四話 学校のきゃあ

《一》

いわゆる丑三つ時　スヤスヤと安らかに寢息を立てながら
眠るルーファスに忍び寄る影。忍者か暗殺者か曲者か!?

大きく振りかぶって、ズゴツ!

「うぐっ……!?!」

腹を押さえながら飛び起きたルーファスの絶叫。

「うぎゃーっ!」

闇の中に浮かぶ女性の顔。懐中電灯を顔に当てたビビだった。

「うらめしや〜」

「脅かさないですよ! (チビるとこだったじゃないか)」

スパーン!

と、ビビの頭にスナップを効かせた平手打ちが決まった。

「いた〜い!」

「脅かすからだよ」

「だって、夜中に人を起こす時はああやって起こすって教わっ
たんだもん」

「誰に?」

「ベルに決まってるじゃん」

「……信じないですよ (ベルも口クなこと教えないんだから

あ
」

すっかり目が覚めてしまったルーファスは目覚まし時計に目をやった。

時計の針は二時過ぎを指している。

「まだ朝にもなっていないじゃん。なんで私をこんな時間に起こしたのか正当な理由を聞かせてみてよ」

「だって今日は満月だよ、満月と言ったらエスバットに決まってるよお」

「えすばつと」ってなに？」

「え、エスバットも知らないなんて……ダーリンがそこまでアホだったなんて、ビビ悲しい」

「アホっていわないで、アホって」

「だって悪魔や魔女の間じゃ知らない人いないよお。それでも魔導学校の生徒さんなの？」

「あー、思い出した」

エスバットとは小集会のことだ。満月の晩は魔法使いと悪魔で集会を言う。大きな集会になるとサバトになり、年に八回やることになっている。

付き合いきれないといった感じで再びベッドの中に潜ろうとするルーファスに対して、ビビは強引に掛け布団を引き剥がそうとした。だが、ルーファスも負けじと掛け布団にしがみつく。ここでルーファスは重大なことを忘れていた。ビビは見た目に比べて力が強い。

「うわっ!？」

掛け布団ごと投げられたルーファスは勢いよく壁に激突。

鼻血を出しているルーファスにビビは優しい笑みを浮かべた。

「ダーリン……早く着替えてエスバット行こーっ！」

「あのねえ……もつと僕を労わるってことを知らないの？」

「なんでえ、いつもダーリンに尽くしてるつもりだよ」

「“つもり”でしょ」

「ひっどい、そうやってダーリンは可愛い女の子を苛めてウハウハ気分になるんですよ？ でも、わかっているの……それが

ダーリンのアタシに対する愛表現だって」

「違うし！」

「そんな照らなくてもいいんだよ。なんだったら今からアタシのこと……イヤン」

ビビと言い合いをするといつも果てしなくバカらしくなってくるので、ルーファスは早々に掛け布団を引きずりながらベッドに退散。速やかな眠りにつくことにした。

目を閉じて眠りにつこうとするルーファスの耳元で悪魔が囁く。

「ねえ、ダーリン、ダーリン、ダーリン！」

もとい、悪魔が喚く。

耳に手を当ててルーファスは完全無視。

「ダーリン出かけるよ」

「聞こえない、聞こえない」

こう言ってる時は大抵聞こえている。

顔を膨らませたビビがルーファスの服を強引に脱がせようと

する。

「ほら、早く着替えて！」

「うわっ、やめろ！」

「ベルにルーファスも連れて来いって言われてるんだから」

「……行く（行かないと命の保証が無い）」

今までのことがウソのようにルーファスはすつと立ち上がって着替えをはじめた。ベルに逆らうと後が怖い。

着替えを済ませたルーファスはビビに手を繋がれながら家の外に出た。

夜空には星が煌き瞬いている。そして、月明かりが世界を淡く優しく照らす。今日は満月であった。

人通りのない静かな住宅街を歩く二人。

ビビはルーファスの腕にしがみ付いて身体を寄せた。程よい体温がルーファスの身体に伝わり、このシチエーションがルーファスの心臓をドキドキさせる。いつも何も感じないのに、たまに相手を意識してしまう。だから、ルーファスはできるだけビビのことを見ないように星空を見ていた。

「ねえ、ダーリン」

「なに？」

ルーファスはそっぽを向きながら答えた。その口調はどこか強がっているようだった。

「アタシのこと好き？」

「な、な、なんだよいきなり!？」

取り乱しすぎ。そんなルーファスを見てビビは『うん』と

唸る。このルーファスの反応をどう取るべきかで悩む。

「ダーリン質問の答えは？」

「言えないよ、そんなこと！」

「ま、まさか、アタシ以外に女ができたのね!？」

「違うじゃなくて、違うが違う、ノーコメントです」

「わざわざノーコメントっていうことはいるってことだよ
ね？」

「どうしてそういう解釈になるんだよ」

「もういい、聴きたくない」

急にそっぽを向いて口を尖らすビビ。ルーファスとしてみればなんでこんな反応をされるのかわからない。逆ギレもいいとこだ。

「私が好きな人がいるって言えばいいの？（いないけどさ）」

「それはヤダ」

「（……意味わからない）」

「（もあ、ルーちゃんのバカー!）」

ビビは今までしがみ付いていたルーファスの腕から離れて早足で前を歩きはじめた。

二人は少し離れた距離を無言のまま歩いた。

その間、ビビは時折後ろを振り向いたのだが、ルーファスと視線が合うと怒った表情をして前を向く。ビビにそんな態度をされるもんだからルーファスはルーファスで腹を立てていた。二人の歩く距離はそうやって開いていった。

だいぶ長い時間をかけて辿り着いたのは、ルーファスの通う

クラウス魔導学院であった。

「あれ、ここなの？」

いつもは乗合馬車で来る距離にある場所だ。

「徒歩で来たから疲れた。なにか乗り物に乗ってくればよかったのに」

「だってダーリンと一緒に夜空の下歩きたかつたんだもん」

ビビは固く閉ざされた正門をびよんと乗り越えた。

運動神経の鈍いルーファスは門を登ることができない。

「ちよつと手伝つてよ」

「しかたないなあ」

ガシツと掴み合う手と手。ビビが力いっぱい引き上げると、少し力が入りすぎてしまつて後ろにバランスを崩してしまい、ルーファスも一緒に地面に落下してしまつた。

重なり合う視線。

思わずルーファスはとつさの反応でビビの身体を抱きしめてしまつていた。

いつもは攻めのビビがこの時ばかりは動揺した赤い顔をして、それを見つめるルーファスも真つ赤な顔をした。けれど、ルーファスはビビの身体をはなそうとしなかつた。

「……ビビ」

「ダーリン……」

地面に寝転がつて抱きしめ合うふたりに忍者のように忍び寄る影。

「テメエラ不純異性行為シテンジャネエ！」

謎の声を聞いて慌ててルーファスとビビが分離すると、それを見ていたローゼンクロイツが失笑した。

「……不潔（ふつ）」

ローゼンクロイツの顔を確認したルーファスは状況理解に苦しみながら声をあげた。

「な、なんでローゼンクロイツがいるんだよ！」

「楽しいことがあるからって、魔女に呼ばれたんだよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツはベルのことを魔女と呼んでいる。

動揺しながらも気を取り直したフリをする二人と、それを心の中で笑う一人は校舎内に入ることにした。

職員玄関の鍵は開いていて、そこから校舎内に進入した。

廊下は静まり返り、微かに水の音が聞こえてくるところがかなりビビる。夜の学校と夜の墓場と夜のトンネルはマジで怖い。

ビビとローゼンクロイツはどこからか懐中電灯を出して辺りを照らしながら歩くが、ルーファスはそんなもの用意してきてない。

ルーファスはビクビクしながらも平常心を保つ努力をする。

けど、手はビビの服を掴んでいた。

コツコツ、コツコツと薄暗い廊下に響く足音。それが自分たちの足音だとわかっていても怖い。なのに、足跡の数が多いことに気づくともっと怖い。

蒼ざめた顔をしたルーファスが急に足を止めた。

「あのさ、みんな止まってくれない？（ものすごく、嫌なこ

とに気づいちゃったんだけどお」

ルーファスの指示通りビビが足を止め、ローゼンクロイツが足を止め、もうひとり足を止めた。

ゾクゾクとした悪寒がルーファスの背筋を駆け抜け、ルーファスは恐る恐る後ろを振り向いた。

闇の中に浮かび上がる蒼白い顔。

「ぎゃーっ!？」

女性顔負けの叫び声をあげたルーファスは腰を抜かしてしまっただ。

そんなルーファスを見てビビちゃんちよつと萌え。

ローゼンクロイツは無表情。

そして、蒼白い影が微かに笑った。

「おほほ、驚かせてしまつてごめんなさいねえん（脅かし甲斐がある子ね）」

闇の中に立っていたのは蠟燭を携えたベルだった。

大きな瞳をパチパチさせながらビビがベルに聞いた。

「ベル姐がなんでここにいるのお？」

「知りたい？ 仕方ないわね、そこまで言うのなら教えてあげるわぁん」

誰もそこまで言つてませんが、とりあえず聞いてあげましよう。

「カーシャちゃんに呼ばれたのよぉん」

だそうです。

ナンダカンダで人数の増えた一行は廊下を進み実験室に辿り

着いた。

「遅いぞ、ノロマども」

実験室の中ではカーシャが独りで待つていた。

部屋は大量の蝋燭に明かりが灯され明るい。ちゃんと一酸化中毒にならないように換気扇を回してる。実験室をエスバットの会場に選んだのは室内で換気扇が付いていたからだった。

随分と待ちくたびれたといった感じのカーシャは、この場に
来た人数を指差しながら数えはじめた。

「一、二、三人しかいないではないか。エスバッドは一二人の人間にプラス悪魔でやると決まっておるのだぞ（妾には一二人も友達おらんがな！）」

すつとカーシャの背後に回ったベルがボソツと聞く。

「アナタが幹事だから他の者は来たくなかつたんでしよう（可哀想なカーシャちゃん）」

「なんだと、妾が幹事だとして来ないのだ？（あー、やっぱり友達少ないからか……ふふっ、カーシャちゃんちよつと自傷）」

「アナタが幹事をやると必ず負傷者や帰らぬ人が出るからですよ」

人数が揃わないと聞いてビビが顔を膨らませる。

「ええっつ、エスバット中止なお。せつかくダーリン連れて来たのにい」

ビビには残念でもルーファスにしてみれば喜ばしい限りだった。ゴタゴタに巻き込まれる前にさっさと帰りたいというのが

ルーファスの本音だった。

しかし、運命はそんなに甘くないのだ！

刀を構えた美少女がこの場に乱入して来て声を張り上げた。

「こんな夜更けに何をしておるのか聞かせてもらおう！」

嵐の予感。

《二》

刀を構えるプロンドの美少女。言わずと知れたエルザであった。

「私は寛大な心を持って悪魔が普通の学院生活をすることを認めたが、こんな夜更けに密会をして悪事を謀ることは認めていないぞ！」

刀の切っ先はカーシャに向けられていた。

「悪事など企んでおらんぞ。今日はただのお茶会をするだ。お菓子でも食べながら楽しくおしゃべりして、ニワトリが鳴いたら解散予定だ」

熱い火花が両者の間を飛び交う。誰か消火器の用意をしてください、火事になります。

刀を握る手に力を込めたエルザが摺り足でカーシャに近づいた。

「問答無用！ 可及的速やかに蠟燭を片付けて学校から出る。さもなければ刀の錆にしてくれる！」

「できるものならばやってみるがよい」

なぜこの人はわざわざ相手を挑発するのか。

てゆうか、エルザがこの場所になぜいるのかツッコミを入れないところがこの人たちらしい。

上段の構えからエルザがカーシャに踏み込んだ。

「叩き斬ってくれ！」

「妾を甘く見るなよ小娘がつ！」

胸の谷間に手を突っ込んだカーシャは、金属の塊を取り出してエルザの一刀を受け止めた。それを見ていたルーファスがツッコミを入れる。

「フライパンじゃん！」

エルザの一刀を受け止めたアイテムは、パンはパンでも食べられないフライパンであった。しかも、テフロン加工でサビに強い！

戦いをおっぱじめしまった二人を止めるべく、ルーファスは知恵をクルツと廻らすが、三六〇度回転してスタート地点。そこで他の人たちに助けを求めるべく後ろを振り向いた。

「みんな！ ……みんな？」

テーブルに広げられたお菓子の袋とペットボトルたち。ちょうどビビがベルのコップにオレンジジュースを注いでいるところだった。すでに何かパーティーはじまってるし！

ベルに飲み物を注ぎ終わったビビが、爽やか一〇〇パーセント柑橘果汁みたいな笑顔で尋ねる。

「ダーリンもオレンジジュースでいい？」

「う、うん」

なぜか勧められるままにルーファスは席に着いてビビからオレンジジュースを受け取った。そして団らん……してどうする!?

「私としたことが団らんしそうになってしまった!」

ビシツとバシツとシャキツと立ち上がったルーファスは、カーシャ&エルザを止めようとした。その手にはジュースの入ったカップをしっかりと握っている。そこんところが真剣さに欠ける。

「やい、二人ともやめないか! 争いごとはよくないですよ、外でやれ……ひつく!」

ほのかに赤い顔をするルーファスに対してエルザがカーシャとの戦いを中断して切っ先を突きつけた。

「ルーファス、おまえも悪魔など縁を切るのだ。ローゼンクロイツ、おまえもだぞ……おまえたち顔が赤くないか?」

顔を赤くしているルーファスとローゼンクロイツ。ちよつぴり顔の赤いベルがボソツと呟く。

「悪魔の飲み物は人間には合わないらしいわねえん……ひつく(身体が火照る……あはぁん)」

ちなみにベルは焼酎を飲んでいた。

呆然とするエルザの背後に忍び寄る白い影。

「エルザも飲んで吞まれるがよい、ふふふふつ!」

カーシャがエルザの口を強引にこじ開けてペットボトルをグツと!

「うぐつ……止める……私は一〇〇パーセントしか飲まんの

だ！」

「大丈夫だ、このジュースは泣き叫ぶオレンジをグチャグチャに潰して作ったものだ（生粋の○○パーセントオレンジに変わりない）」

泣き叫ぶ……オレンジが！

ぶはーっ！

と、ルーファスが口の中のジュースを噴射！

「泣き叫ぶってオレンジが!? オエツ……得体の知れないものを飲んでしまった」

目の前にいる女性の姿を見てルーファス凍りつく。水難の相のある女ベル。ルーファスの噴出したジュースによってベルの顔はベトベトだった。

スつと無表情のまま立ち上がったベル。

その瞳は妖々と輝き、白衣のポケットに両手を突っ込んでいた。

「おゝほほほほつ、死に腐れゲスどもがつー!!」

ベルが四次元ポケットから取り出したのは、二丁の機関銃だった。

それをいきなりぶっ放した。

「死ぬし!!!」

ルーファスはあられもない声を上げて、紙一重で銃弾の雨を『つ』や『大』の字になったりして避ける。そして、『と』の字になったところで腰が抜けて動けなくなった。

カーシャが叫ぶ。

「元祖プツン悪魔のベルは誰にも止められん、逃げるぞ！」
これを聞いてみんなは一目散に『逃げる』コマンド発動！

一番早足なのがカーシャ、次が存在感の限りなくゼロにしていたローゼンクロイツ、次が足取りの可笑しいエルザ、そして最後に教室を出て行こうとするビビの背中にルーファスが悲痛の叫びを投げかける。

「待ってビビ！ 僕を見捨てる気か!？」

「ダーリン……生きてたらまた会おうね……ぐすん」

目頭に手を当てながらビビは内股で去って行った。

見捨てられた！

腰が抜けて動けなくなっているルーファスに、目じりを上げたベルがジリジリと近づいて来る。

「ああん、覚悟はいいかしら、ボ・ウ・ヤ」

「……よくないです」

すっかり酔いの醒めたルーファスの顔は死人のように蒼ざめている。

ベルが機関銃を魔杖代わりにしてカツコよく呪文を唱える。

「ライラ、ルルララ、出でよ魔界の魔獣！」

機関銃によって描かれ現れたゲートから禍々しい風が教室内に吹き込む。そして、そのゲートの中に光る眼、眼、眼。いくつもの眼がルーファスを狙っている。

キシヤーツー！！

奇声をあげながら鋭い爪を持った魔獣がルーファスに襲い掛かった。

「きゃはは、やめて……くれ」

ルーファスの身体に群がる小さなオッサンたち。オッサンはルーファスの身体を一心不乱にくすぐっていた。な、なんと怖ろしい魔獣なのだろうか。まさに生き地獄だ！

「あはは、きゃはは、やめて！（死ぬ、死ぬ、絶対に死ぬるしー）」

身体を動かせないもどかしさ。抵抗できない苦しみ。しかも、オッサンは攻撃のツボを心得ていた。

「おほほほ……どう、苦しいでしょう。このまま笑い死にさせて、ア・ゲル（学校で笑い顔の変死体発見な〜んちゃつて）」

「頼む、頼むから殺すんだったら、一思いに……あつ？」

笑いによって痛みも忘れて動いたせいか、抜けた腰が元通りに治っていた。

一時停止する、ルーファス&ベル&オッサンたち。

そして、ルーファス脱走！

猛ダッシュでルーファスは教室を抜け出し廊下を駆ける。廊下は走っちゃいけません、なんてのは今は無視。

「ルーファス、待ちなさい！」

叫ぶベルが機関銃の先端をルーファスに向けると、オッサンの大群がピョンピョン跳ねながらルーファスを追った。

必死こいて逃げるルーファスは薄暗い廊下を走る。非常灯のお陰で前が見えるが、後ろから小さなオッサンが追ってくる光景はホラー以外のなにもでもない。マジ怖い。しかも変な

奇声あげてるし。

ルーファスは階段を駆け上がり、きつとここでオッサンたちは二手に分かれてくれるハズ。

そのまま足を止めることなく走り続けたルーファスはふと後ろを振り向く。オッサンたちの気配はなくなっている。きつと巻けたに違いない。よかつたよかつた。

と思つたのも束の間。ルーファスの前に現れた人影にルーファス絶叫。

「ぎゃ〜っ！」

ルーファスが腰を抜かすと相手も腰を抜かした。

胸に手を当てて鼓動を沈め、ルーファスは冷静になつて相手の姿を見た。

「な〜んだ、脅かさないでよ鏡じゃん……」

相手が鏡に映つた自分だと知り、ほつとしたルーファスの脳裏にあることが浮かぶ。学校七不思議。

ルーファスの通うクラウドス魔導学院には、学校お約束の七不思議が存在する。その中の一つである『死の鏡』の噂話。深夜遅く四階にある人の全身を映せる大きな鏡に自分の姿を映すと、死に際の自分の姿が映し出されると云う。

ルーファスはブルツと身体を震わせて立ち上がるうとしたが、腰が抜けて立ち上がれない。しかも、怖くて逆に鏡から目が離せない。最低最悪の状況だった。

鏡にすつと人影が映つた。もちろんルーファスではない。次の瞬間、蒼白く冷たい手がルーファスの肩に乗つた。

「ぎゃ〜っ！」

「叫ぶでない、私だ」

「えっ!？」

ルーファスが自分の肩に乗った手から視線を登らせていくと、そこにいたのはエルザだった。

「脅かさないでよ（よかつた人に会えて）」

「脅かすつもりなどなかった」

「手を置く前に声かけるとかしてよね」

「そ、そんなに怒らなくても……」

突然エルザが涙を流して泣き出した。

「ど、どうしたんだよ、僕が泣かしたの!？」

「だって、だって、ルーファスが急に怒るんだもん」

泣きながらエルザはルーファスの身体に抱きついて押し倒した。

火照ったエルザの身体はとて温かく、ルーファスはあることに気が付いた。

「もしかして、エルザ酔ってる？」

「私酔ってないよ〜ん、ひっく〜！」

完全に酔っていた。

呆れ返ったルーファスはエルザの身体を退かして起き上がるうとするが、エルザはルーファスの身体に足を絡めてきて立ち上がることを許そうとしない。

「ルーファス……もつと、こうしていたい」

「バカなこと言わないでよ！」

「ルーファスは私のこと嫌いかな？」

「嫌いかさそういう問題じゃなくて、友達としてこういう行為は……!？」

唇と唇が重なった。眼を丸くするルーファス。エルザのやわらかな唇によってルーファスの言葉は完全に塞がれていた。

ゆっくりとルーファスから顔を離れたエルザは自分の唇をいやらしくペロツと舐めた。それを見たルーファスの体温上昇。惚けて何も言えない。

「私はルーファスのことが好きだ……そう、ずっと好きだったのだ」

「……マジで!？」

酔いのせいかな、顔を赤らめているエルザが小さく頷いた。普段凜々しい表情ばかりしている、エルザの恥じらい姿にルーファス胸キュン!

「近所のお姉さんとして、ずっとルーファスのことを見守って来たが、それがいつの間にか恋心に……」

「……マジで!？」

ルーファスの頭にモーソー、トキメキ、ロマンスが駆け巡る。そう、一時期ルーファスはエルザに恋心を寄せていた時があったのだ。だが、相手は年上のお姉さまで、ちよっぴり大財閥のご令嬢で、出世街道爆進しちゃってるエリート中のエリート、自分には高嶺の花だと思っただけであきらめた。

エルザがルーファスの首に手を回し、耳元で何かを呟く。

「ルーファスは私のこと好きかな？」

「はぶっ!？」

耳に優しい声が吹きかけられ、ルーファスの身体はビクンと震えた。しかも、高級そうなシャンプーの匂いがルーファスの理性を崩壊させようとしていた。このままでは間違いを起こしてしまう。

激しく揺れるルーファスの心。片思いだと思っていた人からの突然の告白。嬉しくもあり、苦しくもあった。そう、今更なのだ。

エルザの身体を強く突き放して立ち上がったルーファスは深く頭を下げた。

「ごめん、僕も昔あなたのこと好きでした……けど、とにかく、ごめん！」

その言葉を聞いてエルザは瞳を涙で潤ませた。

何も言わない泣き顔のエルザの表情は今すぐ抱きしめてあげたいくらいだったが、ルーファスはその想いを振り切ってこの場から逃げた。

「ごめん！」

走り去るルーファスの背中を見ながら、エルザは涙を腕で拭き取った。

《三》

その場の雰囲気から逃げるために失踪したルーファスだったが、今になってシヨック！

真つ暗な学院の中で独りになってしまったのは大誤算だった。廊下に響く自分の足音が怖いので摺り足で歩いていたらルーフアスの足が止まる。

「……っ!？」

クラウス魔導学院七不思議第二弾『ひとりでに鳴るピアノ』。夜な夜な音楽室の壁に立てかけられた肖像画の霊が抜け出し、グランドピアノで『ねこふんじまった』という楽曲を奏でるのだと云う。

微かに開かれた音楽室の扉からピアノの音が漏れてくる。それを聞いたルーフアスの表情は強張り、この場から逃げようとした。だが、怖いもの見たさというかなんとか、ルーフアスの足は音楽室の扉に引き寄せられていく。そして、小さく開かれた隙間から音楽室の中を覗き込んだ。

ジャジャジャジャーン

突然ピアノが大きな音を出して曲が変わった。

大きな音に驚いてルーフアスが腰を抜かしていると、ピアノの音がパタリと止み、音楽室の扉がギイイッとホラーチックな重々しい音を立てて開かれた。

「……カッコ悪いよ（ふあふあ）」

そこに立っていたのはローゼンクロイツだった。

「脅かさないでよ」

「別に脅かすつもりないよ（ふにふに）。ちょっとピアノが弾きたくなっただけ……ひっく！（ふに〜）」

こいつも酔っていた。

「君も酔ってるのかよ！」

「酔ってないよ……ひつく！（ふに〜）」

ほろ酔い加減なのは間違いない。こころなしか、空色ドレスまで桜色に染まっている見える。

ローゼンクロイツの小柄な手が差し伸べられ、ルーファスはそれを掴んで立ち上がった。握ったローゼンクロイツの手は温かい、やっぱりほろ酔いのようだ。

ルーファスがローゼンクロイツから手を離そうとすると、ローゼンクロイツはルーファスの手をぎゅっと掴んで離さず、ルーファスはそのまま音楽室の中へ引つ張り込まれてしまった。

「えっ、なに!?（拉致監禁!）」

「……ピアノ聞かせてあげるよ（ふに〜）」

「はあ？」

意味もわからないままルーファスはグランドピアノの前に立たされ、ローゼンクロイツは椅子にちょこんと座り鍵盤に手を置いた。

静かな夜の演奏会。

ローゼンクロイツの繊細な指先から美しく可憐な曲が奏でられる。まさか、ローゼンクロイツがこんな特技を持つてるなんてルーファスは思いもなかった。ちょっと意外。

というか、ローゼンクロイツは出席日数こそ悪いものの、勉強できるし、意外なことにスポーツまで万能で、音楽までできやがった!

優しくも力強い曲調

それはまるで薔薇のイメージを彷彿

とさせた。

穏やかな表情をしてピアノを奏でるローゼンクロイツにルーファスが語りかけた。

「なんて曲？」

「ま、まさか、この曲を知らないなんて……低脳（ふっ）」

わざとらしく驚いて見せたローゼンクロイツは『低脳』の部分だけボソツと呟いた。完全な悪意が感じられる。てゆーか、からかわれてる。

「低脳悪かったですねー！」

「ルーファス学校の勉強だけが全てじゃないよ（ふにふに）。強く生きてね（ふっ）」

「わかったから……それで曲名は？」

「……お願ひしますご主人様は？（ふにふに）」

「それなんか間違ってるし！（メイド系のお願ひの仕方だし！）」

「……それは残念（ふう）」

ボソツと呟いたローゼンクロイツは急にピアノを弾く手を止めた。

「どうしてやめるの？」

「だって、ルーファスがイジワルするからだろう（ふう）」

「イジワルしたのは君だろう？（完全に遊ばれてるし）」

「ま、まさか!？（ふにゆ!?)」

わざとらしく驚いてみせるローゼンクロイツ。絶対『まさか!?』なんて思ってない。からかってるだけ。

「僕のことからかってそんなに楽しい？」

「楽しいねよ、もう病みつきだね（ふあふあ）」

ニコツと笑ったローゼンクロイツが再び曲を奏ではじめた。

先ほどと同じ曲だ。

ため息をついて一息入れたルーファスが再び聞く。

「この曲なんていうの？」

「歌劇薔薇騎士団の“戦場に咲く薔薇の君”だよ（ふにふに）」

「ふん、いい曲だね」

「前にもそう言ったよ（ふあふあ）」

「えっ!？」

目を丸くしたルーファスにローゼンクロイツはもう一度同じことを言った。

「前にもそう言ったよ（ふあふあ）」

「僕が？」

「他に誰がいるんだい……ルーファスはバカだなあ（ふにふに）」

「そーゆー意味で聞いたんじゃないし。でも、本当に僕が言ったの？（まったく記憶にございませんが）」

「覚えてないんだ……ちよつと寂しいかも（ふう）」

「はあ？」

ルーファスは全く意味がわからなかった。第一、ローゼンクロイツにそんなこと言った記憶がないし、なんで寂しがられるのか皆目検討つかなかった。

「ルーファスがこの曲いって言ったから、一生懸命練習したのになあ（ふう）」

「そうだった？」

「まったく記憶にございません！」

ローゼンクロイツは懐かしそうに語りはじめた。

「もともとこの曲はキミの母上がボクたちに聴かせてくれた曲だよ（ふわふわ）。キミはこの曲を聴いて、瞳を輝かせよう言っただけだ『カツコイイ！』ってね（ふにふに）」

ため息を漏らしてローゼンクロイツは楽曲を『ねこふんじまった』に変えた。

「キミがいいと言ったから、今でもこうやってたまにここで練習していたのに（ふう）」

「たまにここに来て？（まさか……）」

「……学校七不思議（ふっ）」

「君の仕業立ったのか!？」

「そうかもね『ねこふんじまった』も弾いてたから（ふにふに）」

また、急にローゼンクロイツはピアノを弾く手を止めた。そして、悲しそうな瞳でルーファスを見つめた。見つめられたルーファスはかなり焦る。

「ど、どうしたの!？」

「ボクはキミが羨ましいよ（ふあふあ）」

「どうして?」

「ボクは自分の境遇に不満があるわけでもないし、むしろ幸せ

に育ったと思うよ（ふにふに）。でも、キミが羨ましいんだ（ふにふに）」

「それは君が孤児だからかい？」

「いいや、言っているだろう境遇には不満なんてないってさ（ふわふわ）。ボクはキミの母上に育てられたも同じさ、だからキミのこととずっと小さなころから見えてきたよ（ふにふに）。キミはボクに取っての憧れなんだよ、決して手の届かない憧れさ……だからボクはキミに捧げる曲を弾くんだけ（ふにふに）」

「……………（困った、話が理解できないぞ）」

ローゼンクロイツが急にハツとした。

「そうか、これが愛なんだね（ふにふに）」

「はい？」

「ボクはキミに恋してるんだよ（ふにふに）」

「いや、ローゼンクロイツ君、男の子の君が突然なにをおっしゃってるんだい？」

見た目は可愛いオンナの子でも、ローゼンクロイツは正真正銘のオトコの子。今までだって格好はオンナの子だったが、そーゆーそぶりを見せたことはなかった。つまりただの女装趣味の範疇でとどまっていたのだ。

それがついに真症に開花しちゃったんですか？

エメラルドグリーンの瞳にルーファスが映し出される。

「ルーファスはボクのことキライなのかい？（ふにふに）」

「スキかキライかという問いに対しては、スキって答えるけれど（それが恋愛感情なのかと聞かれると……）」

「だったらボクら相思相愛じゃないか（ふあふあ）」

「それはきつとなんか意味が違う！」

どんと話がトンデモない方向へと転がりはじめている。

間近で見るローゼンクロイツはそこの女子より、よっぽどよっぽどカワイイ。

が、しょせんはオトコの子。

そもそも小さいころから付き合いのあるルーファスは、もしもローゼンクロイツが生粋の女子だとしても、兄弟とか家族とかの感覚になってしまつて、恋愛感情なんて銀河の彼方だった。

ローゼンクロイツの顔がどンドン迫つて来て、どンドン追いつてきゅつと掴まれ、逃げようにも逃げられない。しかも、袖口を掴まれる力は強くなつていた。

ローゼンクロイツの顔がルーファスの顔に近づいた次の瞬間、危機感が頂点に達してルーファスは力いっぱいローゼンクロイツを突き飛ばした。

悲しそうなローゼンクロイツの瞳が覗き込む。

「やつぱりボクのことキライなんだね（ふう）」

「キライとかじゃなくて、超えてはいけない一線というものが男同士の友情にはあると思うんだよね」

「ボクのことキライなんだね（ふにふに）」

「そうじゃなくて、僕の話聞いてないでしょ？」

「わかったよ（ふにふに）。“愛情”を“愛憎”に変えるまでさ（ふーっ！）」

怖いほどの和やかな表情を浮かべるローゼンクロイツ。この瞬間、ルーファスはローゼンクロイツに呪い殺されるとマジで思った。

どこからともなくカナツチとワラ人形を取り出したローゼンクロイツは、ワラ人形に向かって杭を打ちつけはじめた。よく見るとワラ人形に『ルーファス』と書かれているのは言うまでもない。

カーン！

カーン！

カーン！

ワラ人形に軽快なリズムで杭が打ち込まれる。

ルーファスは胸を押さえて床に膝をついた。即効性のある呪いが襲い掛かったのだ。恐るべしローゼンクロイツ！

床に寝そべり死相を浮かべるルーファスがローゼンクロイツの足首に手をかけた。

「マジで僕を殺す気か……すぐにやめて！」

「これは愛情表現の变形だよ（ふにふに）」

「変化しなくていいから……（本当に殺される）」

「変化の乏しい人生なんてつまらないよ（ふにふに）」

「なんか議題が変わってる受け答えだし！」

「それこそが変化さ（ふにふに）」

こんな状況でもからかわれてるのか、それとも本気の受け答

えなのか。からかわれてる方に一票！

胸の痛みが激しくなってきた。ルーファスは死に物狂いでローゼンクロイツの身体をよじ登りはじめた。

ルーファスの手がローゼンクロイツのヒップにタッチ！

「ドコ触ツテナダ、コンチキショー！」

ピエール呪縛クンごとグーパーンチ！

「ふ、不可抗力だよ！」

ルーファスの手はローゼンクロイツのヒップを驚掴みしていた。しかも、苦しさのせいでもかなり強く握ってる。まるでローゼンクロイツに抱きついて襲い掛かっていうような光景になってしまった。

こんな恥ずかしい光景を目の当たりにした何者かが叫び声をあげた。

「ダーリンのえっち！」

《四》

音楽室の扉を開けて突然入ってきたビビ。

顔は真っ赤に染まって、ルーファスのことを軽蔑した目で見ている。軽蔑されるのも無理がない。だって、ルーファスがローゼンクロイツに襲い掛かっている構図なんだもん。

「ダーリンのえっちえっちえっち、そんなに飢えてるならアタシに言ってくればよかったのに、クラスメートを襲うなんてヘンタイだよ！」

慌ててローゼンクロイツから離れたルーファスはビビに駆け寄った。

「違うんだって、順番を追って説明するから……うつ！」

急に胸を押さえて倒れこむルーファス。ビビは突然のことに目を白黒させた。そして、微笑むローゼンクロイツはワラ人形に杭を打ちつけていた。

「ルーファスはすでにボクのモノさ（ふっ）」

「ダーリンがローゼンクロイツのモノに!？」

ビビは床でもがき苦しむルーファスの襟首を掴んで無理やり立たせると、バシーンといっぱつ平手打ち！

「ダーリンのばか！ アタシという女がいながら浮気するなんて……この国の法律だと同時に複数の女性と結婚できないんだよ！」

「僕の話の聞けって言うてるでしょう……うつ！（あの杭のせいで話がぜんぜんできない）」

再び打ち付けられる杭。そんなこととはつゆ知らずのビビ。

「そうやって病気のフリして話をはぐらかすつもりなの……ダーリン最低！」

「違うって言うてる……これは……うつつ！（ああ、もうすぐ死ぬるかも）」

「ダーリンのばかあ！」

「だからこれは呪なんだよ……うつつ！（ああ、死んだ祖父が手招きしてるよ、あはは）」

「呪？」

きよとんとしたビビとローゼンクロイツの視線が合う。

ローゼンクロイツの手にはカナヅチとワラ人形。そのワラ人形には杭がブツ刺さっている。ビビちゃんのシンキングタイム。そして、解答は？

「呪!？」

「だから僕がさっきからそう言ってるしょう……うとうとうっ！」

ビビの肩にもたれかかるようにしたルーファスは気を失った。「ダーリンしっかりして！」

返事がない。人はこれを気絶と呼ぶ。

真っ赤な顔で憤怒したビビの身体がブルブル震える。もちろん寒いからではない。怒っているのだ。

「よくもダーリンを酷い目に遭わせてくれたわね、もお泣いたって許さないんだから！」

「……うえ〜ん、うえ〜ん。泣いてみた（ふっ）」

人を小ばかにしたような笑みを浮かべたローゼンクロイツに、ビビは本気と書いてマジでぶちギレた。

「ああ〜もお、アタシ本気で怒ったかね！ ちょープリティーなアタシが怒ると怖いんだかね、覚悟しいや人間！」

「……怖い怖い、ぶるぶる（ふっ）」

ローゼンクロイツの挑発は止まることを知らなかった。しかも感情ゼロで、言い方が淡々としているのが妙に腹が立つ。

怒り頂点マックス越えちゃって一二〇パーセントのビビは大鎌をどこからともなく取り出した。

「くたばれ人間！」

大鎌を構えてビビが地面を蹴り上げジャンプした。ジャンプした時の弱点その一。飛んだら最後、通常空中では自由な身動きができず、方向転換することは難しい。

無表情なローゼンクロイツがカナツチを投げた。

「……喰らえ悪魔（ふあふあ）」

ゴン！

見事命中。ローゼンクロイツちゃんには一〇〇ポイント差し上げます。

「アイタタ……金物は反則だよお」

頭を押さえながらうずくまるビビは涙目だった。カナツチ攻撃はかなり堪えたらしい。当たり前だけど。

かなりやられぎみのビビちゃんの報復手段。投げられたら投げ返せ！

床に落ちてるカナツチを拾い上げたビビは力いっぱいローゼンクロイツに投げつけた。

「えいっ！」

クルクル回転して向かって来るカナツチをローゼンクロイツは軽やかに避けた。何気に運動神経はいいらしい。しかも、よく見るとキャッチしてるし。

カナツチをキャッチしたローゼンクロイツは無言でそれを投げた。

ゴン！

「いたーい！ 弱ってる相手に追い討ちかけるなんて卑怯

者！」

「……敵は起き上がれなくなるまで叩き潰せ（ふっ）」

「ただの弱い者イジメじゃん！」

「弱い者にも全力で戦わないと失礼だろっ（ふにふに）」

「ぜんぜん失礼じゃありません！（もあ、なんかムカツク！）」

今までしゃべっていたビビが突然立ち上がってローゼンクロイツに攻撃を仕掛けた。

大鎌を横に大きく振りながらビビが叫ぶ。

「油断大敵、これアタシの座右の銘……あっ!？」

顔面直撃脳天炸裂するはずだった大鎌は、ローゼンクロイツの素早い手刀によって柄を叩き割られてしまった。ローゼンクロイツ実は肉弾戦強い？

空かさずローゼンクロイツの無表情チョップがビビの脳天に

炸裂！

「いたーい！ もあさつきからやられっぱなしだよ」

「愛のチカラは偉大だね（ふにふに）。ボクがルーファスを想うチカラは誰にも負けないよ（ふあふあ）」

「ダーリンのことを世界で一番想ってるのはアタシですう
く！」

「ボク（ふに）」

「アタシ！」

「タワシ（ふっ）」

「ふざけてるの？」

「うん（ふっ）」

最高の笑みでローゼンクロイツはうなずいた。この子の性格よくわからん。

二人がもうすぐキスしちやますよくらいの距離に互いの顔を近づけて対峙していると、横たわるルーファスの近くで声がした。

「大丈夫かルーファス、しっかりしろ！」

ルーファスをしゃがみ込んで膝で抱きかかえるエルザの姿がビビとローゼンクロイツの目に入った。恋のライバル出現！

エルザがルーファスの身体を強く揺さぶる。

「しっかりしろ、目を覚ますのだ！」

ルーファスは返事一つせず、目を覚ますことはなかった。

微かに鼻で笑ったエルザがルーファスを丁重に床に寝かせて立ち上がった。

「誰がルーファスをこんな目に遭わせたのだ、名乗り出るがよい！」

ビビがローゼンクロイツを指差した。

「ローゼンクロイツが呪でやった」

鋭い眼差しで愛はローゼンクロイツを睨み付けた。

「本当か、ローゼンクロイツ？」

「ま、まさか!?(ふにゃ!?)ボクが……やったよ（ふっ）」

にこやかに笑うローゼンクロイツ。それを見たエルザは鞘からゆっくりと刀を抜いた。

「よくも、ローゼンクロイツとて私のルーファスをこんな目に

遭わせると許してはおけぬ！」

切っ先をローゼンクロイツに向けるエルザにビビからツッコ
三。

「……私の？ いつからダーリンがアンタのもんになったの
よ！」

剃刀のように鋭いツッコミにエルザはたじろぎながら顔を赤
くした。

「い、いや、それはだな……そうなたらよいという仮定の話
であって……」

「ダーリンのこと好きってことでしょ？ あーっもあ、やっぱ
リエルザはダーリンのこと狙ってたんじゃん。二人揃ってダー
リンのこと狙って、ダーリンはアタシだけを見てればいい
の！」

ローゼンクロイツに向けられていた刀の切っ先がビビに向け
られた。

「それは自分勝手というものではないのか？ ルーファスが貴
様だけを見てればいいなど自分勝手極まりない。伴侶を選ぶの
はルーファスだ！」

「ルーファスクンはボクの所有物（ふにふに）」
誰もが一步も引かない状況。女の戦いつて怖いなあ……。ひ
とりオトコの子が混ざってるけど。

一触即発で睨み合う三人。そのトライアングルの中心に沈ん
でいるのはルーファス。彼は未だに気を失ったまま。というか、
今は起きない方が幸せかも？

横たわるルーファスにビビが駆け寄る。

「こうなったらダーリンに決着つけてもらおうよ。ねえ、ダーリン起きて、起きてよ、起きてください、起きろって言うってんだろうが！」

ビビちゃんの力強い拳がルーファスの頬を抉った。これじゃあ起きるところかよけいに気絶。もしくはご臨終。

乱暴なことをするビビを見かねてエルザがルーファスを奪おうとする。

「私が起こす！」

「ダーリンはアタシが起こすの！」

だが、ビビはルーファスを渡そうとせずぎゅっと抱きしめる。それに負けじとエルザはルーファスの腕を引っ張る。そして、気づけばローゼンクロイツがもう一方の腕を掴んでいた。

「ボクが起こすのが確実だよ（ふにふに）」

二人の女性と一匹の両生類に奪い合いをされるんなんで、この幸せ者……でもなさそうだね。

引っ張られるルーファスの顔が悪夢でも見てるように苦痛に歪む。そして、ゆっくりと目を覚ました。

「ダーリンー！」&「ルーファス！」&「へっばこクン（ふっ）」

三人の声が重なり嬉しそうな顔をしているが、ルーファスの表情は微妙。この状況が把握できてないうえに、身体が引っ張られて痛い。

「痛いから離してくれないかな？（どうしてこんな状況に陥っ

てるわけ？」

「ダーリンがアタシのこと好きって言ったら離してあげる」

「私のことを好きと言うのだからアタシ！」

「ボクを好きって言わないと……呪うよ（ふっ）」

三人の言葉を聞いて蒼ざめるルーファス。だんだん状況が理解できてきたが、意味不明な展開なことにはかわりなかった。

エルザがググツとルーファスの腕を引く。

「私を好きと言えば一生遊んで暮らすことができるのだぞ！」

この時ばかりは金に物を言わせてルーファスを誘惑。

ローゼンクロイツがググツとルーファスの腕を引く。

「ボクを好きって言わないと……呪うよ（ふっ）」

やっぱりそれかい！

最後にビビが力いっぱいルーファスに抱きつく。

「アタシはダーリンに死ぬまで尽くすよ」

愛くるしい瞳でルーファスを見つめるビビ。

この状況を打破したいルーファスだが、三人に抱きつかれていては無理。しかも、運が悪いのか、神のイタズラか、この場に第四の女が現れた（正確には三）。

「ふむ、妾の見ていないところでウハウハだなルーファス（まさかルーファスがここまでやるとは、大人の階段のくぼるう）」

「断じてウハウハじゃないし。この状況をよく見てよ！」

泣き叫ぶルーファスに追い討ちをかけるように第五の女性現る。

室内の気温が一気に灼熱まで急上昇した。

「おほほほほほほつ、見つけたわよあ〜ん!!」

目がイッチャてるベル登場。しかも武器が機関銃から、キャノン砲に替わってるし!

状況は最低最悪。

ルーファスに抱きつく三人が順番に声を発する。

「ルーファス!」

「へっぼこ(ふっ)」

「ダーリン!」

そして、その輪にベルも飛び込んだ。

「乱交パーティーならアタクシも混ぜなさい!」

そんな光景を冷めた目で見つめる一人の女。

「ふむ、青春だな(ふふふっ)」

最後に泣き叫ぶルーファス。

「もういい加減にして、僕が好きなのは」

ベルが持っていたキャノン砲が暴発した。

天井が崩落して、窓ガラスが大音響を立てて碎け散り、音楽室は大惨事なった。

そして、ルーファスの最後の声は完全に掻き消されたのだつた。

ぶっ壊れる音楽室から一同は一目散に逃げた。そんな中で二人を振り切ったルーファスは一人だけ振り切れなかった。

「ダーリン、さっき誰の名前言ったのぉ?」

ビビに抱きつかれながらルーファスは走って逃げていた。

「知らないよ！」

「もぉ！」

ビビはニッコリと笑ってルーファスとともに深夜遅くの学院から逃げ出したとき。

翌日、学院は大騒ぎになったことは言うまでもないが、騒ぎを起こした犯人は未だ見つかっておらず、どっかの大財閥の力でこの事件はすぐにもみ消されたらしい。

第五話 アゲクの果て

《一》

いつもの朝、いつもの光景、いつものように学院に登校。

遅刻しそうで走っているルーファスと、その横を魔法のホウキでラクラク快適なビビの姿。これがいつもの登校風景だった。ビビの存在はご近所さんでも有名で、いるんな人から可愛がられている。ご近所のアイドル的存在といった感じだ。

今日はいつもよりも遅刻気味で、なんか間に合わない雰囲気
が醸し出されている。

必死に馬車の停留所まで向かうルーファス。

その途中、最新型のサイボーグ馬の馬車がルーファスの横で
停車した。

「乗っていかいルーファス？」

馬車の中から声をかけたのはクラウスだった。

「助かったよクラウス！」

「ビビちゃんも乗っていくだろう？」

「アタシは別にいいもん。自分のホウキがあるもん」

なんだかビビはスネているようだった。

ルーファスに乗せた馬車が走りはじめ、しばらくしてクラウスがコッソリ耳打ちをしてきた。

「ルーファス、ビビちゃんとかあったのかい？」

「私が彼女のホウキに乗らないから怒ってるんだよ」

「乗ってあげればいいじゃないか」

「ヤダよ、女の子と二人乗りなんて恥ずかしいじゃないか」

今日も遅刻しそうだったルーファス。ホウキに乗れば余裕で遅刻しないで済むのだが、断固拒否したルーファス。そんなこんなでビビは怒っているのだ。

気づくとビビは馬車と並行して走り、中にいるルーファスとクラウスの様子を窺っていた。

クラウスは小窓を開けてビビに尋ねる。

「ビビちゃんも乗るかい？」

「別に……乗りたくなんだから！」

「僕のほうからお願ひしてるのさ、ビビちゃんに乗って欲しいと（こういう言い方だったら平気かな）」

「いや、楽しそうな二人の邪魔しちゃ悪いもん！（いいもん、別にいいもんね！）」

「いや、邪魔だなんて……（ダメか、まだまだだな僕の交渉術も）」

「クラウスなんか大キライ！！」

「なっ……」

まさかの言葉にクラウスは大ダメージを受けた。

まさか、まさかレディに嫌われるなんて、クラウスの人生であつてはならないことだった。

真っ白に燃え尽きてクラウスは魂の抜け殻になった。

真横にいたルーファスが焦る。

「だいじょぶクラウス！」

「……………」

返事がない、ただの燃えカスのようだ。

ルーファスは馬車の外にいるビビを怒鳴りつけた。

「ビビ、クラウスに謝りなよ！」

「なんでアタシが謝んなきゃいけないわけ？」

「なんでじゃないでしょ、なんでじゃ！」

「なんでデスカー？」

あきらかな挑発でルーファスのこめかみがピキツとキタ。

「ちよつと馬車止めてもらえますか？」

ルーファスはそう言つて馬車を止めてもらい下車した。

馬車はクラウスを乗せて走り去っていく。

ビビもホウキを降りて地面に立つて、面と向かつてルーファスを睨んだ。

「なに、アタシとヤル気？（ダーリンだつて容赦しないんだからね！）」

「あのさ、なんでそんなに怒つてるの？」

ルーファスのほうがちよつと大人の対応だつた。

「別に怒つてないしー」

「それあからさまに怒つてるでしょ。ねえ、ちゃんと言つてくれないとわからないでしょ。不満があるならさ、ちゃんと口に出して言つてよ」

「だつて……（ダーリンとクラウスの二人で楽しそうに登校し

「ちゃってさ、なんかアタシのこと除け者扱いだしー」
単純に嫉妬だった。

ビビはクチビルを尖らせてそっぽを向いてしまった。
その態度にルーファスは嫌気が差した。

「ビビの気持ちはよくわかった。もうビビのことなんて知らないよ！」

「ぜんぜんよくわかってません！」

ルーファスはビビを置いて歩き出してしまった。

「待つてよダーリン！」

呼び止めてもルーファスは耳を貸さずに歩いて行ってしまった。
た。

「ダーリンのバカ！ アタシは……ダーリンと二人つきりで学校に行きたいだけなの！」

ルーファスがピタリと足を止めて、クルツと振り返って口を開いた。

「ワガママばかり言っているとみんなから嫌われるよ」

冷淡にルーファスは言い切った。

みんな「ルーファスも含む

ビビちゃんシヨック!!」

言葉の暴力でかなりの痛手を負って、ビビは胸を抑えて地面にしゃがみこんだ。

「シヨック……（ダーリンに本気で嫌われちゃった）」

でも、ちゃんとルーファスはすぐそばに居て、ビビにやさしく手を差し伸べていた。

「ほら、ちゃんと立って」

「ありがとダーリン（やっぱりダーリンはアタシのこと見捨てないんだ）」

「あとでちゃんとクラウドに謝るんだよ」

「なんでアタシが？ えっ、なんかしたっけ？」

「……………（もうダメだ）」

「あれ、黙っちゃってどうしたのぉ？（アタシなんか言っただ？）」

「ホントどうしようもないね、もう知らない！」

ルーファスは怒って走り出した。

置いていかれたビビは目を白黒させてしまっている。

「え、あ、ええ!?（どういうこと!?)」

呆然と立ち尽くすビビを置いてルーファスは小さくなって行く。

ビビはすぐに魔法のホウキに乗って猛スピードで追いかけた。
「待ってよダーリン！」

あっ、走っていたルーファスがコケた。

ビビは止まろうとしたが、全速力で飛んでいたホウキは時速
三〇〇キロ。

「ダーリン……………ダーツ!!!」

ルーファスを通り越して、ビビは遙か彼方へキラリーンと星
になった。つまり、ブレーキが効かなかったということ。

姿の見えなくなったビビヘルルーファスから一言。

「……………アホだ」

そうだ、早くしないと遅刻する！

ルーファスが走り出そうとすると、近くの家から夫婦喧嘩をする物音が聞こえて来た。

「離婚よ離婚！」

「おう離婚でもなんでもしてやるよ！」

喧嘩するほど仲が良いなんて言うけど、実際のところはどんなだろうか？

ルーファスは小さく息を吐いて今度こそ走り出そうとした。

が、夫婦喧嘩をする家の中からフライパンが窓ガラスを破って飛んできた。

「あぶなっ！」

紙一重でフライパンを避けたルーファス。次に包丁も飛んできたが、それも避ける。だが、もう一つ放物線を描いて飛んでくる物体にルーファスは気づいてない。

ゴン！

やかんがルーファスの脳天直撃。しかも中身が入っていたのでかなり痛い。

しかも熱湯が入っていたりしてね！！

「イタツ！！」

叫びながらルーファスはボタンと倒れた。

脳天クリティカルヒットで気を失ってしまった。

地面に倒れるルーファスの横を、鎧を着た黒髪の武人と、月の砂漠を連想させるラクダに乗った中東風の衣装を着た妖女が通りかかった。ラクダに乗った美女はあんまり見かけない光景

だ。

「マルコ、歩みを止めよ」

気高い声でラクダに乗ったが妖女が命令すると、武人が機械のようにピタッと足を止めた。

「なんでございましょうかモリー様」

「そこで行き倒れておる子供を助けてやるがよい」

「畏まりました」

主人に頭を下げた武人は地面に倒れているルーファスの脈を取り息を確かめると、軽くルーファスの頬を叩いて目を覚ませようとした。

「しっかりするのだ小僧」

「う……ううん……」

ゆっくりと目を覚ましたルーファスは目の前の顔を見てビビる。

「わっ!? 誰だおまえ!」

「おまえとは失礼な、俺の名はマルコ。こちらに居られるのは我が主君グレモリー公爵様だ」

「はあ?」

きよとんとするルーファス。

マルコと名乗った武人の顔は、男にしておくには持ったいないくらいの綺麗な顔立ちで、肩まで伸びた美しい黒髪が静かな風に揺られていた。

そして、この美しい武人よりも美しいのが、ひと目で良家の娘だとわかるラクダに乗ったモリー公爵だった。

震える拳を抑えながらマルコはルーちゃんを地面に下ろした。「すまないことをした、心から詫びよう（くっ、なんでこんな奴に頭を下げねばならんのだ）」

頭を下げるマルコに対するルーちゃんの顔はかなり優越感。

自分の力で相手を負かしたわけでもないのにね！

襟元を正したルーちゃんは華麗に入り去ろうとした。

「じゃ、わたしは世界を征服に行くから、さらば凡人ども！」

「待つのはルーファスとやら」

とても静かなモリーの声。その声に反応してルーちゃんは身動きを止めた。いや、止められた。モリーの静かな声には底知れぬ力が込められていたのだ。

背中に冷たいものを感じながらルーちゃんが首だけを動かして後ろを振り向くと、モリーは静かな声で尋ねてきた。

「ビビという悪魔の娘を探しておる。どこにおるか知らぬかえ？」

「あゝ、ビビならさっきこの道をホウキに乗って爆走して行ったぞ、向こうに」

と、遠くを指差しながらルーちゃんは疑問を感じた。

「（こいつらビビの知り合いか？）」

「モリー様のご用はお済みになられた、早々に立ち去るがよい小僧」

「あ、ああ」

マルコの雰囲気は質問一切受け付けないといった雰囲気だった。だからルーちゃんは仕方なく華麗にこの場から立ち去った。

かなりのスピードで。人はこれをとんずらと呼ぶ。

小さくなって行くルーちゃんの背中を見ながらマルコが呟く。

「あの小僧、ビビ様のお知り合いだったのでしょうか？」

「おそらくそうであるう、微かにビビの匂いがしておった。それにあの子供、内に二つの心を持っておる。それに……」

「それに？」

主君の顔をいぶしげな表情で見るマルコに対してモリーは微かに微笑んだ。

「今の言葉は忘れるがよい」

「……畏まりました」

ラクダが静かに歩き出す　　ビビを目指して。

《二》

ルーちゃんは学院に行かずに、市街地を無意味に爆走していた。

どこかでビビが待ち伏せをしている可能性は高い。そこでルーちゃんは世界征服の作戦を考えるついでに市街地を爆走しているのだが、何もいい考えが浮かばない。

てゆーか、市街地を爆走する意味がどこにあるのか？

そのことにやっと気づいたルーちゃんは足を止めた。

「……疲れるだけだ」

さてとこれからどうしようかなって感じでルーちゃんが物思いに耽っていると、前方から見慣れた空色ドレスがやってきた。

ルーちゃんの前に入った空色ドレスが突然ワラ人形を取り出す。

「ガッコーサボッテンジャネゾ！」

言うまでもなく、ワラ人形を持ち歩いている空色ドレスはこの近辺では一人しかいない　ローゼンクロイツだ。

「わたしは学校をサボってるんじゃない、大いなる野望を企てている最中なのだ、わかったか凡人。てゆーか、おまえこそ学校をサボっているではないか」

「……道に迷った（ふあふあ）」

「学校行くのにどうして迷う。四〇〇字以内に説明してみよ！」

「……ウソ（ふっ）」

「わたしをからかっているのか愚民のクセして」

「だってボク……キミ嫌い（ふっ）」

ルーちゃんの大シヨック！

まさかローゼンクロイツに『嫌い』って言われるなんて、夢にも思っただけだったルーちゃんは、精神的に大ダメージを受けて気分ブルー。

「ま、まさか、ローゼンクロイツに嫌いと言われるとは……」。

まあ、わたしもオスには興味ないがな！」

「ボクもないよ（ふっ）」

「どうしてだ、おまえはわたしのこと好きだったんじゃないのか!？」

「そんな記憶ないよ（ふあふあ）」

「どうやら“あの時”ローゼンクロイツは悪酔いしていたようだ。彼の記憶には危険な情事など一切デリート済みだった。

なんかシヨックを受けたルーちゃん。

たとえ相手が恋愛対象でなくても、フラれるとシヨックだ！！

こういう場合は愛の逃避行しかない。涙を流すルーちゃんは、乙女チックにすすり泣きながら、華麗に走り去る。追ってもムダよ！

ルーちゃんは傷心に駆られながら市街地を疾走、爆走、激走！

勇気を奮って、古い恋を廃棄処分して新しい恋に向かってレッツ・ゴー！

しばらくルーちゃんが疾走していると、見覚えのあるブロンド美女が。

数人の男たちに腕を掴まれからまれているブロンド美女。ルーちゃんが“女の子”を見間違えるはずもなく、それはエルザだった。

「やめろ、放せ！（くっ、油断しなければこんなやつら）」

エルザは掴まれた腕を振り払おうとするが、どういうわけかまったく力が入らず、男たちに羽交い絞めにされて身動きが取れなくなっていた。

「こないだの借りはたつぷり返してやるぜ、げへへ」

普段のエルザだったら、そんじゃそらのオトコになんか負けない。きつとなにか抵抗できないわけがあるに違いない。

男の数は全部五人。それを見てルーちゃんの目がキラリーン

「マギ・クイック！」

ルーファスは風系魔法で自らの運動スピードを上げた。

疾風のように走ったルーファスが飛んだ。

「喰らえ、愚民ども　大魔王キーツク！」

ルーちゃんの飛び蹴りが男の顔面にめり込んだ。声をあげる間もなく男が気絶した。

突然のルーちゃんの登場に男たちは焦った。

「誰だてめえ！」

「胸に刻んで置け、大魔王ルーファス様だ！」

ルーちゃんはグルグル眼鏡を外し、カツコよく素顔を晒した。

エルザもルーちゃんの登場に驚きを隠せなかった。

「ルーちゃん、どうしてここに？」

「わたしが来たからには安心しろエルザ！　こんなやつらケチヨンケチヨンのギッタギッタにして、生ゴミに出してやる！」

とは言っても状況的にはエルザは人質に捕られていて最悪。

エルザを後ろから羽交い絞めにする男が一人と、手が空いている三人が残る敵だが、誰もケン力が強そうな顔と体をしている。

果たして痩せ型のルーちゃんに勝ち目はあるのか！！

男Aが吠える。

「よくも俺のダチをやってくれたな。この女の彼氏だかなんだか知らねえが、ただじゃあ済ませねえ！」

吠えた男Aをルーちゃんは鼻で笑った。

「わたしはエルザの彼氏じゃない、エルザはわたしの愛人Aだ。それに」

上着を脱ぎ捨てたルーちゃんの豊満な胸がボヨンと弾む。

「わたしは女だ！」

男A B C Dがルーちゃんの胸を見て舌なめずりをした。

超美人顔で巨乳ときたら喰うしかないと思つた男たちは判断したのだ。

先手を切つて男Aがルーちゃんに飛び掛かつてきた。

「俺が先に頂くぜ！」

「ふん、下賤な。この大魔王ルーファス様に敵う男がいるものかっ！」

クイック状態のルーちゃんは軽やかにステップを踏み、呪文を唱えながら回し蹴りを放つた。

「ラギ・ウインドキック！」

風の力を宿し放たれた蹴りは……見事に外れた！

その隙にルーちゃんは男Aにボディブローを喰らつた。

どうしたんだルーちゃん、ルーファスじゃないルーちゃんは強いんじゃないのか！

殴られた腹を抱えながらルーちゃんは、ピシッとバシッと指を差した。

「おのれ凡人のクセになかなかやるじゃないか！」

威勢よく言つたルーちゃんは男Aではなく、明後日の方向を向いていた。

ルーちゃんは郵便ポストに話しかけていた。

しまった！！

そうか、そうだったのか……グルグル眼鏡を外したから何も見えていないのだ！！

ルーファスはルーちゃんになってもへっぴこだった。

こいつになら勝てる！

そんな空気が男どもに蔓延して、ABCが一気にルーちゃんに襲い掛かった。

気づけばルーちゃんはボコボコにされて、なんか弱ったところを服まで脱がされそうになっていた。

「やめる鬼畜ども、汚い手でわたしの体に……きゃっ、誰だ今ケツ触ったのは！！」

ヤバイぞ、ルーちゃんピンチだぞ！

ルーちゃんの弱点に気づいたエルザが叫ぶ。

「メガネをかけるルーちゃん！」

「イヤだ、こんなダサイ眼鏡かけられるか！（ああん、こいつめ胸を触りやがって！）」

「見た目にこだわってる場合か！」

「場合だ！」

ポリシーなんだからしよーがないジャン

しかし、本格的にそんなことを言ってる場合じゃなくなってきた。

上着を全部脱がされそうになっているルーちゃんの下乳が
っ！

それ以上の露出は『魔導士ルーファスシリーズ』じゃ許され
ないぞ！

ルーちゃんの体の周りにマナフレアが発生していた。

「（見えなくてもこの距離なら……）」

声高らかにルーちゃんが呪文を唱える。

「ピコ・トルネード！」

ルーちゃんを中心に強烈な竜巻が天高く吹き上がった。

竜巻に巻き込まれたABCは空の彼方へと飛んでいったついでに、ルーちゃんも飛ばされていた

ABCを飛ばすためにはルーちゃんも飛ばされる必要があった。こんなルーちゃんは計算済みだ。

上空でルーちゃんパンチ！

ルーちゃんキック！

ルーちゃんヘッドバット！

次々と男どもを地面に叩き落とし、華麗にルーちゃんは地面に着地……グキッ！

「足……くじいた」

見事にルーファス負傷！

足をくじいて立ち上がれない、さすがだ！

だが、もう敵はただ一人だ。

あまりのルーちゃんの強さに残った男Dの顔に冷たい汗が流れる。

「こ、この女がどうなってもいいのか!？」

「ルーちゃん！」

「大丈夫か？」

「すまない得体の知れないクスリを飲まされ力が……（力さえあれば男などに負けぬのだが）」

悔しそうな顔をするエルザの頬に一筋の涙が零れ落ちた。

ルーちゃんはエルザを強く抱きしめた。

「心配するな、おまえがわたしの愛人である限り、何があるう
と思つて見せるさ」

「アホかつ！」

エルザのグーパンチがルーちゃんの頬を抉つた。

「私はいつから貴様の愛人になつたのだ！」

「この世のオンナは生まれたときからわたしの愛人だ」

今度は無言のままグーパンチが飛んできた。

鼻血をブーしながらルーちゃんは少し怒つた表情をした。

「命の恩人を二度も殴るなんて、この心知らずめ！」

「助けてもらわなくても自分の力でどうにかできた」

「ふつ、強がるな。今のおまえの力は凡人以下だ。二度のパン

チもぜんぜん痛くはなかつたしな！」

強がつても鼻血は出てるけどね！

エルザは拗ねたようにそっぽを向いた。

「仕方ないであろう。変なクスリを飲まされて力が……」

「いつたいあいつら何者なんだ？」

「前に不良行為をしているところを注意して仕置きをしてやつたのだ。きっとそれを逆恨みして、私を待ち伏せしていたのであろう」

「あんなやつら束でかかって来ようとまた守ってやる」

サツと立ち上がったルーちゃんは、地面に落ちていたエルザの刀と自分の服を拾い上げて埃を払った。

「さて、世界征服を企てるために行くぞ」

「そんなこと私が許さんぞ！」

「まあいいではないか」

ルーちゃんはエルザを強引に背負った。

「なにをする、私は一人で歩ける！」

「ムリをするな」

「ムリをしてるのは貴様のほうだろう！」

ルーちゃんはいくじいた足を引きずっていたが、決してエルザを下ろそうとしなかった。

もうエルザはなにも言わなかった。

エルザはルーちゃんの温もりを感じながら目を閉じた。たとえ相手が“ルーちゃん”でも、エルザの心臓は激しく鼓動を打っていた。

できれば、ずっとこのまま……。

「……重い」

ボソツとルーちゃんが呟いた。

「そんなに重くない！」

「いや、重い」

文句を言いながらもルーちゃんは歩き続けた。

しばらく二人だけの時間をエルザが過ごしていると、後方から豪快なエンジン音が近づいて来た。

見事に雰囲気ぶち壊しですね！

エルザが後ろを振り向くと、そこにはジェットホウキに乗る爆乳の女。もちろんカーシヤだった。

「その二人組み止まれ！（ビビつらから青春の香りがするぞ、ふふっ）」

この声を聞いたルーちゃんも後ろを振り向く。

「なぜカーシヤがここにいる。もう朝のホームルームはじまつてるだろう！」

カーシヤから逃げるのは得策でないと考えてルーちゃんは足を止めた。

すぐ横にカーシヤもジェットホウキを止めた。

「ルーちゃんとエルザ、白昼堂々学校サボってデートか？（根性なしのルーファスだったら絶対にしない暴拳だな）」

「そうだ」

ルーちゃんは否定するでもなく認めた。だが、すぐにエルザが否定する。

「ウソだ、デートはずあるか。そんなことよりも、カーシヤ先生がなんでこんなところに？（校外パトロールというわけもなさそうだが）」

「よくぞ聞いてくれた。学校なんてそんなくだらない場所に行ってるヒマじゃないのだ。この街にある女が来たという情報を行

仕入れて探してるところなのだ」

ある女と聞いてルーちゃんの頭にある女性の姿が浮かぶ。

「カーシャが探している女とは、鎧を着た変な男を連れたアラピアンな感じの女か？」

「それだ、なんでルーちゃんがモリーのこと知ってるのだ？」

「さつき会ったぞ。なんだかビビを探しているとかだな」

「しまった、やはりビビを探しておったのか。ルーちゃん、さつさとモリーと会った場所まで案内しろ」

「はあ？」

カーシャはいつも強引です。逆らってムダです。さつさと従った方が身のためです。でないと身の保証ができません。

ルーちゃんはエルザを地面に下ろした。

「わたしはこれからベルとともに行く。おまえはもう一人でも歩けるだろう」

「最初から一人で歩けると言っただろう」

「聞いてない」

ルーちゃんはきつぱりと言ってカーシャのジェットハウキに二人乗りした。

エンジンを吹かせてカーシャがエルザに手を振る。

「さらばだ、ルーちゃんを借りていくぞ」

「ちよつと待てカーシャ先生！」

エルザの言葉も空しくジェットハウキは走り出した。
ルーちゃんもエルザに手を振る。

「さらばだエルザ！」

背中の後ろで小さくなっていくエルザの姿を見ながら、ルーちゃんはカーシャに声をかけた。

「あのモリーとかいう女は何者なんだ？」

「妾のダチの悪魔で元は月の女神。モリーというのは愛称で、グレモリーと名前で通っておるが、本名はレヴェナと云う。争い嫌いとは自分では言っているが、本当は清ました顔して性根が腐ってる女だ」

「性根が腐ってるようには見えなかったが？」

「あの女は何千年も昔のことをネチネチと掘り返すような女なのだ。された嫌がらせは絶対に忘れないし、お金を借りたが最後、酷い目に遭う（まるでファウストのような奴だな）」

過去の回想に浸るカーシャ。モリーにだいぶ痛い目を見せられたと思われる。

物思いに耽って若干事故りそうなカーシャにもう一つルーちゃんから質問。

「モリーの傍に仕えていた男は何者だ？」

「あれはマルコシアス侯爵、モリーの獰猛な番犬だな。近くにモリーがいる時はそうでもないが、野放しにすると手に負えん。それにマルコは」

「前見て運転しろ！」

何かを言おうとしていたカーシャの言葉をルーちゃんの叫びが掻き消した。

前方にそびえ立つ時計台！

「壊すぞ」

「はあ!？」

カーシャに集まるマナの力。

「メギ・メテオ！」

どつからから飛来してきた隕石が時計台を撃破！！

舞い上がった砂煙の中をジェットホウキは抜け、咳き込みながらルーちゃんが叫んだ。「あんたアホかつ！」

「超高速で時計台に衝突したら妾たちが死ぬであろう」

「壊さずに避ける！」

王都アステアでテロ、時計台が何者かによつて破壊される。なんてニュースがこの日のトップニュースを飾ることになりそ
うだ。

そんな事件を起こしつつ、住宅街の路地にジェットホウキを止めたカーシャは、辺りの空気をクンクン犬のように嗅ぎはじめた。

「微かにモリーの香水の臭いがするな（この臭いを嗅ぐだけで腹が立つ）」

「あんたは犬か！」

「では、そういうことで案内ごころうだった。あとは妾ひとりで行く」

「ちよつと待て、わたしも行く」

「なぜだ？」

「やつらはビビを探していたからな」

スタスタと歩いてきたカーシャが、ルーちゃんの両手をぎゅつと胸の前で掴んで瞳をキラキラさせた。

「青春だな！」

「意味がわからんぞ」

「よい、早くホウキの後ろに乗れ！」

「感謝するぞカーシャ、わたしが世界の覇者になった暁にはどつかの国をくれてやる。あゝははははっ！」

「笑ってないで早く乗れ、置いていくぞ」

「あ、ああ」

頭をポリポリと搔いたルーちゃんがジェットホウキの後ろに乗ると、カーシャが勢いよくエンジンを鳴らした。

「しつかり掴ま……れ？（なんだ、なにか来るぞ!?）」

カーシャとルーちゃんの視線が道の向こう側からこつちにやってくる。飛んで来る少女の姿を捉えた。

魔法のホウキに跨って道路を低空飛行していたのはビビだった。その後ろをラクダから毛並みの美しい黒狼に乗り換えたモリー公爵が追っていた。

「ダーリン！」

キイイイイッ！

急ブレーキをかけた魔法のホウキは急には止まらない

「ダ、ダーリン、ぐわあっ！」

ルーちゃんたちの横を通り過ぎたビビはキラリーンと星になり、その後ろを黒狼に乗ったモリーが追って行った。

啞然とするルーちゃんをよそに、カーシャはちまたで有名な胸の谷間から、絶対大きさ的に入るはずのないバズーカ砲を取り出して構えた。

ズドォーン！

バズーカ砲から出たのは巨大なマジックハンド。

マジックハンドはものすつごい勢いでモリーの身体を掴み取って、そのままカーシャのもとまで引きずって来た。

主人を奪われた黒狼は怒りに眼を紅くして、地面を激しく蹴り上げて道を引き返してくる。そして、モリーを拘束した張本人カーシャに鋭い牙を向けて飛び掛かろうとした。

だが、それをマジックハンドに掴まれているモリーが止めた。「止めよマルコ、カーシャに牙を剥くでないぞ！」

カーシャの眼前に迫った黒狼は空を激しく噛み切って牙を閉じた。そして、低く喉を鳴らしながらカーシャを睨み付け辺りを歩き回った。

自分の周りを歩き回る黒狼から目を離さないようにして、カーシャはモリーをマジックハンドから解放した。

「モリー、早くこの子を大人しくさせてくれないか？（あの眼、機会があれば妾を殺す気だぞ）」

モリーは殺気立っている黒狼の毛並みを優しく撫でた。すると、黒狼の身体に変化が起こり徐々にヒト型に変化していく。

そして、そこに武人マルコの姿が現れた。

そして、魔法のホウキを手にとってビビが逆走してきた。

「ダーリン助けて！」

戻ってきたビビはすぐにルーちゃんの後ろに隠れ、嫌そうな顔をしてモリーの顔を覗き見た。

ルーちゃんはビビとモリーに挟まれて、かな〜り困惑。

「おいビビ、わたしを盾にするな。それと、誰か状況説明をし
る！」

「ダーリン殺っちゃって！」

「だから状況説明をしろと言ってるだろっ」

ルーちゃんの言葉を受けてここぞとばかりにカーシャが一步
前に出た。

「ここは妾に任せろ」

そう言つてカーシャが胸の谷間から取り出したのはちゃぶ台。
カーシャは団らんするつもりだった。

ちゃぶ台に着いたカーシャは茶菓子とお茶をみんなに勧め、
勧められたみんなは何となくちゃぶ台に着いた。ちなみに人数
がちよつと多いので狭い。

お茶を一口飲んだモリーが軽く咳払いをして話しはじめる。

「……安物のお茶じゃな。もつといいお茶を出せぬのかえ？」

「おお、すまんな。モリーの上品な口には合わなかったらしい
な。でもな、学校の安月給で出せるお茶はそれしかないの
だ！」

微妙にカーシャはモリーに喧嘩腰だった。だが、モリーはお
清まし顔で受け流す。二人の間にはビミョーな温度差があった。
それはさて置き、ルーちゃんが気なることはコレ。

「で、どうしてビビがどうして追われてたんだ？ 一番まとも
な回答をしてくれそうなのモリーどうぞ！」

どうぞ、とモリーに手を向けたルーちゃんの首筋に、マルコ
が腰に差してあった剣を抜いて突きつけた。

「モリー公爵ないし、モリー様とお呼びしろ。次に呼び捨てにしたら容赦しないぞ！」

「……じゃ、じゃあ、モリー様どうぞ！」

ルーちゃんが蒼い顔をして改めて手を向けると、モリーは壇を切ったように放しはじめた。

「まず、そこにおけるビビは妾の養女じゃ。じゃがな、どういふわけかワガママな娘に育ってしまつてな、ある日お灸を据えるつもりでカップブラーメンの中に閉じ込めてやつたのじゃ」

モリーの顔が真剣そのものなので、誰も「なぜカップブラーメン？」にというツツコミは入れない。代わりにルーちゃんは手を上げて別の質問をした。

「で、なんでビビを追っていたのだ？（お尻ペンペンでもするつもりだったのか？）」

「そうじゃ、カップブラーメンから抜け出した罰として、地獄の業火で熱した鉄棒でお尻ペンペンしてやるつもりじゃった。それにビビは半人前ゆえノーズで暮らすことを許すことはできん。すぐにでも妾とともに異界へ帰るのじゃ！」

清まし顔のモリーの清閑な声をご近所さんに響き渡った。

《四》

道路のど真ん中でちやぶ台に座ってる五人。それだけでもご近所迷惑で異種異様だつていうのに、誰もが口を閉じて沈黙しているのがミョーに怖い。

そして、ついにビビが叫んだ。

「ヤダよーっ！」

ご近所さんに響き渡るビビの声。

カーテンの隙間から謎のちやぶ台集団を覗き見してる人がいたりするが、おおっぴらに見ることはない。

ちやぶ台の横を母親に連れられた子供が指差しながら通り過ぎるが、『お母さんあれなに？』『駄目よ、見ちゃ駄目よ』なんて会話をしながら足早に通り過ぎていく。

そして、電柱におしっこをする野良犬。

誰もが微妙に次の展開を見守っていた。

一生この人から離れません、ってな感じでビビはルーちゃん
の首に抱きついた。

「アタシはダーリンと一緒に暮らすんだから、ママはさっさと
ハーデスに帰ってよ！」

「妾が心配して迎えに来てやったというのに……」

いかにも悲しそうな顔をするモリーの瞳にキラリと光る一滴。
マルコはすぐにハンカチをモリーに手渡した。

「モリー様、これでお涙をお拭きください」

そして、すぐにビビを見つめた。

「ご息女と言えど言葉が過ぎますぞビビ様」

「だってえー、アタシとダーリンはもう夫婦だし」

このビビの言葉を聞いてモリーとマルコはフリーズした。二人
人にとっては驚愕の新事実発覚！

どっかに飛んでいた意識を戻したマルコがちやぶ台返し！

そのまま勢いよく立ち上がった。

「ど、どういうことだ小僧説明しろ！（コロス、コロス、絶対コロス！！）」

大声を出した横でモリーがあまりのシヨックに意識を失ってフラフラと倒れた。その倒れ方はおでこに軽く手を当てて、あくまでも可憐に倒れた。さすが貴族。

「モリー様、お気を確かに!？」

マルコはすぐさまモリーを抱きかかえ、鋭い眼差しでルーちゃんをにらみ付けた。

「小僧!」

怒鳴られたルーちゃんはビシッバシッシャキツと立ち上がった。ルーちゃんはルーファスと違って怯むことはないのだ……たぶんね。

「小僧小僧ってレディーに向かって失礼だぞ！ わたしを呼ぶ時はちゃんと大魔王ルーファス様と呼べ。それにわたしはビビと結婚したつもりなんてないぞ!」

「ではなぜビビ様は貴様に抱きついておられるのだ!」

マルコの指摘どおり、ルーちゃんにベタベタ抱きつくビビの姿は恋人以上の関係にしか見えない。

そこに極めつけとしてビビがどこからともなく契約書を取り出してマルコに叩き付けた。

「これがダーリンとアタシが婚約した証!」

叩きつけられた契約書をマルコはマジマジ読みはじめ、次第に顔つきが陰しくなって、仕舞いには顔面蒼白になった。

「こ、これは正しく悪魔の契約書ではないか!? な、なんてことだ……モリー様のご息女ともあろうお方が、こんな平民と結婚など……許してはおけぬ!」

瞬時に抜かれたマルコの刀をルーちゃんが真剣白羽鳥!

「ぐわあっ!? わたしを殺す気かこの野蛮人が!」

「俺に向かつて野蛮人とはなんだ! 俺はモリー様にお仕えする高貴なる騎士だ!」

「武器も持たん一般人に剣を振るう騎士なんて外道だ!」

「事態が事態だ、俺は貴様を必ず斬る。さすれば契約は無効となるのだ!」

二人が死闘を繰り広げようとしている中、一人は気絶、一人はルーちゃんに抱きついたまま、そして最後の一人は!?

「ふふっ、青春だな!」

カーシャは他人事としてお茶をすすりながら観戦していた。

緊迫感ゼロできゃぴきゃぴする仔悪魔少女。

「ダーリン頑張つて、見事のこの戦いに勝つてアタシを搔つ攫つて!」

「わたしはおまえのために戦っているのではない、自己防衛として戦っているのだアホがっ!」

両手で挟んだ剣を力いっぱい横に押し下げ、ルーちゃんは剣を放してすぐにマルコと間合いを取った。だが、マルコの動きは早く、風を切るスピードで地面を蹴り上げルーちゃんに襲い掛かってくる。

「お命頂戴!」

「ぐわあっ！」

しゃがみ込んだルーちゃんの頭上を掠める研ぎ澄まされた剣技。

紙一重で相手の攻撃を避けたルーちゃんは叫び声をあげた。

「武器をよこせ、わたしにも武器をくれ！」

と言ったルーちゃんとカーシャの視線が合致する。そして、ニヤッと笑ったカーシャは胸の谷間から何かを取り出すとルーちゃんに向かって投げた。

「これを使え！」

「サンキュー……ってフライパンかよ！」

カーシャの特殊武器　魔法のフライパン。テフロン加工でサビに強い！

フライパンを否応なしに構えることになったルーちゃんにマルコの剛剣が振り下ろされる！

カキーン！

相打ち。

マルコの一刀はルーちゃんのフライパンによって見事防がれた。フライパンが斬られることもなく、剣が折れることもなかった。フライパン対剣の世紀の大対決は五分と五分……なのか！?

ルーちゃんの攻撃！

たたかう

ぼうぎょ

逃げる

しかし、ルーちゃんの方が一足早く、剣を振るおうとして胸に隙のできたマルコにフライパンが炸裂！

胸当て越しに強烈な一撃を受けたマルコは地面に転がり、苦痛に悶えながら胸を激しく押さえた。そのマルコ痛がり方が尋常でなかったためにルーちゃんは思わずフライパンを投げ捨てて駆け寄った。

「大丈夫か？ そんなに強烈だったか、今の一撃？」

「うう……」

苦しむマルコを見てルーちゃんは焦りに焦ってマルコの胸当てを急いで外した。血も出てないし傷も見当たらない、ただそこには“胸”があった。そう、結構豊満なバスト！

「おまえ女だったのか!? どーりで尋常じゃない痛がり方をするはずだ」

なるほど納得。

地面に横になって倒れているマルコの姿を見て、ルーちゃん頭の名案が浮かぶ！

「そーだ、こういう時は人工呼吸だ！」

なんのためらいもなくマルコに口付け目的で人工呼吸をしようとするルーちゃん。それに気が付いたマルコが近くに落ちていた硬い胸当てスコーン！

胸当てで頭を強打するルーちゃんはニメールとほどぶっ飛んで地面に激突。すぐにビビが駆け寄って膝枕をする。

「しっかりしてダーリン！」

涙を流してルーちゃんを抱きしめるビビの前にマルコが立ち

はだかった。

「ビビ様、お退きください。最後の止めを刺します」

剣を構えたマルコがルーちゃんを一思いに殺そうとした時、清閑な声が場に響いた。

「止めるのじゃマルコ！ その者を殺してはならぬ」

この声を発したのはいつの間にか意識を取り戻してカーシャと楽しく団らんしていたモリーだった。しかも手にはお茶と、口にはようかんを入れて若干モグモグしている。

切っ先を地面に下ろしマルコはモリーに訴えた。

「どうして止めるのですか!? この者を殺さなければビビ様は

……」

「事情は全てわかっておる。じゃがな、無闇な殺生は許さぬぞ」

事情は全てわかっておる……ってことは、もしや気絶は演技だったのかっ!?

主人が殺すなど言ったら殺すことは叶わない。主人に死ねと言われたらマルコは自ら自害する。モリーの言葉はマルコにとって絶対であるのだ。ナイス忠誠心！

刀を鞘に納めたマルコはその場に胡坐をかいて座り込んだ。もう、何もすることは無い。

気絶するルーちゃんにカーシャがどっかから持ってきたバケツで水をぶっ掛けた。すると、ルーちゃんがゆっくりと目を覚ました。

「ううん……よく寝た。ってどこ!？」

ルーちゃんはルーファスに戻ったらしく、状況理解ができていない。

キヨロキヨロ辺りを見回して脳ミソフル稼働のルーファスにビビが力いっぱい抱きつく。

「よかったダーリン！」

「よかったじゃなくて誰か状況説明してよ（そこにいるのどこの誰!）」

道端にちやぶ台で置いて団らんする二人と、地面にあぐらをかいている武人風の巨乳のお姐さん。ルーファスには理解不能なシチエーションだった。

ようかんを食べ終えたモリーが重い腰を上げた。

「マルコ帰るぞよ、もちろんビビもじゃ」

「アタシもお〜！」

モリーの言葉にビビは顔を膨らませて不満満々だが、マルコは一気に元気を取り戻した。

「ビビ様、今すぐ俺たちと帰りましょう」

差し伸べられたマルコの手をビビは引っ叩いて振り払った。

「ヤダヤダヤダ、アタシはダーリンと一緒に暮らすんだもん！」

「ビビ様！ワガママを申さずに俺たちと帰るのです」

マルコがビビの腕を引っ張り、ビビがルーファスの身体に抱きついた。

ルーファスは片手を上げて質問です。

「なんか全体的に説明してくれるかな？」

「妾が説明してやるわ」

急に立ち上がったカーシャが口をモグモグさせながらマルコに手を向けた。

「まず、この人がマルコシアス侯爵。愛称はマルコちゃん、妾のいい実験台だ」

つぎにカーシャはモリーに手を向けた。

「次にこのつはグレモリー。愛称モリーで、好きな物は金銀財宝。そして、驚かないで聞けよ。な、なんとこの人がビビの母上なのだ！（まあ、養女だがな）」

説明された内容をルーファスは頭の中で整理整頓。まず、巨乳のお姐さんがマルコで、アラビアンな衣装を着てる方がビビの母親。

そして、ルーファスは時間差で驚いた。

「ビビの母親!？」

驚くルーファスの肩にカーシャが手をポンと置いてしみじみ語りはじめる。

「実はな、ビビは家出少女だったのだ。それで母親のモリーが遙々遠くの国からビビを迎えに来たのだ。つまりビビはモリーと一緒に帰らなきゃいけないのだ、わかるな？」

「そう……か、帰るんだ家に……」

素っ気なく言うルーファスにビビは涙を浮かべながら抱きついた。

「アタシ帰らないよ、ダーリンと一緒にいるんだもん」

マルコがビビを強引に引き離し、ルーファスに手を伸ばすビ

ビの身体をちょー強引に引きずる。

「人間のことなど忘れて帰るのですビビ様！」

「ヤダよ、帰りたくないって言ってるでしょ」

マルコに引きずられるビビの腕をモリーも掴んだ。

「帰るのじゃビビ！」

「ヤダヤダ、帰りたくない。ダーリンだってアタシが帰ってらヤダよね？」

空を仰いだルーファスはゆっくりと顔を下ろし、泣きじゃくるビビの顔をしっかりと見て言った。

「自分の家があるならさっさと帰りなよ、私は君に付きまわられてただけなんだから……（これで……いいんだよね）」

「……………」

ビビの涙が急に止まり何も言わなくなった。

モリーとマルコに連れられ小さくなって行くビビ。そして、歯を食いしばっていたビビが力いっぱい叫んだ。

「ダーリンのばかっ！」

異界のゲートが開かれ、ビビたちの姿は完全に消えた。

「……………楽しかったよ、ビビ」

ルーファスは空を見上げて口を強く結んだ。

第六話 流れ解散……

《一》

ビビが自分の世界に帰ってしまつて数日の時が過ぎ去り、ルーファスは昔と同じ平穩で退屈……でもない日々を過ごしていた。

いつもどおり朝を向かえ、いつも通りに学校に通い、ローゼンクロイツやエルザ、クラウスたちと楽しく会話する。

ただ、カーシャはあの一件以来姿を消してしまつて行方不明だ。それ以外はビビが現れる前の生活となんら変わらない。そう、昔とはなんら変わらない。

昔と変わらない生活。けれど今を生きるからつて昔がなくなるわけじゃなかった。

ルーファスはせっかくの休日在家でゴロゴロしながら過ごしていた。ちよつと前なら、部屋でゴロゴロしているとビビが乗つて来たものだった。けれど、ビビは帰ってしまった。

物音を聞いたような気がしてルーファスは急に立ち上がった。押し入れを開けた。けれど誰もいない。いるはずがなかった。

窓が開く音がしてルーファスは驚いて振り向いた。

「なんだ、クラウスか」

「なんだで悪かったな、誰かと間違えたのかい？（はあ、まだ

「元氣ないなルーファスは」

「いや、別に……（ビビが帰ってくるはず……ないよね）」

ルーファスは再び床の上に寝っ転がり、クラウドがルーファスの頭の近くに座った。

「元氣ないな……ビビがいなくなってから」

「そ、そんなことないよ、私は今日も元氣いっぱいだよ！」

慌てて立ち上がったルーファスを見ながらクラウドはため息を落とした。

「ビビとルーファスはいい線行つてたと思つただけだな（だから僕はビビに手を出さなかったのに）。君が元氣ないと、周りも元氣がなくなるだろう？」

「私は元氣だから……」

その声には力がなく、ルーファスはうつむいてしまった。

二人がしんみりした雰囲気浸っていると、タンスの引き出しがガタガタと揺れて、中から何か飛び出してきた。

「呼ばれて飛び出てチャチャチャ〜ン！」

「ビビ！」

思わずルーファスは声をあげたが 違った。

タンスから出てきたのはビビの形をしたパペット。それを操っているのはベル姐だった。

ビビが最初にルーファスの前に現れた時に言つたフレーズと同じ言葉で登場したベルは明るくあいさつをした。

「あほほほほ、ごきげんいかが？（と、悪質なイタズラで登場しちゃったり）」

サイターのイタズラだった。

ベルはダンスの引き出しから這い出すと、ルーファスの傍にちよこんと座った。

「ビビがハーデスに帰ったって風の噂で聞いたけど、本当らしいわねえん（フラれた男って本当に情けないわよね）」

ベルの心の声が聞こえたのか、ルーファスの心にグサツと槍が突き刺さった。かなりの精神的ダメージ。

「わ、私はビビが、い、いなくなっって清々してるんだからね！」

動揺しすぎ。

そこにベルが追い討ち。

「なんでもビビが帰る決め手をつくったのはアナタらしいわねえん、風の噂で聞いたわよおん（風の噂ってカーシャちゃんだけどおん）」

槍で射抜かれた傷に荒塩を練りこまれたルーファスは完全に魂を飛ばし、床に手をついて深く項垂れた。

ルーファスだっってなんであの時にあんな言葉を言ってしまったのかわかっていない。強いて言うならばノリ。それがちよつと今回は裏目に出た。

項垂れるルーファスの両肩にクラウドが優しく手を乗せた。

「ルーファス、顔上げるよ」

魂喪失のルーファスはピクリとも動かない。

クラウドの眉がピクツと動く。

「顔上げるよ、みんなルーファスのこと心配してるんだぞ！」

無理やりルーファスの頭を持ち上げたクラウスはグーパンチ！

根性を叩きなおす一発をルーファスの頬に入れた。

「最初から落ち込むならなんで止めなかったんだよ。僕だったら絶対に止めていたぞ！」

「クラウスはそーゆーの慣れてるだけだろ！ もういいよ、寝る、寝るつたら寝る。だからみんな早く部屋出てつてよ！」

自暴自棄になったルーファスに真剣な顔をしたベルが呟いた。「アナタは本当にそれでいいの？（やっぱり人間なんてこの程度なのね）」

「みんなで僕がビビのこと好きだったみたいない言い方しないですよ！」

「自分の気持ちに嘘をつくと後で後悔するわよ」

どこからともなく魔法のホウキを取り出したベル。彼女はそれを床の上で寝転がるルーファスの胸に突きつけた。しかもかなりの力で。ある意味グーパンチ。

「うっ……なにすんの！（いきなり胸押したら窒息するしー）」

「受け取りなさい、せんべつよおん。きつと何かの役に立つでしょう。じゃ、アタクシは帰るわよおん」

ベルはルーファスに魔法のホウキを渡すとダンスの中に戻って行った。と思いきや、すぐに顔を出して一言。

「この家は客にティーも出さないのおん？（……頑張りなさいルーファス）」

心の中でルーファスに言葉を送ったベルは本当に帰って行った。

ベルから託されたホウキを握り締めながらルーファスはうつぶき震えていた。それを見たクラウスは感動していた。

「ルーファス……ビビを迎えに行く気になったんだな！（やっぱりルーファスもやるときはやるんだな）」

「……こんなホウキ貰っても邪魔だよ！」

そういうオチかいっ！

突然立ち上がって部屋を出て行こうとしたルーファスにクラウスが声をかけた。

「どこに行くんだい？（今度こそ本当にビビを迎えに行く気には？）」

「おながが空いたから何か食べにキッチンに行こうかなあつて」

「周りの空気読めてないのか？（……見事な状況無視だな）」

「クラウスも食べる？」

「うむ、もらおう」

笑顔で即答。この人も場の空気無視だった。クラウスも駄目ジャン！

ちよっぴり小腹の空いた二人はキッチンへゴー。

キッチンの段ボール箱をモソモソとルーファスが取り出したるは、カップラーメン！

「これでいいよね？」

「まあ、それでいいのだが……なぜホウキ手放さない？」

「気にしなくていいよ、目の錯覚だから」

「目の錯覚って……」

ベルからもらった魔法のホウキをなぜかキッチンまで持って来ているルーファス。邪魔なら自分の部屋に置いてくればいいのに、ねえ？

ルーファスは二つのカッププラーメンにお湯を入れて、それをテーブルの上に置いてクラウスと一緒に三分待つ。

カッププラーメンとにらめっこしながらルーファスがボソッと呟く。

「呼ばれて飛び出てチャチャチャヤーン……なんてね」

「なんだいそのフレーズ？」

「なんでもないよ、ただ言ってみただけ」

「……？」

一分経過。

二分経過。

三分待たずにふた開ける。

固麺好きのルーファスは三分待たずにふたを開けるのだが、三分前にフタ開けるのは他にも意味がある。

フタを開けてカッププラーメンを食べはじめたルーファスは再びボソッと呟く。

「普通のカッププラーメンだよ」

「普通ってなにが？」

「いや、別に……」

「さつきから変だぞルーファス。ビビちゃんのこと考えている

のだろ？」

「……クラウドには関係ないよ」

「都合の悪い時だけ関係ないなんてズルイぞ」

煮え切らないルーファスにクラウドは、エルザのパンチを食らわしてやるうと拳を握ったとき、家のチャイムがピンポーンと鳴った。

ルーファスは箸でエルザの顔を指して次にキッチンの出口を指して一言。

「変わりに出てよ（めんどくさいから）」

「僕を誰だと思ってるんだよ（これでもこの国の王様なんだけどな）」

「わかってるよ、クラウドはクラウドだよ」

「はあ、わかったよ（これだからルーファスが好きなんだけどな）」

キッチンを出て行ったと思ったクラウドがすぐに帰って来たので、ルーファスは少しきよとんとした。

「誰だったの？」

キッチンに入って来たクラウドに続いて、ブロンド美女が入って来た。

「私だ」

クラウドのあとに入ってきたのはエルザだった。

エルザの姿を確認したルーファスはカップラーメンを食べる手を止めた。

「なんでエルザがうちに？」

「カーシャ先生からルーファスがビビを助けに行くと聞いて駆けつけたのだ」

「はあ？ カーシャにここ数日会ってないし、ビビを助けに行くつて、僕が？」

「そうだ、私はそう聞いたので駆けつけたのだ」

「だからなんで駆けつける必要があるだよ」

「これを届けに来た」

エルザはポケットからお守りを取り出して、ルーファスの手のひらに乗せた。そのお守りをまじまじ見て考えるルーファス。そして、ルーファスは書いてる文字を大声で読んだ。

「恋愛成就つてなに!？」

恋愛成就のお守り……生徒会長グッドジョブ！

ルーファスはカップラーメンを口の中に一気に食い、スープを一滴残らず飲み干してテーブルの上にはパンツと置いた。

と、同時の勝手口のドアがバンツと蹴破られた。

一同の視線が勝手口に向けられるのは、まあ当然。

「ふふふ、皆のもの待たせたな」

誰も待つてなかったけどカーシャ登場。

ドアの修理代は出してくれるのでしょうか？

カーシャは土足のまま台所上がり込むと、勝手に湯飲みを出して自分でお茶を入れ、寛いだようすでテーブルに着いた。あまりにも手馴れたようすなのが気になる。そう言えば、前にもルーファス宅のキッチンで寛いでいたような……常習犯!?

お茶を一口飲んだカーシャは真剣な顔をしてルーファスを見

つめた。

「行くぞ」

「はあ!？」

ルーファスは意味もわからずカーシャの顔を見つめるだけだった。最近ルーファスの口癖が『はあ』になりつつある。理解の範疇を超えたことが多すぎるのだ。

もう一度カーシャが同じ言葉を発する。

「行くぞ」

「いつ(When)?」

「今すぐにだ」

「誰が(Who)?」

「おまえだ」

「何で(What)?」

「ビビを助けにだ」

「なぜ(Why)?」

「それは自分の胸に訊きけ」

「どのようにして(How)?」

ルーファス&カーシャのQ&A。最後の質問に答えたのはエルザだった。

「この家の上空に飛龍を待たせてあるので心配するな」

そして、最後にルーファスが叫ぶ。

「なんてこつたい!(Oh my God!)」

キッチンに響いたルーファスの声はご近所さんまで響き渡った。

ルーファスの頭の上に“なんてこったい妖精”が飛び回ってしばらく一同沈黙。

短いようで長いような時間が流れ去った後、ルーファスがテールを両手で叩きながら立ち上がった。

「行けばいいんでしょ、行くよ、行きますよ、行きゃいいんだろコンチキショー！」

なんだか逆ギレ。

決意を固めた……ような感じのルーファスの腕をカーシャが掴んだ。

「じゃあ、行くぞ（青春だ！）」

魔法のホウキを手にとつてカーシャと一緒に勝手口から出て行くルーファスの背中に、まずエルザが声をかけた。

「幸運を祈る」

次にクラウス。

「パーティーの手配でもするかな」

ルーファスはニッコリ笑つて戦いに向かった。

《 》

勝手口を出てすぐにルーファスは自宅上空で待機する飛龍を発見。住宅街には降りて来られないらしく、屋根ギリギリのところまで待機している。どーやって乗るんだよ！

ルーファスは呆然と飛龍が旋回しているのを見ていた。

「（少し目が回ってきたなあ）」

なんて思っていたルーファスにカーシャが背中を向けながら声をかけた。

「妾の背中に乗せてやるから乗れ」

「意味不明」

「飛ぶぞ」

「飛ぶ？（ジェットホウキもなしにですか？）」

「おまえは黙って妾の言うことだけ聞いておればよい」

「拒否権は？」

「ない」

カーシャが“ない”と言ったらこの世には存在しない。国王だろうと神様だろうと、YESマンになるしかない。もちろん、ルーファスは二度三度とうなずいて否応なしにカーシャの背中に乗って担がれた。そしたら飛んだ。

どこからか鳴るジェット音。それはカーシャのブーツの底から鳴り響いていた。そして、カーシャの靴底から火が噴出して空を飛んだ。これなら飛龍まで楽々だね……エヘッ。

「カーシャ、跳んでる、飛んでる、トンデル!」

最後の『トンデル』は、『この人頭イカしてる』の意味。

ルーファスに乗せたカーシャは空をひとつ飛びして軽々と飛龍の中に乗り込んだ。

「この魔導具、ベルに試験運転を頼まれていたのだ」

嗚咽して吐きそうになっているルーファスのスーパールの袋が手渡された。

「へっばこクン、吐くんだったらこの中にね（ふあふあ）」

「ああ、ありがとーってローゼンクロイツ？」

「ナンダコンチキショー！」

そこにいたのはローゼンクロイツ&ワラ人形ピエール呪縛クンペアだった。

ルーファスがローゼンクロイツに何かを質問しようとする、ローゼンクロイツの手がルーファスの口を塞いだ。

「なんでここにいるかなんて無粋な質問はなしだよ（ふにふに）。それと吐くんだったら、その袋か上空垂れ流しでお願い（ふにふに）。ボクのおすすめは上空垂れ流しだよ（ふあふあ）」

「垂れ流さないよ。それとどうしても質問させて、なんでいるの？」

「ボクも行くからに決まってるのに……へっぼこクンはやっぱりおばかさんだなあ（ふっ）」

「別にバカとかじゃないと思うんだけど」

「じゃあ……アホ（ふっ）」

小ばかにした笑いを浮かべてローゼンクロイツはすぐに無表情に戻った。

いつもどーりのローゼンクロイツの反応。

が、いつものローゼンクロイツと違うところがあった！

触れないほうがいいかなと思いつつ、やっぱりルーファスは質問することにした。

「あのさあ、ずっと気になってたんだけど……頭に生えてるのなに？」

「にゃ？（ふにゅ）」

可愛らしい反応をしたローゼンクロイツの頭には、なんか触覚みたいのが生えていた。

ぴよんと出た一本の触覚に、ピンポン玉くらいの黄色い球がついてる感じ。そんな物体がローゼンクロイツの頭から生えていた。

ルーファスが触ろうとすると、ピシッと叩かれた。

「ボクの髪に触らないでよ（にゃー！）」

「いや、髪じゃなくてさ……その触覚みたいなの何？」

「触覚？（にゃ？）」

「だから、頭に生えてる触覚っていうか、アンテナみたいなの何？」

「ボクからは見えないよ？（ふにゅ）」

それは頭の上に生えているからです。

カガミでもあればいいのだが、誰も持ち合わせていなかった。結局、その話題は解決しなのまま流れてしまった。

地上を見ていたカーシャが二人に声をかける。

「もうすぐ着くぞ」

飛龍は徐々に降下し、なんだか見覚えのある学校のグラウンドに着陸した。

三人はすぐに飛龍から降りて、ルーファスは見覚えのある某学院を見回した。

「クラウス魔導学院じゃん！（って、ここに何の用なの？）」「なぜこんな近場に飛龍で来なきゃならなかったかは、エルザ

が令嬢だから。ビッグな人は移動手段もビッグなのです。

意味もわからずルーファスが立ち尽くしていると、ものの見事に置いて行かれた。

「早くしろ」

ムスツとカーシャは呟いた。

カーシャとローゼンクロイツは、すでにルーファスからとく離れた場所を歩いている。ルーファスは猛ダツシュで二人を追いかけた。

「ちよつと待て、肝心の私を置いてくつもりなの、つてかどこに向かつてるの？」

カーシャがルーファスの方を振り返って不思議な顔をする。

「んっ、言つてなかつたか？」

言つてません。

自己中心的な人はこれだから困ります。世界はカーシャで回っています。そーゆーことにします。

足を肩幅に広げて前方に見えてきた池を指差すカーシャ。

「学院裏にある池が月に通じる亜空間ベクトルになっているのだ！」

よくわからない説明だった。

意味がわからん、と思いつつルーファスは、カーシャに連れられるままに学院裏の池に着いてしまった。

この池は生徒の間でも有名な池で、物を落とすと女神様が出てくるとか、物を投げ込むと投げ返されるとか、珍獣アツガイたんが生息していると、ここで亀を助けると竜宮城に拉致され

るとか、いろんなウワサのある池だ。

で、これからどうするの？

仕方なくルーファスが『はあ〜い』と手を挙げた。

「カーシャ先生質問で〜す」

「なんだルーファス？」

「だからここに何しに来たの？（まさか僕が投げ込まれるのか
……コンクリ詰めにされて）」

「妾のあの説明を聞いても理解できないのか？（相変わらず察し
の悪い奴だ。だから女にもフラれるのだ）」

「あのお猿でもわかる説明してください」

「モリーの住まいは 白い月 にあるのだ。つまりこの池に映
る月を通して月にワープするわけだ。わかったな？」

意味は理解した。ただ、月って……どないやねん！

静かに佇む水面を見つめながらローゼンクロイツがもつとも
な質問をカーシャにした。

「月が出てないけど？（ふにふに）」

まだまだ日の高い日中。夜になるには随分あると思う。ま、
まさかのカーシャ計算ミス。

と思いきや、待つてましたとばかりにカーシャが低い笑いを
発した。

「ふふふふつ、そんなこともあるうと準備万端だ！」

ちまたで有名な胸の谷間からカーシャはアイテムを取り出し
た。

「夜騙しの香【地域限定バージョン】だ！」

夜騙しの香【地域限定バージョン】 読んで字の如く。地域限定である範囲内を、昼を夜だと騙してしまう自然の法則を無視した魔導具だ。二二世紀のネコ型ロボットよりもなんでもアリなカーシャ。

ブラツクな色をした球体をカーシャは上空高く放り投げた。すると、宙に浮かんだ球体から黒い霧がモクモクと出てきて、あつという間に辺りは夜になってしまった。ヴァンパイアには喜ばれそうな発明だ。

次にカーシャは胸の谷間に手をつ込むと、見るからに怪しげな緑色の液体が入った試験管を二つ取り出してルーファスとローゼンクロイツに手渡した。

「月には空気がないから、これを飲め（モルモットどもー）」
ローゼンクロイツは手渡された液体を躊躇せずに一気飲み。

けど、ルーファスは躊躇いに躊躇う。だって、緑色の液体から泡がブクブク出てるし、耳を澄ませば叫び声まで聴こえるし！！

カーシャは試験管の中身とにらめっこして固まっているルーファスの腕を強引に掴んで謎の液体を無理やり飲ませた。

「早く飲め！」

「うう……ぐく……はあはあ、一気飲みしてしまった」

「ルーファス偉いぞ、よくあんな得たいの知れない飲み干したな。ということ、これを饒別にやろう」

胸の谷間に手をつ込んで出したシルクハットをルーファスに被せた。

「カーシャ……なんでシルクハット？」

「貸すだけだからな。ちゃんと返しに來い」

「返しに來い？」

「そうだ、返しに來い」

「來いってことは來ないってこと？ てゆか、なんでシルクハットなの？ というより、使用料とか取らないよね？」

「質問は一つにしる」

「えーつと、じゃあ……カーシャは一緒に來てくれないの？」

「当たり前だ」

「そーですね、当たり前ですね。あなたがそう言うなら、当たり前なんですよーね。」

「妾は用事がある。今日は三丁目のスーパーでタイムセールがあるのだ（そんなものないがな、ふふっ）」

意外に庶民的なカーシャさん と、思ったらウソだった。

そんなウソなどルーファスはお見通しだ。もう何も言うまいとルーファスは心に誓った。カーシャはこーゆー人だ。

ルーファスがため息をついて肩を落としていると、池の水面からブクブクと泡が立った。

ローゼンクロイツは咳く。

「來るよ……ここのヌシ（ふにふに）」

「はあ？」

ルーファスはすっ呆けた表情をしていると、それは池の底から姿を現した。

へビのような長い首を伸ばして現れたのは首長竜だった。

こんなモンスターが棲んでるなんて聞いてませんでしたよ！
ローゼンクロイツは淡々と。

「この池の又シの又ツシーだね（ふにふに）」
「なんですかその珍獣は!？」

あれですか、ネス湖いるネツシーとか、池田湖のイツシーとか、芦ノ湖のアツシーとかの親戚ですか？

又ツシーは巨大な口を開けて襲い掛かってきた。

カーシャが叫ぶ。

「危ない二人とも!」

なんと、まさか、びつくり、カーシャが身を挺して守った!?
カーシャはルーファスとローゼンクロイツを池に蹴り落とし
た。

「うわあ!？」

ジャポーン!

水面に映った月が揺らめいてルーファスたちを呑み込んだ。
残されたカーシャと又ツシーが対峙する。

「人前に姿を見せるないつも言っておるだろう」

「キューキュー」

又ツシーは甘えるようにカーシャに頭をこすり付けている。

あれ？

なんか様子が可笑しいようですが？

「お前を飼っていることが知れたら、責任を問われるのは妾なのだぞ」

……カーシャのペットらしいよ!!

《三》

惑星ガイアには二つの月がある。一つは巨大人工衛星である赤い月、もう一つは自然衛星である 白い月 である。一般的には 白い月 は単純に月と言うことが多い。

月というのは常にガイアに片面しか顔を見せていない。だから、ガイアからは月の裏側を見ることができない。

そんな月の裏側の地下にあるモリー公爵の屋敷。

昼も夜もない月の世界だが、時間の概念はあるわけで、モリーとビビは昼食をとっていた。ちなみにすぐ横ではマルコが正しい姿勢で立っている。マルコは主人と食卓を共にしないで、あとで淑やかに食事をとるのがいつもの日課だったりする。

「ビビ様、お食事の手が止まっているようですが、今日も食欲がないのですか？（ここに帰ってきてからずっとこうだ）」

「食べたくな〜い、食欲な〜い、マルコの顔も見たくない、ママと食事するのモイ〜ヤ（もおこんな生活イヤ！）」

フォークとスプーンを持って子供のように駄々をこねるビビに対して、キラリと光るナイフを持ったモリーがあくまで静かに静かに言う。

「あの人間のことが忘れられないのかえ？」

「違うもん、ダーリンのことなんてとっくに忘れたもん。だってダーリンが悪いんだよ、ダーリンが……（帰れだなんて言うんだもん）」

声を沈ませながらもビビはフォークをお肉にグサツと突き立てた。気持ちが不安定だった。

ナイフをお肉の上でブルブルさせてるビビ見て、心配そうにマルコは深いため息をついた。

「ビビ様、金属のお皿が破損してしまいます、ナイフを上げてください。それと、あの小僧をダーリンと呼ぶのはお止めください、未練が乗っているように聞こえます。あと、ビビ様はレディーなので、足を開かずにお座りください。それから

」

「うるさい、もおいしいよ！ マルコもママも嫌い」

声を荒げて立ち上がったビビは部屋を出て行く寸前に振り返って叫んだ。

「マルコだって女っぽくないじゃん、ば〜か、ば〜か、ば〜か！」

マルコ的大シヨック！

精神的ダメージを受けてうずくまるマルコを尻目にビビは部屋を駆け出した。

ビビは嫌になるくらい長い廊下を抜けて自分の部屋のドアを開けた瞬間にフリーズ！

自分のベッドで女性が男性の上に乗っている。その光景を目の当たりにしたビビは硬直した。そして、強張った顔をした男性の方とビビの目が合って、その男性が爽やかに軽く手を振る。

「や、やあ、ビビ……久しぶり」

「ダ、ダーリンのばか！」

ビビのベッドの上にいたのはルーファスと……女性だと思っ
たらローゼンクロイツでした

男同士の危険な情事に鉢合わせてしまった。

でも、ルーファスにも言い分はある。

この状況を説明すると、亜空間ベクトルの出口がビビの部屋
のベッドの上で、最初に月の道を通ったルーファスがベッドに
ドンと落ちて、次にルーファスの上にローゼンクロイツがドン
と落ちたわけで、決して昼間から、あゝんなことやこゝんなこ
とをしようとしていたわけでない……と思う。

猛ダツシュしたビビはルーファスの上に乗るローゼンクロイ
ツを強引に掴みかかって引き剥がした。

「ダーリンを誘惑するなんて悪魔！」

悪魔に悪魔って言われるなんて……まあ言葉の綾だけだね。

投げ飛ばされたローゼンクロイツはホコリを払いながら立ち
上がって、相手をこばかにしたような笑いを浮かべる。

「……恋にライバルは付き物（ふっ）」

「ぐわっ、まだダーリンを寝取るつもりなのお!？」

女（？）の熱いバトルがはじまりそうなか、ひとりだけつい
ていけないルーファス。ルーファスはポカンと口を開けるしか
なかった。しかも、次のローゼンクロイツの発言でルーファス
の顎はガボーンって外れた。

「……嘘（ふっ）」

嘘かよっ！

……てゆーか、どこが嘘だよ。どの辺りが嘘だよ。なにに対

してが嘘なんだよ！

「ボクはもともと男女の色恋沙汰になんて興味ないよ（ふっ）」

そして、最後に不敵に笑うローゼンクロイツ。何を考えているかは不明。きつと、ローゼンクロイツの心の内を知っているのは、仲良しのワラ人形ピエール呪縛クンくらいだと思う本人だしね！

ベッドの上にちょこんと座ってアゴをガボーンとさせているルーファスの横にビビがちょこんと座った。ビビの丸くて愛くるしい瞳がルーファスの顔を映し出す。

「何しに来たのダーリン？もしかしてアタシを迎えに来てくれたとか？」

「そんなわけないでしょ、ちょっとコンビ二行こうとしたら道に迷ったってか、なんていうか……」

嘘ヘタすぎ！

普通の人間が迷って来れる距離でもないし、言葉に詰まっただけに嘘だつてバレるジャン！

ウキウキ気分のビビがルーファスの腕に絡み付いていると、ビビのようすを見に来たマルコが部屋に入って来た。

「ビビ様、食事を途中で抜け出すなどモリー様も……こ、小僧!?（なぜこいつらがここにいる!）」

刹那に抜かれるマルコの剣。

反射的にルーファスは身構えて、へっぴり腰で戦闘モード。だが、ルーファスの姿はシルクハットに魔法のホウキにビ―

チサンダル。ビーチサンダルってところがカッコ悪い。

剣を構えたマルコから殺気がモンモンと漲っている。ルーファスが少しでも変なマネをしたら殺されるに違いない。すでに格好が変だけどな！

あと変なところと言えば、例えばルーファスにビビが抱きついてるとかね。

こ、殺されるうー！

「小僧、ビビ様をどうするつもりだ！」

「どうもなにも、私はただの通りすがりで……（死ぬのか、死ぬのか僕は）」

「嘘をつくな！ ビビ様を無理やり連れ去る気なのであろう！

（やはりあの場で斬っておくべきだった）」

状況的にルーファスは殺られること確実。しかもビビから追い討ち。

「きゃーっダーリンに連れ去られるうー！」

ウキウキドキドキにはしゃぐニコニコ顔の緊迫感ゼロのビビが、きゃぴきゃぴしながらルーファスの腕に抱きつく。これを見たマルコは怒り頂点マックス！

「おのれ、おのれ、おのれ！ ビビ様をたぶらかすとは許せん！」

疾風のごとく駆けるマルコの一刃がルーファスを襲い、魔法のホウキでルーファスは剣を受けた？

木製のハズのホウキがマルコの剛剣を受け止めたのだ。さっすが魔法のホウキ……だから？

思わぬことにマルコは目を丸くして驚いた。

「たかがホウキで我が一刀を受け止めるとは……」

「マジ死ぬかと思った。ベル姐さんありがとう！」

あの時はマジで邪魔だと思ったホウキだったが、今は拳を握り締めてベル姐さんに感謝感激！

柄を握り直したマルコの一刀が煌き、ルーファスは紙一重で避けた。秘儀海老「反り！」

瞬時に作戦を考えるルーファス。

そして、閃き煌き、レッツトライ！

魔法のホウキに跨ったルーファスは逃げた。そう、彼は逃げた。敵前逃亡。逃げるが勝ち！

「ダーリン！」

自分の背中に向かって誰かの声がしたが、ルーファスは逃げる。

ホウキに乗って部屋を出たルーファスの後ろを黒狼に変化したマルコが口から炎を吐きながら追ってくる。ちよっぴり

逃げ切れそうもないかも。

冷や汗タラタラのルーファスは、藁にもずがる思いでシルクハットに手を突っ込んだ。

シルクハットと言えば、中から何かが飛び出すのお約束だ！
まずルーファスが取り出したのは 白いハット！

平和の象徴ですね、これでマルコと和解が……。

「できるかつ！」

さてさて、次に取り出したのは 万国旗！

世界各国の国旗が結ばれたアイテムですね、この国旗のように手と手を結んで和解……。

「役に立つかつ!!」

えーっと、次にルーファスが取り出したのは まきびし! やつとそれらしいアイテムの登場です。

忍者が追ってから逃げる時に使うというアイテムまきびし。ルーファスは地面にばら撒いた。

トゲトゲの金属のまきびしを踏んだ敵が『あいたーっ!』って言うてくれるアイテムなのだが、マルコは廊下をひとつ飛び、軽々とまきびしを避けた。

次のアイテムをルーファスが取り出そうとした時に、目の前に廊下の突き当たりが つまり壁。

ホウキは急には止まれない

ドン!

「うがつ!」

壁に激突したルーファスが床の上でへばる。

さらにそこへ牙を剥いたマルコが襲い掛かるうとしていた、その時だった!

鼻血ブー!!

壁に顔を打ちつけた衝撃で、時間差でルーファスは鼻血を噴出させた。

鼻血はマルコの顔に掛かり、運がいいことに視界を奪った。

眼眩ましを喰らったマルコが壁に……ゴン!

強く頭を打ったマルコは足取りをユラユラさせながら、眼は

かなり真つ赤に充血して怒りを露わにしていた。

「もう許さん！」

最初から許してもらえない気がしませんでした。

今度こそ鋭い牙をルーファスを噛み殺そうとした、その時だった！

「止めるのじゃマルコ！」

廊下に凜と響いたモリーの声。

マルコの牙はルーファスの服に食い込み、あと一歩のところ
で肉まで食い千切られるところだった。痩せてるから、肉なん
てないけどね！

ゆっくりと立ち上がるルーファスにモリーが手を差し伸べた。

「妾の宮殿ではなく、他のところでマルコと決闘するがよい」

「……へっ？」

モリーの手を掴もうとしていたルーファスの手が思わず止ま
る。

「妾はそちとマルコが戦うことに同意しよう」

「……はあ？」

つまり、マルコがルーファスに襲い掛かろうとしたのを止め
たのは、屋敷の中で暴れられるの嫌だったから。ごもつともな
理由ですな……あはは。

最初からタダでビビを取り返そうとは思ってないけど、もつ
と平和的に解決したいルーファス。

「ちょ、私は別に戦いたいわけではなくて、もつと話し合いと
かで解決できないかなあ。みたいな甘い考えで来たんだけど…

…」

が、そんな話なんて誰も聞いていなかった。

モリーがなにやらボソボソと唱えた次の瞬間、あらビックリ、ルーファスは月の表面に立っていた。

なんてこつたい！！

《四》

殺風景な月の上。

あるものと言ったら大小のクレーターとか、あとは星が綺麗とか、あとは…… 思いつかない。

月の上に立つルーファスと対峙する黒狼マルコ。そして、それを見守るモリー。なんだか状況がこんがらがってきちゃったよぉ〜！

もつれ合う運命の糸。

なんてカッコイイ言い方で誤魔化してみる！

とにかくヤルつきゃないと思つたルーファスは魔法のハウキを構えてみる。

構えてみる。構えてみる。構えてみる。

「次はどうしたらいいんだよぉ！（僕はもっと平和的な解決をしたいんだけど）」

泣き叫ぶルーファス。ルーちゃんじゃないルーファスは弱かった。ルーちゃんが攻なら、ルーファスは防。

よっし、逃げとけ！

魔法のホウキに跨ったルーファスは月の上を逃走。

ルーファスの後ろを追う黒狼マルコ。黒狼の姿こそがマルコの真の姿であり、この姿の時のこそマルコは真の力を発揮する。マルコの前足の付け根あたりが盛り上がり、肉の中から白い翼が皮を突き破って生えたではないか。次に尾が蛇のように鱗の覆われたものになり、その動きはまるで鞭のようだった。

これこそが神魔大戦のときに神々たちを大いに苦しめた魔獣マルコシアスの姿。

天に舞い上がったマルコは降下しながらルーファスに狙いを定めて必殺技　炎のつらら　を放った。

マルコの羽根から炎の槍がルーファスを襲う。この必殺技は一撃で約四〇〇〇平方メートルを火の海にできるといのだが、宇宙空間は空気がないから威力激減。ちなみに　炎のつらら　をマルコに与えたのは可学者ベルであり、ベルがマルコに不思議な薬を飲ませたことにより、能力を開花させたのだ。

ルーファスは上空から降り注いでくる　炎のつらら　を魔法のホウキを右へ左へさせながら避けつつ、シルクハットの中に入っていた紙切れを取り出して音読した。

「　これを読んでる頃はきつと苦戦して死にそうになってるに違いない。そこで、そんなルーファスのために取って置きの秘密兵器を今なら特別特価の一万ラウルで売ってやるうではないか。……売るのかよ！」

ルーファスは役立たずの紙切れを投げ捨てて、再びシルクハットの中に手を突っ込んで何かを取り出した。

「呼ばれて飛び出てチャチャチャャーン！」

ルーファスがシルクハットから取り出したのは、なんとビビだった！

出て来るなりいきなりビビはルーファスの身体に抱きついた。

「ダーリン！」

「うわあっ、止める、運転中だし！（落ちる落ちるー！）」

酔っ払い運転とでも表現すべきか、魔法のホウキが右へ左へ動き回る。それを上から狙っているマルコにしてみれば、狙いが定まらなくていい迷惑だ。

って、これってラッキー？

だがしかし！

みなさん、酔っ払い運転はよくありません　だって事故から。

ルーファスとビビを乗せた魔法のホウキが突然落下しはじめる。

そして、ドーン！

と、地面に衝突。飲酒してなかったのに事故った。原因は別にあつたのだ。

今日の格言　二人乗りは危ないからいけません！

地面落下したルーファスの上には当然のようにビビが抱きついて乗っている。

「ダーリン大丈夫？」

「う……うう……ふっはははは、あゝははははっ！」

ま、まさか……？

抱きついていたビビの身体に伝わるやわらかな膨らみ。自分より遥かに大きい胸、胸、爆乳！

「ダーリンもしかして……？」

「あゝははははっ、大魔王準備中ルーファス様光臨！」

グルグル眼鏡を外し、ビビを抱きかかえて立ち上がったルーちゃんは、ホウキを構えてマルコを待ち構えた。

降下して来たマルコは地上に降り立ったところでヒト型に戻り、ビビの瞳を見据えながらゆっくりと歩み寄ってきた。

「ビビ様、その小僧からお離れください」

「ヤダよあゝだ！」

「ビビ様！」

「アタシはやっぱりダーリンと一緒にいるんだもん。ねえダーリン？」

ビビに上目遣いで同意を求められたルーちゃんは、あっさりきっぱりさっぱり首を横に振った。

「いいや。ルーファスはどうか知らんが、わたしはおまえのことなど数多くいる愛人のひとりとしか見てないぞ」

「がぼ〜ん！」

ビビちゃん大シヨック！

でも、ビビちゃんは負けません。

「それでもアタシはダーリンに尽くすからいいよ」

「こんな一生懸命のビビの腕をマルコが掴んだ。」

「帰りましょっつビビ様」

「イヤー！」

嫌がるビビの腕を引いたのはルーちゃんだった。

「ビビはわたしの女だ」

「……ダーリン」

好きなひとの胸に抱かれトキメキモードでルーちゃんの横顔を見つめるビビ。でも、次の一言でゲンナリ。

「数多くのひとりのな」

「がぼ〜ん！」

ちよっぴりときめいたビビがバカだった。ルーちゃん相手じやビビは特別な存在になり得ないのだ。ではルーファスでは？

ビビの腕から手を放したマルコが剣を抜いた。

「やはりこの小僧を殺さねばならないようだな」

「望むところだ男女！」

ルーちゃんはビビの身体を背中に押し込めて魔法のホウキを構えた。

自分を賭けて戦いをはじめようとしてる二人を見て、ビビはちよっぴり胸弾ませてみたり。

「ダーリン頑張つて！」

ルーファスが防ならルーちゃんは攻め！

地面を蹴り上げたルーちゃんが普段のルーファスからは考えられないスピードでマルコに襲い掛かる！

大剣とホウキの柄が交じり合う。そして、それを挟み睨み合う二人の視線に炎が灯る

ひとりとは君主の愛娘を取り戻すため、もうひとは売られた喧嘩を買っただけ。動機はどうあれ戦いは白熱していた。

ルーちゃんはホウキの柄を使って相手を剣ごと押し飛ばしたところで回し蹴りを放つ。その回し蹴りを躲したマルコの顔面にすぐさまホウキのモツサモツサした部分が襲い掛かる。だが、マルコはついにホウキの柄を叩き斬ったのだ！

ホウキを斬られたルーちゃんに剛剣が振り下ろされる。

カーン！

鳴り響く金属音。空気がないから音がしないなんていう無粋なことは言わないで、魔法よ魔法。

ルーちゃんが相手の攻撃を受け止めたアイテムは魔法のフライパンだった。

「あゝははははっ、フライパンで加熱してメインディッシュに喰ってくれる！」

「戯言を抜かすな、俺の方こそ貴様を喰らってくれるわ！」

「ピコ・ファイア！」

フライパンに炎系魔法を宿して、次の攻撃に移ろうとしたルーちゃんの身体に突然異変が起きた。

「う、うう……」

胸を押さえてうずくまるルーちゃんはそのままだ面に膝をついてしまった。この時こそチャンスとマルコが剣を振り下ろすと思いきや、マルコは気高い武人であった。

「大丈夫か小僧、どうしたのだ？」

「胸が……この感覚は……覚えがあるぞ……ローゼンクロイツだな！」

ビシッとバシッとシャキッとルーちゃんが指差すと、ぜんぜ

ん違う方向から声が帰って来た。ええ、眼が悪いですから。

「……ルーちゃんこつちだよ（ふあふあ）」

ルーちゃんが指差した方向とは見当違いのところ、ローゼンクロイツがワラ人形に杭を打ち込んでいた。ルーちゃん古典ギヤグありがとう。

だが、どうして今更ローゼンクロイツが？

ルーちゃんは胸を押さえながらローゼンクロイツに手を伸ばした。

「なぜローゼンクロイツが……わたしのことあきらめたのではなかったのか？」

「ブッコロスゾ、テメエ！」

ピエール呪縛クンは今日も口が悪い。

そして、今になってラクダに乗って追いかけて来たモリー登場。

「万が一のことも考えて、その空色は妾たちの仲間になるように術をかけておったのじゃ」

うはっ、清ました顔してやること汚い。

主人は汚いが、マルコは苦しむルーちゃんに付き添っている。代わりにビビが戦闘に立った！

ビビはどこからともなく大鎌を取り出し、ブンブン振り回しながらローゼンクロイツに襲い掛かった。だが、ローゼンクロイツは意外に運動神経が良いので軽く避けて、ついでにビビのおでこにデコピン！

パシッ！

おでこにクリーンヒットを喰らったビビは痛みのみあまり倒れこみ、地面の上をゴロゴロ転がり回った。その時ルーちゃんは見た。

「あ、くまだ！」

揺れ動くビビのスカートの隙間から、こちらを覗いて笑っているくまさんを確認したのだ。

身体の芯から力の湧いてきたルーちゃんは信じられないスピードで走り、ローゼンクロイツからワラ人形セット一式を奪い取ることに成功した！

あからさまに『しまった！』という表情を作るローゼンクロイツ。

「そ、そんな！（ふにゃ）」

このセリフもワザとくさい。

そして、ローゼンクロイツは再びポケットからワラ人形セット一式を取り出した。ちなみにこのワラ人形の名前はジヨニー呪縛クン。

「何個持つてるんだよ！」

ルーファスは再びワラ人形を奪い取った。

が、ワラ人形はもう一つだったの！

その名もワラ人形マイケル呪縛クンだ！

「だから何個持つてるんだよ！」

ルーファスはローゼンクロイツの後頭部をド突いてワラ人形を奪った。

すると、さらなるワラ人形がっ！！

「いい加減にしろ！」&「いい加減にして！」

ルーファス&ビビが揃ってローゼンクロイツをド突いた。

そして、またまたワラ人形を取り出そうとしたとき　ピタツとローゼンクロイツの動きが止まった。

腐れ縁のルーちゃんは直感的にイヤな予感がした。

「来るぞ！」

「……はくしゅん！（にゃー！）」

ローゼンクロイツが大きなクシヤミを一発。

ルーちゃんが叫ぶ。

「猫還り　が発動した、逃げるぞ！（マズイぞ、こんなときに発動するなんて）」

いったいルーちゃんは何をそんなに焦っているのか？

ローゼンクロイツに変化が起こっていた。

頭からぴよんと出るネコミミ、お尻からぴよんと生えた尻尾、それはまさに猫系獣人の姿だった。

万物全てをあざ笑うかのごとく、ローゼンクロイツが口元を歪めた。

「にゃー！！！」

ローゼンクロイツが鳴き叫んだ瞬間、そこら中にネコの人形が溢れ返った。

これぞトランス状態のローゼンクロイツの必殺技『ねこしゃん大行進』だ！

実はこのねこしゃんたちは爆弾だったりする。

縦横無尽に走り回るねこしゃん同士がぶつかって、ドーンと

綺麗な花火を咲かせます！

ぶっちゃけ、巻き込まれたらタダじゃ済みません！

魔導バリア張ったモリーが目を剥いた。

「何事じゃ！」

見てのとおりの大惨事です。

次から次へと爆発が起こり、月のクレーターが増えていく。

ビビに襲い掛かるねこちゃん！

マルコが走る！

「ビビ様！」

だが、間に合わない！

ルーちゃんがビビを抱きかかえて爆発に巻き込まれた。

「ダーリン！」

爆発に巻き込まれながらもルーちゃんは身を犠牲にしてビビを守った。

地面に横たわったルーちゃんは身動きひとつせず、服はボロボロで、顔も煤で真っ黒だ。

ビビは傍らに膝をついてルーちゃんの体を揺すった。

「ダーリンしっかりして、死なないでよ！」

返事はなかった。

「ダーリン！！」

「う……ううん……ここは？」

「よかったダーリン」

「いったい……なにが？」

ルーちゃんの巨乳がへっこんでる

つまり、ルーファス

だ！

グルグル眼鏡をかけたルーファスは辺りの状況を確認した。で、見なかったことにした。

そこら中で大爆発の花火が咲き乱れていた。

「ローゼンクロイツの 猫還り か……放置して逃げるのが一番だね」

ニッコリ笑顔でルーファスは言った。

モリーとマルコは魔導バリアで必死に爆発を耐えていたが、そろそろ限界に達しようとしていた。

モリーがルーファスに顔を向けて叫ぶ。

「あの獣人をどうにかするのじゃ。さすればビビとのこと認めてやるうではないか！」

ビビは拳を胸の前で握ってルーファスに向かって笑顔炸裂。

「ダーリンファイト」

「ムリだよ！」

だが、ここでやらなきゃ男じゃない！

足をガクガクさせながらルーファスは奮い立った。

マルコも戦闘態勢に入っていた。

「俺がサポートする、その際に奴を止める！」

「止めるって言われてもやり方が……（とりえず、あの頭から生えるアンテナを抜いてみようかな）」

ルーファスが悩んでいると、すでにマルコはねこちゃんに向かって走っていた。

ねこちゃんの気が冴に取られている間にルーファスは走った。

「クイック！」

運動能力を上げ、一気にローゼンクロイツまで駆け抜ける。つもりだったが、いきなり爆発に巻き込まれた。

ドーン！

ぶっ飛んだルーファスの眼下に見えるローゼンクロイツの後頭部。

このまま落ちれば行ける！

ルーファスがアンテナを掴んだ！！

「やった！」

そのままルーファスは覆いかぶさるようにローゼンクロイツを押し倒した。

ぶちゅっ

全てを見ていた全員が凍りつく。

男×男の危険な情事発動！

ルーファスがローゼンクロイツを押し倒して、思いつき二人は熱きキスをしていた。

「うわっ！！」

慌ててルーファスは飛び起きて、袖で何度も口を拭く。

何度吹いても精神的には消えません！

キスをされたほうのローゼンクロイツは、眠り姫のように安らかに寝息を立てて眠っていた。どうやら魔力を大量に使って疲れてしまったようだ。

でも、どうやら一件落着いたようだ。

駆け寄ってきたビビはルーファスに抱きついた。

「やったねダーリン！ これでアタシたちずっと一緒にいられるよ。」

モリーとの約束だった。ローゼンクロイツをどうにかしたら、ビビとの仲を認めてくれると。

が、しかし！！

モリーは契約書を取り出してビビに見せた。

「この契約はもうすぐに無効になる」

「えっ、そんなハズないよぉ！」

そう言いながらビビも契約書をまじまじ見た。そして、目を丸くして口をO型に開けた。

「ダーリン大変なの、契約書見て！」

モリーはルーちゃんの鼻先に契約書突きつけた。けれど、書かれている文字は古代文字。

「読めないよ！」

声を上げるルーファスの前に、勝ち誇った顔をして立ちほだかるマルコが軽く咳払いをした。

「この契約書は代償を払わねば二週間で契約解除ができると記されているのだ！」

今日はビビとルーファスが契約を交わしてからちょうど二週間だったのだ。そして、契約を交わしたのは二週間前の午後四時ごろであり、契約条件はドラ焼き一〇〇個。

時間もなければ、月にドラ焼き屋さんがあるとも思えない。

ちよー絶体絶命！

モリーがマルコの説明に補足をした。

「契約がただ解除されるだけではない。悪魔との契約を破棄したそちは代償として魔物に八つ裂きにされるのじゃ」

状況理解をしたルーファスは地面に手について崩れ落ちた。

「ダーリン！」

マルコに腕を掴まれビビはモリー伯爵とともにルーファスから離れていく。だが、もうルーファスには何もできない。歯を食いしばって俯き、時間とともに魔物に八つ裂きにされるのを待つしかなかった。

エピソード

ルーファスが月に向かって数日が過ぎ去り、クラウスとエルザはキッチンでお茶とドラ焼きを食べながら団らんしていた。

「僕だったら最初から好きなレディを手放しマネしないよ」

「クラウス様は少し女遊びが過ぎます、もう少し立場をわきまえてください」

「レディを大切にするのは男の義務だろ。それに……本当に愛してる女性はこの世に一人だけさ」

「えっ？」

驚くエルザにクラウスは爽やかに笑いかけた。

そこで唐突に現れた謎の女。

「ふふっ、青春だな！」

カーシャだった。

ニヤニヤしながらカーシャはエルザを見つめた。

「エルザ、お前も新しい恋を見つけたようだな、ふふっ」

次の瞬間、エルザは刀を抜いてカーシャの首元に突きつけていた。

「からかうと容赦せぬぞ！」

「まあ、良いではないか。ルーファスにも春が来たのだから、なあルーファス？」

カーシャの振り向いた先ではルーファスがカップラーメンを

食っていた。

「か、からかわないですよ！」

「からかうぐらい何が悪いのだ。誰のお陰で助かったと思っておるのだ」

「まあ、あの時は本当に死んだと思ったよなえ」

「悪魔の契約は絶対だ。だからモリーは時間稼ぎをしてたわけだ。月に身を隠してルーファスとビビの契約が解けるのを待ってたわけだな。妾にはあの女の考えなどお見通しだったがな……ふふっ」

月の上で力尽きたルーファスは鼻から鼻水グジュグジュで、ティッシュでもないかとシルクハットに手を突っ込んだ。すると、ちょうどいい紙切れが出てきたではないか。けれどルーファスはその紙切れをまじまじ見つめて鼻をかむのをやめた。

紙切れにはこう書かれてあった。

これを読んでる頃はきつと一枚目の手紙を捨ててしまつて、苦戦して死にそうになつてるに違いないな、バカめ。そこで、そんなへっぽこのために取って置きの秘密兵器を今なら特別特価の二万ラウルで売つてやろう。しかも後払いでいいぞ。で、その商品というのが。

ルーファスはこのメモを読んで思わず叫んだ。

「この商品買った！」

この声に反応してシルクハットの中から何かが次々と飛び出した。

ルーファスはガッツポーズをしながら前方を歩くビビたちを引き止めた。

「契約成立だ、ビビをさっさと渡せ！」

ルーファスの声を聞いたモリーとマルコはまさかという表情をして振り向いた。

そして、最後に振り向いたビビは顔一杯に笑顔を浮かべ、マルコ制止を振り払ってルーファスのもとに駆け寄った。

「ダーリン！」

「ビビ！」

二人は母なるガイアの見守る月の上で抱き合った。

そう、山積みになされたドラ焼きの前で……。

カップラーメンをルーファスが食い終わると、廊下を誰かがドタドタと走って来てキッチンに駆け込んできた。

「ダーリン！」

やって来たビビはいきなり足を浮かせてルーファスの身体に抱きついた。

「抱きつかないでよ、僕は君を妻だと認めた覚えはないんだから！」

「なに言ってるのダーリン。ちゃんと本契約結んだじゃん！」

「あんな紙切れに僕のジンサー決められるなんてやだよお」

ふわりとスカートを巻き上げながら地面に下りたビビは、どこからともなく契約書を取り出してルーファスの鼻先に突き付けた。

「控え居ろう、この契約書が目に入らぬか！」

「入らないよ！」

と威勢がいいが、ルーファスの表情は明らかにビビってる。

どんよりとジメジメ空気が部屋に充満し、息をするのも苦しいほどだ。

ビビの持つ契約書が風もないのに激しく揺れる。

ルーファスは本能的に脅え、壁に背中をつけてぶるぶる震えた。

「ダーリン、逃げても無駄だよ……あはは」

まさにビビが悪魔の笑みを浮かべた瞬間、ルーファスは契約書から出てきた黒い影を見た。しかし、そこで記憶がブツリ。

「ギヤアアアーツ！」

あゝんなことや、こゝんなことが行われているため、描写を控えることをご了承ください（ペコリ 頭を下げる音）。

「ウギヤアアアーツ！」

「ふふっ、青春だな！」

ビビとルーファスがドラ焼き一〇〇個で交わした契約は絶対なものでした。

奥様の名前はビビ、そして旦那さまの名前はルーファス。

ごく普通の二人は、ごく普通の恋をし、ごく普通の結婚をしました。

でも、ただ一つ違っていたのは、奥様は仔悪魔だったのです。

おしまい